6-71

PL Shui waka shu
758 Shui waka shu
.24
A1
1927
cop.2

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

日本古典全集刊行會板

日本古典全集

拾遺和歌集

附 藤原公任歌集

與謝野寛
正宗敦夫
與謝野晶子

編纂
校訂

UNIVERSITY OF TORONTO
MAR 19 1964
East Asiatic Studies Library

PL
758
.24
A1
1927
cop. 2

「拾遺和歌集」及び「藤原公任歌集」解題

一、此卷には「拾遺和歌集」と「藤原公任歌集」とを收めた。

一、「拾遺和歌集」の撰者に就いて古來數樣の異說がある。(一)には「拾遺和歌集」と前後して成りたる「拾遺抄」を倂せて共に花山天皇(九六八「安和元年」――一〇〇八「寛弘五年」)の御撰とするもの、是れは藤原ノ清輔(――一一七七「治承元年」)の「袋草紙」、その弟僧顯昭の「後拾遺抄」、塙保己一(一七四六「延享三年」――一八二一「文政四年」)の「群書類從本拾遺抄奥書」、及び現代の和田英松博士の「御撰解題」(「列聖全集」本)等の說である。(二)に「拾遺和歌集」を花山天皇の御撰とし「拾遺抄」を公任の撰とするもの、是れは順德天皇(一一九七「建久八年」――一二四二「仁治三年」)の「八雲御抄」の外、僧頓阿(一三〇一「正安三年」――一三八四「元中元年」)の「井蛙抄」、源ノ通勝(一五五八「永祿元年」――一六一〇「慶長十五年」)の「勅撰次第」、藤原ノ實熙(一四五七「長祿元年」四月に左大臣を罷めたる人)の「拾芥抄」、吉田令世(活堂、德川末期、安政頃の水戶の學者)の「歷代和歌勅撰考」等の說にして、曾て藤原ノ定家(一一六二「應保二年」――一二四一「仁治二年」)も此說であつた事は「三代集之間事」が傳へてゐる。(三)には「拾遺和歌集」を公任の撰とし「拾遺抄」を花山天皇の御撰とするもの、是れは「八雲御抄」と「拾芥抄」とが別に一說として記したる所である。(四)に「拾

遺抄」に就いては云ふ所無く、單に「拾遺和歌集」を花山天皇の御撰とするものは「增鏡」の說である。(五)に「拾遺和歌集」を以て花山天皇の御撰にあらずとして、「拾遺集は何處(イヅコ)の傍人(カタヘビト)か書き集めつらん」と云ひ、「花山の御撰など云ふは甚だしき僻事(ヒガゴト)ぞ、善く見ば必ず然らぬ事見ゆべし」と述べたのは賀茂ノ眞淵(一六九七「元祿十年」——一七六九「明和六年」)の「新(ニヒ)まなび」の說である。

一、我我の研究したる所では、右の諸說の中(ウチ)で眞淵の非御撰說に敬服すると共に、「拾遺抄」をも「拾遺和歌集」をも共に藤原ノ公任の撰と推定する。是れは古來何人も未だ云はざる新說である。我我は前述の諸說を批評する時が無いから、自(ミヅカ)らの推定を基礎づける理由だけを茲に述べて置く。「拾遺抄」と「拾遺和歌集」との成立の前後に就ても平安末期以來異說が有つたが、其れは和田英松博士が「御撰解題」に於て、藤原ノ行成(ユキナリ)(九七二「天祿三年」——一〇二七「萬壽四年」)の「權記」にある「長保元年(九九九)十二月十四日、癸亥、詣二東院一、奉レリ返シ下先日所ノ借シ給フ拾遺抄ヲ上、歸ル宅ニ」と云ふ一條を引用して、「拾遺抄」が先きに成つた事を立證せられたから既に議論の餘地が無い。世人は博士の「權記」に由る發見を多とすべきである。

一、さて我我が「抄」をも「集」をも公任の撰とする理由は、(一)「抄」に撰ばれた歌が「集」に省かれざると共に、「抄」に於て「讀人知らず」となつてゐる歌で「集」に名を明かにしてゐる歌が多い。是れは同じ撰者の手に成つたからだと想はれる。(二)「抄」も「集」も公任の家に緣故のある歌が過度に多く採

撰されてゐる。即ち（ア）清愼公と云ひ小野ノ宮ノ太政大臣と云ふは、公任の祖父藤原ノ實頼である。（イ）廉義公は公任の父の關白頼忠である。（ウ）右大將實資は實頼の孫、左衞門ノ督齊敏の子、實頼が養つて子としたので、公任の爲めには從兄にして叔父である。（エ）大貳高遠は同じく實頼の孫、齊敏の子、實資の兄である。以上は公任の父方の關係。（オ）中務ノ宮具平親王は公任の母嚴子女王の甥である。（カ）謙德公と云ひ一條ノ攝政と云ふは代明親王の壻、惠子女王の夫藤原ノ伊尹である。（キ）惠子女王は公任の伯母である。（ク）少將義孝は伊尹の子。（ケ）左大辨行成は伊尹の孫、義孝の子である。（コ）花山天皇は伊尹夫婦の外孫にして公任の從弟で在らせられる。以上は公任の母方の關係。（サ）粟田殿即ち關白藤原ノ道兼の粟田の山莊へ集つた歌人の歌を多く取つたのは、公任の妻が昭平親王の女にして道兼の猶子となり、道兼の二條殿に住んで居た關係からであらう。（シ）中將道信は藤原ノ爲光の子にして道兼の猶子である。以上は公任の妻の關係。是等の人人が「拾遺和歌集」の詞書及び歌に現れてゐる所が多く、此中の數人に清愼公、謙德公、廉義公等の謚號を用ひたのは特に公任の親緣に捧げた敬意と見られる。(三) 公任と同時の作者の歌が嚴選せられて採錄せられた歌數が少なく、中には一首も採られない作者さへあるのに、公任の歌が誰よりも多く採られてゐる。眞淵は花山天皇の御撰で無いことを云ふ爲めに、「善く見ば必ず然らぬ事見ゆべし」と云つたが、我我は更にまた「善く見ば必ず公任の撰なる事見ゆべし」と云ひたい。和田博士は「花山法皇は、さきの二つの集（古今、後撰）に入らざる歌を採り拾ひて拾遺集と名づけ

給へり」と有る一節を引いて「後拾遺和歌集は白河天皇應德の末（一〇八六「應德三年」九月）に撰進せしものにて、此集（拾遺和歌集）の御撰を距ること遠からざれば、最も其徵とすべし」と云はれてゐるが、「拾遺」と「後拾遺」との間隔が纔かに八十年であるからと云つて、「後拾遺集」の序言が必ずしも信ぜられなかつたからこそ——云ひ換れば疑はしい所が有りたればこそ「八雲御抄」の一說を初め他の異說をも生じたのであらう。また和田博士は花山法皇の兩皇子にして冷泉上皇の御猶子で在らせられた昭登、清仁兩親王の御袴着の時、左大臣藤原ノ道長が法皇に奉つたと想はれる歌に「冷泉院ノ五六の親王、袴着侍りける頃、云ひおこせて侍りける」と有る詞書が臣下の筆つきで無いと云ふ理由から「集の〔花山天皇の〕御自撰なるべき事を證すべきなり」と云はれたが、是れは道長の歌をお受けになつた法皇の御立場になつて撰者が詞書を加へたとも考へられ、また法皇から提供遊ばされた資料を撰者が其儘用ひたとも考へられる。此外「初めて平野ノ祭に男使立てし時、歌ふべき歌詠ませしに」と云ひ、「左大臣ノ女の中宮の料に調じ侍りける屏風に」と云ふ詞書の二首は、作者は故らに「讀人知らず」にしてあるが、是れは定家も早く述べた如く花山法皇の御製であるから、法皇の御立場から斯く詞書を書くのが當然である。是れを以て花山天皇の御撰とは斷じ難い。（四）公任の撰である「和漢朗詠集」、「卅六人撰」、「金玉集」等に有る歌の撰び方が「拾遺抄」及び「拾遺和歌集」と一致してゐる。是れは久しく歌の素人研究者であり併せて素人作者である我我編者に於て、明かに撰者たる公任の趣味好尚の反映であると直感される。

一、以上の四つを重なる理由として、我我は「抄」をも「集」をも公任の撰と推定する。臆想ふに、兩集とも結撰の本は花山天皇の思召に出つて公任が實際の撰に當つたのであらう。「抄」は第一稿本とも云ふべきものであり、「集」は「抄」を增大して編まれた完本であらう。公任が撰んだので公任の趣味にも偏し、また公任の親緣に關係した類の資料が多く集まり、特に私する意圖は無かつたにせよ、上述のやうな結果にもなつたであらう。さうして花山天皇の御製がすべて「讀人知らず」となつてゐるのは本より天皇の思召に出る事に違ひない。また天皇が之を勅撰として採用し給ふ爲めには、顯昭の「後拾遺抄」の說の如く、一部に天皇の思召で改作迄はした所が有つたかとも想像される。「拾遺抄」にも公任の「歌集」にも有る「朝まだき嵐の風の寒ければ散るもみぢ葉を着ぬ人ぞ無き」と云ふ歌の四句が、此の「拾遺和歌集」に於て「紅葉の錦」となつてゐるのは、「井蛙抄」の說のやうに天皇の御改作であつたかも知れない。また斯くして「拾遺和歌集」は花山天皇の勅撰に採用せられたので、花山天皇御撰說も生じたのであらう。紀ノ貫之（ツラユキ）等の撰進した「古今和歌集」が醍醐天皇の勅撰となり、源ノ順（シタガフ）等の撰進した「後撰和歌集」が村上天皇の勅撰となつたのであるから、公任の撰進した「拾遺和歌集」が花山天皇の勅撰と稱せられる事は誤では無い。唯だ御自撰では無いのである。

一、次に「拾遺和歌集」の完成したのは、「小右記」に出ると、一條天皇の寬弘二年（一〇〇五）四月二日の條に「昨以二和歌一首一被レ贈二左金吾一云」として書かれてゐる「谷の戸を閉ぢや果てつる鶯の待つに聲

せて春を過ぎぬる」と云ふ道長の歌が此集に採られた歌の最も新しいものであり、行成の官名の左大辨は「公卿補任」に由ると寛弘二年六月十九日に右大辨から轉じた最も新しい官名であるから、其年の六月以後、翌寛弘三年に亘る間の事であらう。寛弘二年に花山法皇の御年は卅八歳で入らせられ、公任は四十歳であつた。法皇は間も無く寛弘五年（一〇〇八）二月八日に四十一歳を以て崩ぜられたのである。

一、第一稿本の「拾遺抄」は、行成の「權記」に由ると、既に長保元年（九九九）十二月以前に撰ばれて、花山法皇の御手許に備へられて居たのであるが、七八年後の寛弘二三年に撰ばれた「拾遺和歌集」は、「榮華物語」（初花）に由ると、早くも寛弘五年十一月、一條天皇の中宮彰子が敦成親王（後の後一條天皇）の御産を終つて入内し給ふ時、父道長からの贈り物の中に「古今、後撰、拾遺など帖に造りつつ、侍從中納言行成と延幹と、各草紙一つに四卷を當てつつ書かせ給へり」と云ふ記事が見え、また前大宰權帥藤原伊周が寛弘五六年の間に、「古今、後撰、拾遺など」を自ら書寫したと云ふ記事が見えてゐるから、此集を平安末期の「袋草紙」以來「三代集」に加へて稱し、勅撰歌集として「古今」、「後撰」に次ぐ尊敬を拂つた事は既に一條天皇の當時からであつた。

一、さて「拾遺和歌集」は、「後拾遺和歌集」の序に藤原通俊（一〇四七「永承二年」――一〇九九「康和元年」）が「先きの二つの集（古今、後撰）に入らざる歌を採り拾ひて拾遺集と名づけ給へり」と述べた如く、「拾遺」の稱の意義は明かであるが、併し「八雲御抄」に順德天皇が早く「古今、後撰、誤多々

入ル、於テモ萬葉集ノ歌ニ多ク入ル、非ニ誤讀ニ歟」と指摘し給ひ、「新まなび」に眞淵が「萬葉を讀み誤り、古き詠み人を違へなどせしこと數へ難し」と云ひたるやうに、「古今」、「後撰」の歌を重ねて採り、「萬葉集」の歌を讀み誤りたるばかりで無く、故意に詞書をも、作者の名をも、歌の字句をも書き改め、柿ノ本ノ人麻呂が唐へ渡つたと云ふ如き無稽なる事をさへ加へてゐる。眞淵が「人麻呂は萬葉を見よ」と云つて此集に誤られざらん事を警告したのは尤もである。「萬葉集」の歌が多く加へられたのは近く村上天皇の御代に、源ノ順、大中臣ノ能宣、清原ノ元輔、紀ノ時文、坂ノ上ノ望城等、謂ゆる梨壺の五歌人等に由つて復興せられた「萬葉集」研究の餘波とも見るべく、その甚だしい讀み誤りは當時の研究の如何に蕪雜であつたかを反映してゐるものとして許容されるが、「古今」、「後撰」の歌の重出する事の多いのは、撰者の意を知るに苦まざるを得ない。さりながら右二集以後、村上天皇より一條天皇に至るまでの歌を知るには缺くべからざるものである。

一、「拾遺和歌集」の底本には大本の古版を用ひた。刊記が無いから出板年月は不明ながら、書體と體裁より考へて寛永以後、正德以前の印行であらう。但し編者の用ひたものは其古板に由つた後摺本である。猶例に由つて漢字を増し、傍訓を施し、假名遣を訂し、「」此印の中に掛詞、緣語、人名等の補注を添へた。

一、歌の中に物の名を隱して詠む謂ゆる「物名」は、太抵は言語の遊戲に屬し、詩歌として獨立し難いもの

であるが、今日より見て、博物學其他の學問上より參考となる所が多く、文獻は微物と雖も疎略にし難いものである。現に此集の「物名」にも、關東の語に傳はつてゐる「雁皮の花」が「カニヒノハナ」として入り、朝顔の別名「ケニゴシ」（牽牛子）が「本草和名」と一致し、今も關東語である「シモツケ」（下野）と云ふ草花の名も發見せられる。また食物に「ネリガキ」（錬柿）、「マツタケ」（松茸）、「コニヤク」（蒟蒻）、「ウルカイリ」、「ツツミヤキ」等を見受けるのも、「和泉式部歌集」に「ミソ」（未醤、味噌）の語が有るのと共に面白い事である。

一、藤原ノ公任（キンタフ）（九六六「康保三年」――一〇四一「長久二年」）は關白太政大臣頼忠（ヨリタダ）の長子、その生れた時は祖父實頼（サネヨリ）が左大臣であり、翌年に同じく實頼が關白太政大臣となつた。公任が天元三年（九八〇）に十五歳にして元服した時、父頼忠は既に太政大臣であり、姉遵子は圓融天皇の女御（後に中宮）であつたが、その元服は特に宮中の清涼殿に於て行はれ、圓融天皇が親しく冠を授けられた。是れは曾て光孝天皇が宮中の仁壽殿に於て藤原ノ時平（トキヒラ）に親しく冠を授け給うた以來の優典であつた。次で永觀二年（九八四）十一月に妹諟子が花山天皇の女御となり、天皇が寛和二年（九八六）六月に俄かに讓位して落飾遊ばされるまでは、父頼忠が政權上得意時代であつたから、十八九歳の頃、左近衛ノ權中將にして、兼ねて讃岐ノ權ノ守、尾張ノ權ノ守、伊豫ノ權ノ守、備前ノ權ノ守等を歴て、正四位下に進んで居たが、やがて一條天皇の御代となり、藤原ノ兼家（九三〇「延長八年」――九九〇「正暦元年」）の一門に政權が移動し、間も無く

永祚元年（九八九）六月に父頼忠の薨じたる以後は、官位の上に於て公任は永く失意の人であつた。失意と云つても祖父及び父を關白太政大臣としたる家格の上より云ふのである。義父の薨じたる後にも、永延三年（九八九）に藏人頭に補せられ、翌永祚二年に備前ノ守を兼ね、正暦三年（九九二、公任廿七歳）藤原ノ道隆の關白時代に參議を拜して上卿に列し、近江ノ守を兼ね、同じ頃内大臣藤原ノ道兼（後、右大臣、關白）の猶子にして、昭平親王の女である姫君の婿となり、長德元年（九九五）に右兵衞ノ督、兼近江ノ守、兼皇后宮「姉遵子」太夫となり、翌長德二年に右兵衞ノ督、兼檢非違使別當、兼播磨ノ守となり、長德四年に右衞門ノ督、兼檢非違使別當にして勘解由長官を兼ね、長保二年（一〇〇〇）に從三位に叙せられ、翌長保三年に正三位に叙し、左衞門ノ督に轉じ、寛弘元年（一〇〇四）に左衞門ノ督にして中納言に任ぜられたが、此時藤原ノ齊信の爲めに位階を超えられて（齊信は從二位）心平かならず、病と稱して朝廷に出です、上表を文章博士大江ノ匡衡に書かせて職を辭したが許されず、ここに於て從二位に叙せられ、四年の後、寛弘六年（一〇〇九）に至つて權大納言に任ぜられ、更に十二年の後、治安元年（一〇二一）に按察使を兼ね、正二位に進むのであつた。しかも官は權大納言に終り、その住する所に由つて世に「四條ノ大納言」と稱せられた。その資質聰敏、諸藝を一身に兼ね、當時の公卿階級に在つて詩才、音樂、和歌を善くすと稱せられ、また典禮にも通じ、源ノ俊賢、藤原ノ行成と共に納言として其事に當つたが、朝儀式目は多く公任の家に出でた。寛和二年、廿一歳にして花山天皇の宮中の歌合に判者となつたのは父の關白の勢

力にも由るのであらうが、若くして早く當時に歌才を認められて居た事が想はれる。攝政藤原ノ道長が諸卿と共に山城の大井河に遊び、詩歌管絃の三つの船を浮べて、各の船にその適才を乘らしめたる時、公任は和歌の船に乘り、「朝まだき嵐の山の寒ければ散るもみぢ葉を着ぬ人ぞ無き」と云ふ一首を詠じて人を感歎せしめたが、後に公任自ら人に語つて、其日若し詩の船に乘つて居たならば名を後世に傳へたであらうと云ひ、詩の船に乘らなかつた事を悔いたと云ふのは「大鏡」、「古事談」、「十訓抄」、「袋草紙」、「古今著聞集」等の傳ふる有名なる佳話である。（併しながら此歌の詞書は「拾遺和歌集」には「嵐の山の下をまかりけるに、紅葉の甚く散り侍りければ」とあり、「藤原公任歌集」には「法輪に詣で給ふ日、嵐山にて」とあるから、其日の船に於て詠んだのは此歌で無いやうである。）また公任は漢文學を高岳ノ相如に學び、詩は、早く散逸して其名を傳へないが、「右衞門ノ督」と云ふ署名を以て「本朝麗藻」に數首の詩を留めてゐるのを見ると、その自負する所に背かず、當時搢紳の雅會に缺くべからざる作者の一人であつたと想はれる。（「日本古典全集」第一回刊版の「本朝麗藻」に右衞門ノ督を藤原ノ賴通としたのは編者の誤であつたから茲に訂正する。）如此く、公任は、官位に於て父祖に及ばなかつたが、文雅の人として、特に歌人として當時に推重せられ、彼れ自身も和歌ノ第一人者を以て任じ、之に努力する事に由り政權上の失意を慰めるのであつた。萬壽元年（一〇二四、公任五十九歲）に内大臣藤原ノ教通（後の關白太政大臣）を婿とする愛女を失つて後は、官を放棄に厭き、上表して官を辭した。翌萬壽三年（一〇二六、公任六十一歲）

洛北長谷(ナガタニ)に入つて出家するのであつた。其時に藤原ノ道長が「往時(イニシヘ)は思ひ掛けきや取り交(カハ)し斯く着んものと法の衣(コロモ)を」の一首と共に法衣を贈つてゐる。曾て公任の青年時代に、藤原ノ兼家が公任の才を認めて、「我が子等には攝中將（公任）の影を踏む者すら無い」と述べた時、兼家の子の道隆と道兼とは慚ぢて頭を垂れたが、獨り公任と同齡の道長は「我は公任の影を踏まないかも知らぬが、彼れの面(ツラ)を踏まう」と私語した事があつた。其れ程公任は青年にして早く當時に認められた才子であつたに關らず、運命は政權に於て彼れに幸ひせず、道長の顯榮の上に其豫言を實現せしめたのであつたが、茲に至つて、社會上の競爭者たる道長は先づ寛仁三年（一〇一九）三月に得意の絶頂を以て出家し、公任は六年後に失意の果(ハテ)を以て出家したのである。さうして道長は萬壽四年（一〇二七）十二月、六十二歳を以て世を去つたが、公任は山莊に閑居して吟詠と著述とに餘生を樂み、歌人として益益(マスマス)一世の重きを爲しながら、長久二年（一〇四一）まで生き長らへて、その正月、七十六歳の高齡を以て薨じたのであつた。

一、公任の著述は、「拾遺抄」及び「拾遺和歌集」が共に其撰進する所にして、「拾遺和歌集」が花山天皇の勅選に採用せられたと我我が推定する事は既に述べた。其外、有職に關しては彼れの博識の一端を窺はしむるものに「北山抄」があり、詩歌集としては「和漢朗詠集」、「三十六人撰」、「前十五番歌合」、「金玉集」及び彼れの家集「公任卿集」等があり、歌學の書としては「和歌九品」、「新撰髓腦」、「深窓祕抄」、「古今集序注」、「[illegible]歌枕」等がある。此中、「序注」は後の僧顯昭の「古今集序注」に引用されたる所に

由つて其斷片を窺ひ、「歌枕」はまた後の阿闍梨隆源の「隆源口傳」其他に出つて名を知る外、その書を傳へない。「北山鈔」が典禮故實の上に、「和漢朗詠集」が趣味好尚の上に、併せて當時及び後世を益したる事は云ふまでも無く、特に後者は同時の藤原行成の能筆に由つて、久しく墨蹟の權威となり、今日も猶臨池家に愛重せられてゐる。しかも公任の著述にして最も多く後世の指導に役立ちたるものは其他の歌學の書である。我國に詩學の端を開けるものは平安初期に於ける僧空海（七七四「寶龜五年」――八三五「承和二年」）の「文鏡祕府論」であるが、空海の漢詩に就いて述べたる所に刺激せられて、漢詩の六義を短歌に擬し以て歌學の萌芽を示したるは、同じく平安初期の紀貫之（ツラユキ）（？――九四六「天慶九年」）であつた。爾後「源氏物語」（たまかづらの巻）に紫式部が述べたる如く、短歌に關して素朴なる指導を爲せる謂ゆる「髓腦」の書が續々と發生したのであるが、其等は概ね散逸し去り、而うして今日に傳へられたるものは公任の著述を以て最も古しとする。猶是等の書は他日「日本古典全集」の「歌學全集」に採錄する時を待つて少しく評言を加へたい。

一、公任の歌學は、貫之に本づいて貫之よりも複雜になつてゐる。約して云へば、古を學んで古に僻せず、新に就いて新に流れず、彼れの語を以てすれば、「心深く、姿清げに」、「詞妙（トコタヘ）にして、餘りの心さへあるもの」を短歌の極致とし、しかも淨土の九品傳に擬して歌を上中下三品に分ち、その三品に各三種の段階を認めて、「心、姿、相具すること難くば、先づ心を取るべし、終に心深からずば姿をいたはるべし」と

云ひ、著想と表現との完璧の外に幾多の許容を示したる所、抽象論としては何時の世にも他を首肯せしむるに足るべき中庸穏健の説である。唯だ憾むらくは詩人としての天賦の乏しかつた爲めに、彼れが實際の創作は眞之を宗として遙かに及ばず、今日より顧みて特に清新優秀の歌を數へ難い。彼れは到底同時の女詩人和泉式部の如き人間的情熱をも詩人的敏感をも持合さなかつた。また彼れが掛詞、緣語等の遊戲的修辭を厭ふ色の無かつたのは時代の反映として止むを得ないが、併しながら彼れの教養の廣さと作家としての努力との爲めに、著想にも表現にも奇僻の跡無く、また常識的平語に陷ること無く、その歌學と共に、その創作もまた總べて中庸穏健の實例を遺してゐる。是れが當時に於ても、後世にまでも歌壇の先匠たる盛名を博し、世の尊敬を受けたる一つの理由であらう。また門閥を尊ぶ時代に於て、彼れが父祖重代の名門を背景とし、自らもまた四條大納言と稱せられたる位地と、其の長壽にして當時他に彼れを凌ぐべき博識多能なる歌人の存在しなかつた事とは、彼れを一代の桂冠歌人たらしめるに至つたであらう。更にまた彼れの後に興つた平安末期より鎌倉初期へ掛けての歌學者歌人が彼れを歌學の祖として紹述する事に由り、彼れの崇拜者を激增せしめたであらう。彼れの在世時代に未だ和歌の師承は起らなかつたが、しかも歌を以て隱然他の師表となる事實は彼れの上に存在し、後の歌學の諸流派を發生するに至る先蹤は實に彼れに由つて始められたのであつた。「十訓抄」、「袋草紙」等の傳ふる所に由ると、當時彼れが他人に加へたる批評の片言隻語は、善くその人を感泣せしめ併せて悶死せしむる威力が有つた。公任が短歌の典

型たるべき作例」して編述したる「金玉集」に「倭歌得業生、柿ノ本ノ末成撰」と署名してゐるのを見ても、彼れが如何に歌人歌學者たる専門家意識の顯著であり、斯道の權威を以て自任して居たかが窺はれる。順徳天皇は「八雲御抄」に彼れを評して「公任卿、寛和の頃より天下無雙の歌人として既に二百餘歳を經たり。在世の時は云ふに及ばず、經信、俊頼以下、近くも俊成存世までは、空の月日の如く仰ぐ」と仰せられてゐる。猶また天皇が「公任卿ノ歌、名譽はとは覺えず、少し如何にやらん有れども、さすが歌のさま、善くこそ見え侍れ」と仰せられたのは確評である。

一、公任の歌集は「公任卿集」と稱するのであるが、我我は便宜上茲に「藤原公任歌集」と題して此の「日本古典全集」に採錄した。歌集は彼れが長谷に隱栖したる後、その晩年に自撰したものと思はれるが、その詞書に多く敬稱を用ひ、他人が筆錄したる如き所を交へたるは、彼れの自尊心から、上卿の歌は斯かる風に詞書を書くべきものであると云ふ意圖を以て自ら敢てしたる事であらうと推定する。公任が自尊心の強かつた人である事は、曾て寛弘の初めに中納言を辭する時、當時の名儒であつた紀ノ齊名、大江ノ以言二家に、彼れに代つて辭表を書かしめたが、共に意に滿たずして更に大江ノ匡衡に囑した。匡衡は之を諾して、しかも困惑の色あり、その妻赤染衛門の怪み問ふに及んで實を告げ、「齊名、以言の文章を以てして猶公任の意に滿たずとすれば、我とてもまた恐らくは其望に稱はないであらう」と云ふのであつたが、赤染衛門は良人に勸めて、「彼の人は驕飾の心が多いから、盛んに其門地の尊貴を述べて、隱に官位

沈淪の意を寓する文章を書くべきである」と告げた。即ち匡衡は妻の語に從つて辭表を草したが、果して公任の喜び用ふる所となつた。是れは「十訓抄」の傳ふる所である。但し「十訓抄」は此逸話を「可レキ專ニスベキ思慮ヲ事」の中に收めて赤染衛門の機智を揚げたのであるが、衛門は寧ろ公任に對する同情よりして然かく良人に勸めたのでは無かつたか。「榮華物語」を讀むと、衛門は女性の陷り易き愛憎偏依の跡少なく、珍しきまで他人に對して遍く同情の行き亘つた人であり、殊に失意の人の心理と境遇とを描寫するに妙筆の委曲を盡してゐるのは其特色の一である。即ち藤原伊周一家に關する記述、公任の出家直前に關する記述の如きが其の最も顯著なる實例として見られる。衛門には公任の性格に矯飾の一面の存するをも、天賦自然の不可抗的なる如是眞實として同情し寛容した事であらう。

一、「藤原公任歌集」の底本には「群書類從本」を用ひた。編者たる我我が假名書に漢字を増し、假名遣を正し、「 」此印の中に人名、掛詞、縁語其他の補注を加へたのは「拾遺和歌集」と同じである。

一、「拾遺和歌集」も「藤原公任歌集」も、題簽の文字は、同時代の藤原行成の筆蹟から集字をした。

目次

拾遺和歌集

卷第一……三
卷第二……一三
卷第三……二一
卷第四……三一
卷第五……三八
卷第六……四三
卷第七……五一
卷第八……六一
卷第九……七二
卷第十……八五
卷第十一……九一

卷第十二……一〇〇
卷第十三……一〇九
卷第十四……一一八
卷第十五……一二六
卷第十六……一三四
卷第十七……一四六
卷第十八……一五七
卷第十九……一六六
卷第二十……一七五
藤原公任歌集……一八七

拾遺和歌集

拾遺和歌集　巻第一

春

平貞文が家ノ歌合に詠み侍りける　　壬生ノ忠岑

春立つと云ふばかりにや、吉野の山も霞みて今朝は見ゆらん

承平四年中宮の賀し侍りける時の屏風の歌　　紀ノ文幹

春霞立てるを見ればあらたまの年は山より越ゆるなりけり

霞を詠み侍りける　　山邊ノ赤人

昨日こそ年は暮れしか春がすみ春日の山に早立ちにけり

冷泉院、東宮におはしましける時、「歌奉れ」と仰せられければ　　源ノ重之

吉野山峰の白雪何時消えて今朝は霞の立ち代るらん

延喜ノ御時、月次ノ御屏風に　　素性法師

あらたまの年立ち回る朝より待たるるものは鶯の聲

天暦ノ御時ノ歌合に　　源ノ順

氷だに留まらぬ春の谷風にまだ打解けぬ鶯の聲

題知らず　　平ノ祐擧

春立ちて朝の原の雪見ればまだ舊「降」年の心地こそすれ

貞文が家の歌合に　　躬恒

春立ちて猶降る雪は梅の花咲く程も無く散るかとぞ見る

題知らず　　讀人知らず

我宿の梅に倣ひてみ吉野の山の雪をも花とこそ見れ

天暦十年三月廿九日内裏ノ歌合に　　中納言朝忠

鶯の聲無かりせば雪消えぬ山里如何で春を知らまし

鶯を詠み侍りける　　大伴ノ家持

打霧らし雪は降りつつしかすがに我が家の園に鶯ぞ鳴く

題知らず　　柿ノ本ノ人麿

梅の花それとも見えずひさかたの天霧る雪のなべて降れれば

延喜ノ御時、宣旨にて奉れる歌の中に　　貫之

梅が枝に降り掛かりてぞ白雪の花の使りに折らるべらなる

同じ御時ノ御屏風に　　躬恒

降る雪に色は紛ひぬ梅の花香にこそ似たる物無かりけれ

冷泉院ノ御屏風の絵に、梅の花ある家に客人来たる所　　平ノ兼盛

我宿の梅の立枝や見えつらん思ひの外に君が来ませる

斎院ノ御屏風に　　躬恒

香を尋めて誰れ折らざらん梅の花文無し〔躬恒集、く〕霞立ちな隠しそ

斎院に住み侍りける前斎院の御屏風に　　貫之

白栲の妹が衣に梅の花色をも香をも分きぞかねつる

題知らず　　人麿

明日からは若菜摘まんと片岡の朝の原は今日ぞ焼くめる

右佐右大臣の家の屏風に　　貫之

野辺見れば若菜摘みけり宜しこそ垣根の草も春めきにけれ

若菜を御覧じて　　円融院御製

春日野に多くの年は摘みつれど老いせぬ物は若菜なりけり

題知らず　　大伴ノ家持

春の野に求食る雉子の妻戀ひに己が在所を人に知れつつ

皇太后の宮に、宮内と云ふ人の童なりける時、醍醐の帝の御前に侍ひける程に、御前なる近衛に鶯の鳴けれぱ、正月初子の日仕うまつりける

松の上に鳴く鶯の聲をこそ初音「子」の日とは云ふべかりけれ

題知らず　忠岑

子の日する野邊に小松の無かりせば千代の例に何を引かまし

入道式部卿の親王の子の日し侍りける所に　大中臣ノ能宣

千年まで限れる松も今日よりは君に引かれて萬づ代や經ん

延喜ノ御時、御屏風に、水の邊に梅の花見たる所　貫之

梅の花まだ散らねども行く水の底に移れる影ぞ見えける

題知らず　讀人知らず

摘み溜むることの難きは鶯の聲する野べの若菜なりけり

梅の花外ながら見ん吾妹子が咎むばかりの香にもこそ沁め

袖垂れていざ我園に鶯の木傳ひ散らす梅の花見ん

兵部卿元良親王

朝まだき起きてぞ見つる梅の花夜の間の風のうしろめたさに　　躬恒

吹く風を何厭ひけん梅の花散り来る時ぞ香は増さりける　　大中臣ノ能宣

匂ひをば風に添ふとも梅の花色さへあやな徒に散らすな　　讀人知らず

ともすれば風の寄るにぞ青柳の糸はなかなか亂れ初めける　　大中臣ノ能宣

屏風に

近くてぞ色も増さるる青柳の糸は寄［縒］りてぞ見るべかりける　　凡河内ノ躬恒

題知らず

青柳の綠の糸を縒り合せて絶えずも鳴くか鶯の聲　　讀人知らず

花見には群れて行けども青柳の糸の下には来［繰］る人も無し

子にまかり後れて侍りける頃、東山に籠りて　　中務

咲けば散る咲かねば戀し山ざくら思ひ絶えせぬ花の上かな

題知らず　讀人知らず
吉野山絹えず霞のたなびくは人に知られぬ花や咲くらん

天曆九年內裏ノ歌合に
咲き咲かず外にても見ん山櫻峰のしら雲立ちな隱しそ

題知らず
吹く風に爭ひかねてあしびきの山の櫻は綻びにけり

菅家萬葉集の中
淺綠野邊の霞は包めどもこぼれて匂ふ花櫻かな

題知らず　讀人知らず
吉野山消えせぬ雪と見えつるは峰續き咲く櫻なりけり

天曆ノ御時、麗景殿ノ女御と中將更衣と歌合し侍りけるに　淸原ノ元輔
春霞立ちな隔てそ花盛り見てだに飽かぬ山の櫻を

平ノ貞文が家の歌合に　忠岑
春は猶我れにて知りぬ花ざかり心のどけき人は有らじな

賀ノ御屛風に　藤原ノ千景

咲き初めて幾日經ぬらん櫻花色をば人に飽かず見せつつ　忠見

天暦ノ御時、御屏風に

春來れば先づぞ打見る石の上珍らしげ無き山田なれども　在原ノ元方

題知らず

春來れば山田の氷打解けて人の心に任すべらなり　齋宮ノ内侍

承平四年、中宮の賀し給ひける時の屏風に

春の田を人に任せて我は唯だ花に心を附くる頃かな　貫之

宰相中將敦忠朝臣ノ家ノ屏風に

浮華なれど櫻のみこそ故郷の昔ながらの物には有りけれ　伊勢

齋院の屏風に、山路行く人ある所

散り散らず聞かまほしさを故郷の花見て歸る人も逢はなん　讀人知らず

題知らず

櫻狩り雨は降り來ぬ同じくは濡るとも花の陰に隠れん　元輔

訪ふ人も有らじと思ひし山里の花の便りに人目見るかな

圓融院ノ御時、三尺ノ御屏風に　　平ノ兼盛

花の木を植ゑしも著く春來れば我宿過ぎて行く人ぞ無き

題知らず　　讀人知らず

櫻色に我身は深く成りぬらん心に沁みて花を惜めば

權中納言義懷の家の櫻の花惜む歌詠み侍りけるに　　藤原ノ長能

身に換へて文無く花を惜むかな生けらば後の春もこそ有れ

題知らず　　讀人知らず

見れど飽かぬ花の盛りに歸る雁猶故郷の花や戀しき

故郷の霞飛び分け行く雁は旅の空にや春を暮さん

天暦ノ御時、御屏風に　　藤原ノ清正

散りぬべき花見る時は菅の根の長き春日も短かりけり

題知らず　　讀人知らず

告げ遣らん間にも散りなば櫻花僞り人に我や成りなん

屏風に　　能宣

散り初むる花を見捨てて歸らめや覺束なしと妹は見るとも

題知らず　　讀人知らず

見も果てで行くと思へば散る花に付けて心の空に成るかな

延喜ノ御時、藤壺の女御の歌合の歌に

朝毎に我が掃く宿の庭櫻花散る程は手も觸れで見ん

荒れ果てて人も侍らざりける家に櫻の咲き亂れて侍りけるを見て　　惠慶法師

淺茅原主無き宿のさくら花心安くや風に散るらん

北の宮の裳着の屛風に　　貫之

春深く成りぬと思ふを櫻花散る木の下はまだ雪ぞ降る

亭子院ノ歌合に

櫻散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける

題知らず　　讀人知らず

あしびきの山路に散れるさくら花消えせぬ春の雪かとぞ見る

天暦ノ御時ノ歌合に　　小貳ノ命婦

あしびきの山隱れなるさくら花散り殘れりと風に知らるな

題知らず　　讀人知らず

岩間をも分け來る瀧の水を如何で散り積む花の塞き留むらん

天曆ノ御時ノ歌合に　源ノ順

春深み井手の川浪立ち返り見てこそ行かめ山吹の花

井手と云ふ所に山吹の面白く咲きたるを見て　惠慶法師

山吹の花の盛りに井手に來てこの里人に成りぬべきかな

屏風に　元輔

物も云はで眺めてぞ經る山吹の花に心ぞ移ろひぬらん

題知らず　讀人知らず

澤水に蛙鳴くなり山吹の映ろふ影や底に見ゆらん

我宿の八重山吹は一重だに散り殘らなん春の形見に

亭子院ノ歌合に　坂上ノ是則

花の色を映し留めよ鏡山春より後の影や見ゆると

題知らず　讀人知らず

春霞立ち分れ行く山路は花こそ幣と散り紛ひけれ

年の中は皆春ながら暮れななん花見てだにも憂き世過ぐさん

延喜ノ御時、春宮ノ御屏風に　貫之

風吹けば方も定めず散る花を何方へ行く春とかは見ん

同じ御時、月次の御屏風に

花も皆散りぬる宿は行く春の故里とこそ成りぬべらなれ

閏三月侍りける晦日に　躬恒

常よりも長閑かりつる春なれど今日の暮るるは飽かずぞ有りける

拾遺和歌集　卷第二

夏

天暦ノ御時の歌合に　大中臣ノ能宣

鳴く聲はまだ聞かねども蟬の羽の薄き衣は裁ちぞ着てける

屏風に　順

我宿の垣根や春を隔つらん夏來にけりと見ゆる卯の花

冷泉院の東宮におはしましける時、百首歌奉れと仰せられければ　源ノ重之

花の色に染めし袂の惜しければ衣更へ憂き今日にも有るかな

夏の初に詠み侍りける　盛明ノ親王

花散ると厭ひしものを夏衣立［裁］つや遲きと風を待つかな

百首歌ノ中に　重之

夏にこそ咲き掛かりけれ藤の花松にとのみも思ひけるかな

圓融院ノ御時ノ屏風ノ歌　平ノ兼盛

住吉の岸の藤浪わが宿の松の梢に色は勝らじ

順

紫の藤咲く松の梢には舊の緑も見えずぞ有りける

延喜ノ御時、飛香舍にて藤の花の宴侍りける時に　小野ノ宮ノ太政大臣

薄く濃く亂れて咲ける藤の花等しき色は有らじとぞ思ふ

題知らず　躬恒

手も觸れで惜む甲斐無く藤の花底に映れば浪ぞ織りける

田子の浦の花を見侍りて　柿本ノ人麻呂

田子の浦の底さへ匂ふ藤浪を插して行かん見ぬ人の爲め

　山里の卯の花に鶯の鳴きけるを　　平ノ公誠

卯の花を散りにし梅に紛へてや夏の垣根に鶯の鳴く

　題知らず　　讀人知らず

卯の花の咲ける垣根は陸奥の籬の嶋の浪かとぞ見る

　延喜ノ御時、月次ノ御屛風に　　躬恒

神祭る卯月に咲ける卯の花は白くも宜禰〔杵〕が白けたるかな

　貫之

神祭る宿の卯の花白栲の御幣かとぞ誤たれける

　題知らず　　讀人知らず

山賤の垣根に咲ける卯の花は誰が白栲の衣掛けしぞ

時分かず降れる雪かと見るまでに垣根も撓に咲ける卯の花

春かけて聞かんともこそ思ひしか山ほととぎす遲く鳴くらん

初聲の聞かまほしさに杜鵑夜深く目をも覺しつるかな

　夏山を越ゆとて　　久米ノ廣綱

延喜ノ御時、御屏風に　貫之

家に來て何を語らんあしびきの山ほととぎす一聲もがな

題知らず　讀人知らず

山里に知る人もがな杜鵑鳴きぬと聞かば告げに來るがに

天暦ノ御時ノ歌合に　坂上ノ望城

山里に宿らざりせば杜鵑聞く人も無き音をや鳴かまし

微かにぞ鳴きわたるなる杜鵑み山を出づる今朝の初聲

平ノ兼盛

み山出でて夜はにや來つるほととぎす曉かけて聲の聞ゆる

寛和二年内裏ノ歌合に　右大將道綱ノ母

都人寢で待つらめやほととぎす今ぞ山邊を鳴きて出づなる

女四の親王の家ノ歌合に　坂上ノ是則

山賤と人は云へどもほととぎす先づ初聲は我のみぞ聞く

天暦ノ御時の歌合に　壬生ノ忠見

さ夜更けて寢覺めざりせばほととぎす人傳にこそ聞くべかりけれ

同じ御時の御屏風に　　伊勢

二聲と聞くとは無しにほとゝぎす夜深く目をも覺ましつるかな

北ノ宮の裳着の屏風に　　源ノ公忠朝臣

行きやらで山路暮しつほとゝぎす今一聲の聞かまほしさに

敦忠朝臣の家の屏風に　　貫之

此里に如何なる人か家居して山ほとゝぎす絶えず聞くらん

延喜ノ御時　歌合に　　讀人知らず

五月雨は近く成るらし淀川の菖蒲の草も水草生ひにけり

屏風に　　大中臣ノ能宣

昨日まで外に思ひし菖蒲ぐさ今日わが宿のつま〔端、妻〕と見るかな

題知らず　　讀人知らず

今日見れば玉の臺も無かりけり菖蒲の草の庵のみして　　延喜　御製〔醍醐天皇〕

あしびきの山ほとゝぎす今日とてや菖蒲の草の音〔根〕に立てて鳴く　　讀人知らず

誰が袖に思ひ比へてほととぎす花橘の枝に鳴くらん

天暦ノ御時ノ御屏風に、淀の渡りする人書ける所に　壬生ノ忠見

何方に鳴きて行くらん杜鵑淀の邊り［渡］のまだ夜深きに

敷ける如真菰の生ふる淀野には露の宿りを人ぞ借［刈］りける

小野ノ宮ノ大臣の家ノ屏風に、渡りしたる所に杜鵑鳴きたる繪あるに　貫之

彼の方に早漕ぎ寄せよ杜鵑路に鳴きつと人に語らん

貞文が家の歌合に　躬恒

ほととぎすなも歸り鳴け垂髮兒が打垂髮のさみだれ［亂］の空

題知らず　讀人知らず

鳴けや鳴け高間の山の杜鵑この五月雨に聲な惜みそ

五月雨は睡こそ寢られねほととぎす夜深く鳴かん聲を待つとて

憂たて人思はんものを杜鵑夜しも何どか我宿に鳴く

大伴ノ坂上ノ郎女

ほととぎす甚くな鳴きそ獨り居て睡の寢られぬに聞けば苦しも

中務

夏の夜の心を知れるほとゝぎす早も鳴かなん明けもこそすれ

夏の夜は浦島の子が箱なれやはかなく開けて悔しかるらん

延喜の御時の中宮の歌合に　　讀人知らず

夏來れば深草山のほとゝぎす鳴く聲繁く成りまさるかな

東宮に侍ひける繪に、倉橋山に杜鵑飛び渡りたる所　　藤原實方朝臣

五月闇倉橋山の杜鵑おぼつかなくも鳴き渡るかな

題知らず　　讀人知らず

ほとゝぎす鳴くや五月の短夜も獨りし寝れば明しかねつも

西宮の左大臣の家の屏風に　　源順

ほとゝぎす待つに付けてや照射する人も山邊に夜を明すらん

延喜の御時の月次の御屏風に　　貫之

五月山木の下闇にともす火は鹿の立所の知るべなりけり

九條の右大臣の家の賀の屏風に　　平兼盛

怪しくも鹿の立所の見えぬかな小倉〔小暗〕の山に我や來ぬらん

女四の宮の家の屏風に　　能宣

行末〔不〕ざきはまだ遠けれど夏山の木の下蔭は立ち憂かりけり

延喜ノ御時ノ御屏風に　貫之

夏山の蔭を繁みや玉鉾の道行き人も立ち留まるらん

河原ノ院の泉の下に涼み侍りて　恵慶法師

松蔭の岩井の水を掬び上げて夏無き年と思ひけるかな

家に咲きて侍りける瞿麦を人の許に遣はしける　伊勢

何処にも咲きはすらめど我宿のやまと撫子誰に見せまし

題知らず　読人知らず

底清み流るる川のさやかにも祓ふることを神は聞かなん

藤原長能

さ蠅なす荒ぶる神も押並べて今日は名越の祓なりけり

読人知らず

紅葉せば紅く成りなん小倉山秋待つ程の名にこそ有りけれ

忠岑

右大将定國ノ四十ノ賀に、内裏より屏風調じて賜ひけるに

大荒城の森の下草繁り合ひて深くも夏の成りにけるかな

拾遺和歌集　巻第三

秋

秋の初めに詠み侍りける　　安法法師

夏衣まだ一重なるうたた寝に心して吹け秋の初風

題知らず　　読人知らず

秋は来ぬ竜田の山も見てしがな時雨ぬ先に色や変ると

延喜ノ御時ノ御屏風に　　貫之

荻の葉のそよぐ音こそ秋風の人に知らるる初めなりけれ

河原ノ院にて「荒れたる宿に秋来る」と云ふ心を人々詠み侍りけるに　　恵慶法師

八重葎茂れる宿の寂しきに人こそ見えね秋は来にけり

題知らず　　安貴王

秋立ちて幾日もあらねど此の寝ぬる朝明の風は袂涼しも

延喜ノ御時ノ屏風に　　躬恒

牽牛の妻待つ宵の秋風に我さへあやな人ぞ戀しき

貫之

秋風に夜の更け行けば天の川川瀬に浪の立ち居こそ待て

題知らず　柿本ノ人麿

天の川遠き渡りに有らねども君が船出は年にこそ待て

天の川去年の渡りの移ろへば淺瀬踏む間に夜ぞ更けにける

讀人知らず

さ夜更けて天の川をぞ出でて見る思ふさまなる雲「星か」や渡ると

湯原王

牽牛の思ひ増すらん事よりも見る我れ苦し夜の更け行けば

人麿

年に有りて一夜妹に逢ふ牽牛も我に勝りて思ふらんやぞ

延喜ノ御時　月次ノ御屏風に　貫之

織女に脱ぎて借しつる唐衣いと「糸」ど涙に袖や濡るらん

右衛門ノ督源清蔭ノ家の屏風に

一年に一夜と思へど織女の逢ひ見ん秋の限り無きかな

右兵衛ノ督藤原懐平ノ家ノ屏風に　　恵慶法師

いたづらに過ぐる月日を織女の逢ふ夜の數と思はましかば

七夕、庚申に當りて侍りける年　　元輔

いとどしく寢も寢ざるらんと思ふかな今日の今宵に逢へる織女

題知らず　　讀人知らず

逢ひ見ても逢はでも歎く織女は何時か心の長閑かるべき

我が祈る事は一つぞ天の川空に知りても違へざらなん

君來ずば誰に見せまし我宿の垣根に咲ける朝顔の花

女郎花多かる野邊に花薄何れをさして招くなるらん

手も觸で植ゑしも著く女郎花色ゆゑ君が宿りぬるかな

女郎花多く咲ける家にまかりて　　小野ノ宮ノ太政大臣

梔子花の色をぞ頼むをみなへし花に愛でつと人に語るな

能宣

女郎花匂ふ邊りに睦るればあやなく露や心置くらん

題知らず　　讀人知らず

白露の置く端〔妻〕にする女郎花あな煩はし人な手觸れそ

嵯峨に前栽掘りにまかりて　　藤原ノ長能

日暮しに見れども飽かぬ女郎花野邊にや今宵旅寢しなまし

八月ばかりに雁の聲待つ歌詠み侍りけるに　　惠慶法師

荻の葉もやや打ちそよぐ程なるに何ど雁がねの音無かるらん

齋院ノ屏風に　　讀人知らず

假り〔雁〕にとて來べかりけりや秋の野の花見る程に日も暮れぬべし

題知らず

秋の野の花の名立に女郎花假り〔狩〕にのみ來る人に折らるな　　貫之

假り〔狩〕にとて我は來つれど女郎花見るに心ぞ思ひ付きぬる

陽成院御屏風に小鷹狩したる所

假り〔狩〕にのみ人の見ゆればをみなへし花の袂ぞ露けかりける

亭子院の御前に前栽植ゑさせ給ひて、「是れ詠め」と仰せ言ありければ　　伊勢

植ゑ立てて君が占め結ふ花なれば玉と見えてや露も置くらん　　讀人知らず

題知らず

來て過ぐる秋は無けれど初雁の聞く度毎にめづらしきかな　　大貳ノ高遠

少將に侍りける時、駒迎にまかりて

逢坂の關の岩角踏み鳴らし山立ち出づる霧原の駒　　貫之

延喜ノ御時、月次ノ御屏風に

逢坂の關の清水に影見えて今や引くらん望月の駒　　源ノ順

屏風に、八月十五夜、池ある家に人遊びしたる所

水の面に照る月浪を數ふれば今宵ぞ秋の最中なりける　　能宣

水に月の宿りて侍りけるを

秋の月浪の底にぞ出でにける待つらん山の甲斐や無からん　　源ノ景明

廉義公（藤原賴忠）の家の紙繪に、秋の月面白き池ある家ある所

秋の月池に來ぬかと見えつるは更け行く雁の影にぞ有りける　　元輔

圓融院ノ御時、八月十五夜書ける所に

僞かすりし思はえたれば如何はせん暗くこそは見め秋の夜の月

延喜ノ御時、八月十五夜、藏人所の男ども月の宴し侍りけるに　　藤原ノ經臣

此處にだに光さやけき秋の月雲の上こそ思ひ遣らるれ

同じ御時、御屛風に　　躬恒

何處にか今宵の月の見えざらん飽かぬは人の心なりけり

題知らず　　兼盛

夜もすがら見てを明さん秋の月今宵の空に雲無からなん

廉義公ノ家にて「草むらの虫」と云ふ題を詠み侍りける　　藤原ノ爲賴

覺束な何處なるらん虫の音を尋ねば草の露や亂れん

前栽に鈴虫を放ち侍りて　　伊勢

何處にも草の枕を鈴虫は此處を旅とも思はざらなん

屛風に　　貫之

秋來れば機織る虫の有るなべに唐錦にも見ゆる野邊かな

題知らず　　讀人知らず

契りけん程や過ぎぬる秋の野に人待つ虫の聲の絶えせぬ　　躬恒

露けくて我が衣手は濡れぬとも折りてを行かん秋萩の花

亭子院ノ御屏風に　　伊勢

移ろはん事だに惜しき秋萩を折れぬばかりも置ける露かな

三條の后宮の裳着侍りける屏風に、九月九日の所　　元輔

我が宿の菊の白露今日毎に幾世積りて淵と成るらん

題知らず　　躬恒

九月の九日ごとに摘む菊の花も甲斐無く老いにけるかな

右大將定國ノ家ノ屏風に　　忠岑

千鳥鳴く佐保の川霧立ちぬらし山の木の葉も色變り行く

延喜ノ御時ノ御屏風に　　貫之

風寒み我が唐衣打つ時ぞ萩の下葉も色增さりける

三百六十首ノ中に　　曾根ノ好忠

神南備の三室の山を今日見れば下草かけて色づきにけり

題知らず　　大中臣ノ能宣

紅葉せぬ常磐の山は吹く風の音にや秋を聞きわたるらん

紅葉せぬ常磐の山に住む鹿は己れ鳴きてや秋を知るらん

秋風の打吹く毎に高砂の尾上の鹿の鳴かぬ日ぞ無き　　讀人知らず

秋風を立てゝものから花すすき行く方を何ど招くなるらん

朝臣へ詣で侍りける路に、佐保山の下にまかり宿りて、朝に霧の立ち渡りて侍りければ　　恵慶法師

紅葉見に宿れる我と知らねばや佐保の川霧立ち隠すらん

題知らず　　讀人知らず

もみぢ葉の色をし添へて流るれば淺くも見えず山川の水

大井川に人人まかりて歌詠み侍りけるに　　能宣

もみぢ葉を今日は猶見ん暮れぬとも小倉の山の名には障らじ

題知らず　　讀人知らず

秋霧の立［数］一たまく惜しき山路かな紅葉の錦織り積りつつ

大井川に紅葉の流るゝを見て　　健守法師

水の文に紅葉の錦重ねつつ川瀬の浪の立たぬ日ぞ無き

西宮ノ左大臣家の屏風に、志賀の山越に壺裝束したる女ども、紅葉など有る所に　順

名を聞けば昔ながらの山なれど時雨るる秋は色勝りけり

東山に紅葉見にまかりて、又の日の早朝まかり歸るとて、詠み侍りける　恵慶法師

昨日より今日は勝れるもみぢ葉の明日の色をば見でや止みなん

天暦ノ御時、殿上の男ども、紅葉見に大井川にまかりけるに　源ノ延光朝臣

もみぢ葉を手毎に折りて歸りなん風の心もうしろめたきに

源ノ定光

枝ながら見てを歸らんもみぢ葉は折らん程にも散りもこそすれ

題知らず　深養父

川霧の麓を籠めて立ちぬれば空にぞ秋の山は見えける

竹生島に詣で侍りける時、紅葉の影の水に映りて侍りければ　法橋觀教

湖に秋の山邊を映しては機幅廣き錦とぞ見る

二條の右大臣、粟田の山里の障子の繪に、旅人、紅葉の下に宿りたる所　恵慶法師

今よりは紅葉の下に宿りせじ惜むに旅の日數經ぬべし

題知らず　　讀人知らず

訪ふ人も今は嵐（あらし）［有らじ］の山風に人待つ［松］虫の聲ぞ悲しき

延喜ノ御時、中宮ノ御屏風に　　貫之

散りぬべき山の紅葉を秋霧の易（やす）くも見せず立ち隠すらん

題知らず　　僧正遍昭

秋山の嵐の聲を聞く時は木の葉ならねど物ぞ悲しき

貫之

秋の夜に雨と聞えて降るものは風に從ふ紅葉なりけり

右衛門督公任

心もて散らんだにこそ惜しからめ何（な）どか紅葉に風の吹くらん

嵐の山の下（もと）をまかりけるに、紅葉の甚（いた）く散り侍りければ

朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦着ぬ人ぞ無き

題知らず　　能宣

秋霧の峰にも丘（を）にも立つ［裁］山［何時］は紅葉の錦堪（たま）らざりけり

大井川に紅葉の流るるを見侍りて　　忠岑

色色の木の葉流るる大井川下（しも）は桂（かつら）の紅葉とや見ん

題知らず

招くとて立ちも留まらぬ秋ゆゑに哀れ片寄る花薄かな　　好忠

暮の秋、重之が消息して侍りける返りごとに　　平兼盛

暮れて行く秋の形見に置くものは我が髻結の霜にぞ有りける

拾遺和歌集　巻第四

冬

延喜御時、尚侍の屏風に　　貫之

あしびきの山かき曇り［行かき暗し］時雨るれど紅葉はいとど照り勝りけり

寛和二年、清涼殿の御障子に網代書ける所　　讀人知らず

網代木に掛けつつ洗ふ唐錦日を［=氷魚、杼を］經［=綜］て寄する紅葉なりけり

時雨し侍りける日　　貫之

かき暗し時雨るる空を眺めつつ思ひこそ遣れ神奈備の森

題知らず　　讀人知らず

神無月時雨しぬらし葛の葉の裏濃かる音に鹿も鳴くなり

奈良の帝、龍田川に紅葉御覽じに行幸ありける御供に仕うまつりて　　柿本人麿

龍田川もみぢ葉流る神南備の三室の山に時雨降るらし

散り殘りたる紅葉を見侍りて　　僧正遍昭

唐錦枝に一むらに殘れるは秋の形見を裁たぬなるべし

延喜御時、女四の親王の家の屏風に　　貫之

流れ來るもみぢ葉見れば唐錦瀧の糸もて織れるなりけり

屏風に　　平兼盛

時雨ゆゑ被く袂を外人は紅葉を拂ふ袖かとや見ん

百首歌の中に　　源重之

蘆の葉に隱れて住みし津の國の小屋〔昆陽〕もあらはに冬は來にけり

題知らず　　貫之

思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風寒み千鳥鳴くなり

讀人知らず

終日に見れども飽かぬもみぢ葉は如何なる山の嵐なるらん

夜を寒み寢覺に聞けば鴛鴦鳥の羨ましくも水〔身〕馴るなるかな

水鳥の下安からぬ思ひには邊りの水も凍らざりけり

夜を寒み寢覺めて聞けば鴛鴦ぞ鳴く拂ひも敢へず霜や置くらん

貞文が家の歌合に

霜の上に降る初雪の朝氷解けずも物を思ふ頃かな

題知らず

霜置かぬ袖だに冴ゆる冬の夜は鴨の上毛を思ひこそ遣れ

池水や氷解くらん汀鴨の夜深く聲の騷ぐなるかな

飛び通ふ鴛鴦の羽風の寒ければ池の氷ぞ冴え增さりける

屛風に

水の上に思ひしものを冬の夜の氷は袖の物にぞ有りける

右衞門ノ督公任

橘ノゆきより

紀ノ友則

讀人知らず

平ノ兼盛

柴漬けし淀の渡〔渡〕りを今朝見れば解けん期も無く氷しにけり

讀人知らず

題知らず

冬寒み凍らぬ水は無けれども吉野の瀧は絶ゆる瀬も無し

能宣

甘德公〔藤原爲光〕ノ家の屏風に

冬催れば嵐の聲も高砂の松に付けてぞ聞くべかりける

元輔

高砂の松に住む鶴冬來れば尾上の霜や置き增さるらん

紀ノ友則

題知らず

夕催れば佐保の川原の河霧に友紛はせる千鳥鳴くなり

人麿

浦近く降り來る雪は白浪の末の松山越すかとぞ見る

元輔

廉義公ノ家の障子に

冬の夜の池の氷の清徹きは月の光の磨くなりけり

讀人知らず

題知らず

冬の池の上は氷に閉ぢられて如何でか月の底に入るらん

月を見て詠める　　恵慶法師

天の原空さへ冴えやわたるらん氷と見ゆる冬の夜の月

初雪を詠める　　源景明

都にて珍らしと見る初雪は吉野の山に降り［舊］や爲しぬらん

女の語らひ侍りけるが、年頃に成り侍りにけれど、疎く侍りければ、雪の降り侍りけるに　　元輔

降［經］る程もはかなく見ゆる淡雪の羨ましくも打解くるかな

山階に雪の降り掛かりて侍りけるを　　伊勢

あしびきの山隠に降れる白雪は摺れる衣の心地こそすれ

齋院の屏風に　　貫之

夜ならば月とぞ見まし我宿の庭白妙に降れる白雪

題知らず　　能宣

我宿の雪に付けてぞ故里の吉野の山は思ひ遣らるる

屏風の繪に、越の白山書きて侍りける所に　　藤原佐忠朝臣

我れ獨り越の山路に來しかども雪降［舊］りにける跡を見るかな

題知らず　忠見

年經れば越の白山老いにけり多くの冬の雪積りつつ

入道攝政［藤原兼家］の家の屛風に　兼盛

見渡せば松の葉白き吉野山幾世積れる雪にか有るらん

題知らず　人麿

山里は雪降り積みて路も無し今日來ん人を哀れとは見ん

右大將定國　家の屛風に　貫之

あしびきの山路も知らず白樫の枝にも葉にも雪の降れれば

冷泉院　御時ノ御屛風に　兼盛

白雪の降り敷く時はみ吉野の山下風に花ぞ散りける

屛風に　能宣

人知れず春をこそ待て掃ふべき人無き宿に降れる白雪

右衞門ノ督公任

新しき春さへ近く成り行けば降［舊］りのみ增さる年の雪かな

梅が枝に降り積む雪は一年に二度咲ける花かとぞ見る

屏風の繪に佛名の所　能宣

起き明す霜と共にや今朝は皆冬の夜［世］深き罪も消ぬらん

延喜御時御屏風に　貫之

年の中に積れる罪はかき暗し降る白雪と共に消えなん

屏風の繪に、佛名の朝に、梅の木の下に、導師と主人と杯取りて別れ惜みたる所

雪深き山路に何に歸るらん春待つ花の蔭に留まらで　能宣

屏風の繪に、佛名の所

人はいさ犯しやすらん冬來れば年のみ積る雪とこそ見れ　兼盛

齋院の御屏風に、十二月晦日の夜

數ふれば我身に積る年月を送り迎ふと何急ぐらん

百首歌の中に

雪「往き」積る己が年をば知らずして春をば明日と聞くぞ嬉しき　源重之

拾遺和歌集　巻第五

賀

天暦ノ御時、齋宮下り侍りける時の長奉送使にて、まかり歸らんとて　　中納言朝忠

萬ヅ代の初めと今日を祈り置きて今行末は神ぞ知るらん

初めて平野祭に男使立てし時、歌ふべき歌詠ませしに　　大中臣ノ能宣

ちはやぶる平野の松の枝繁み千世も八千世も色は變らじ

仁和（光孝天皇）の御時、大嘗會の歌　　讀人知らず

蒲生野の玉の緒山に住む鶴の千年は君が御代の數なり

贈皇后宮の御産屋の七夜に、兵部卿致平の親王の雉の形を作りて、誰ともなくて歌を付けて侍りける　　清原ノ元輔

朝まだき切符の岡に立つ雉は千代の日嗣の初めなりけり

藤氏の産屋にまかりて　　能宣

二葉より頼もしきかな春日山木高き松の種ぞと思へば

産屋の七夜にまかりて

君が經ん八百萬づ代を數ふればかつかつ今日ぞ七日なりける

右大將藤原ノ實資ノ産屋の七夜に　　平ノ兼盛

今年生ひの松は七日と成りにけり殘りの程を思ひこそ遣れ

或人の産屋にまかりて　　能宣

千年とも數は定めず世の中に限り無き身と人も云ふべく

藤原ノ誠信元服し侍りける夜、詠みける　　源ノ順

老いぬれば同じ言こそ爲られけれ君は千世ませ君は千世ませ

三善のすけただが冠し侍りける時　　能宣

結ひ初むる初元結の濃紫衣の色に映れとぞ思ふ

天暦の帝、四十に成りおはしましける時、山階寺に金泥壽命經四十卷を書きて、供養し奉りて、御卷數、鶴に咋はせて洲濱に立てたりけり。其洲濱の敷物に數多の歌、蘆手に書ける中に　　兼盛

山階の山の岩根に松を植ゑて常磐堅磐に祈りつるかな

仲算法師

聲高く三笠の山ぞ呼ばふなる天の下こそ樂しかるらし

承平四年、中宮の賀侍りける時の屏風に　　齋宮ノ内侍

色變へぬ松と竹との末の世を何れ久しと君のみぞ見ん　大中臣ノ頼基

同じ賀に、竹の杖作りて侍りけるに

一節に千代「節」を籠めたる杖なれば衝くとも盡きじ君が齢は　元輔

清愼公〔藤原實頼〕五十ノ賀し侍りける時の屏風に

君が世を何に譬へん細細石の巖と成らん程も飽かねば

青柳の緑の糸を繰り返し幾らばかりの春を經「綜」ぬらん　兼盛

我宿に咲ける櫻の花盛り千年見るとも飽かじとぞ思ふ

同じ人の七十ノ賀し侍りけるに、竹の杖を作りて　能宣

君が爲め今日切る竹の杖なれば又も盡きせぬ世世「節節」ぞ籠れる

位山峯まで衝ける杖なれど今萬づ代の坂の爲めなり

一條攝政〔伊尹〕、中將に侍りける時、父の大臣の五十ノ賀し侍りける屏風に　小野ノ好古朝臣

吹く風に外の紅葉は散り來れど君が常磐の蔭ぞ長閑けき

權中納言敦忠ノ母の賀し侍りけるに　源ノ公忠朝臣

萬づ代も猶こそ飽かね君が爲め思ふ心の限り無ければ

五條ノ尙侍の賀、民部卿淸貫し侍りける時、屛風に　　伊勢

大空に群れたる鶴の然ながら思ふ心の有りげなるかな

春の野の若菜ならねど君が爲め年の數をも摘［積］まんとぞ思ふ

天德二年、內裏に花ノ宴せさせ給ひけるに　　九條ノ右大臣［師輔］

櫻花今夜插頭に插しながら斯くて千年の春をこそ經め

題知らず　　讀人知らず

かつ見つつ千年の春を［イは］過ぐすとも何時かは花の色に飽くべき

亭子院ノ歌合に　　躬恒

三千年に生るてふ桃の今年より花咲く春に逢ひにけるかな

康保三年、內裏に子の日せさせ給ひけるに、殿上の男ども和歌仕うまつりけるに　　藤原ノ信賢

珍しき千代ノ初めの子の日には先づ今日をこそ引くべかりけれ

小野ノ宮ノ太政大臣ノ［實賴］家にて子の日し侍りけるに、下臈に侍りける時讀み侍りける　　三條ノ太政大臣［賴忠］

行末も子の日の松の例には君が千年を引かんとぞ思ふ

延喜ノ御時ノ御屛風に　　貫之

松をのみ常磐と思ふに世と共に流る泉も緑なりけり

題知らず　讀人知らず

六月の名越の祓する人は千年の命延ぶと云ふなり

承平四年、中宮の賀し侍りける屏風に　參議伊衡

禊して思ふ事をぞ祈りつる八百萬づ代の神のまにまに

天暦ノ御時、前栽の宴せさせ給ひける時　小野ノ宮ノ太政大臣「實頼」

萬づ代に變らぬ花の色なれば何れの秋か君が見ざらん

廉義公「頼忠」ノ家にて、人人に歌詠ませ侍りけるに、「草むらの中の夜の虫」と云ふ題を　平ノ兼盛

千年とぞ草むら毎に聞ゆなる此や松虫の聲には有るらん

右大臣源ノ光の家に前栽合し侍りける負けわざを、内舍人橘ノ資淳が爲侍りける、千鳥の形作りて侍りけるに、詠ませ侍りける　貫之

誰が年の數とかは見ん行き返り千鳥鳴くなる濱の眞砂を

天暦ノ御時、清愼公「實頼」、御笛奉るとて詠ませ侍りければ　能宣

生ひ初むる根「音」よりぞ著き笛竹の末の世「節」長く成らんものとは

鏡鑄させ侍りける裏に、鶴の形を鑄付けさせ侍りて　伊勢

千年とも何か祈らん浦〔裏〕に住む鶴の上をぞ見るべかりける

題知らず　　讀人知らず

君が代は天の羽衣稀に来て撫づとも盡きぬ巖なるらん

賀の屏風に　　元輔

動き無き巖の果ても君ぞ見ん天女の袖の撫で盡すまで

拾遺和歌集　巻第六

別

京へ物へまかりける人に、曉に出で立ちける所にて、留まり侍りける人の詠み侍りける　　讀人知らず

春は且立つ曉を見るからに心ぞ空に成りぬべらなる

題知らず

さくら花露に濡れたる顔見れば泣きて別れし人ぞ戀しき

散る花は路見えぬまで埋まなん別るる人も立ちや留まると

物へまかりける人の許に、人人まかりて、杯把りて　　曾根ノ好忠

雁がねの歸るを聞けば別れ路は雲居遥かに思ふばかりぞ

天暦御時、小弐ノ命婦豊前にまかり侍りける時、大盤所にて餞せさせ給ふに、被け物給ふとて　　御製〔村上天皇〕

夏衣立〔裁〕ち別るべき今宵こそ偏〔単衣〕に惜しき思ひ添ひぬれ

題知らず　　読人知らず

忘るなよ別れ路に生ふる葛の葉の秋風吹かば今歸〔返〕り来ん

別れてふ事は誰か始めけん苦しきものと知らずや有りけん

時しも有れ秋しも人の別るればいとど袂ぞ露けかりける

天暦御時、九月十五日斎宮下り侍りけるに　　御製〔村上天皇〕

君が代を長月とだに思はずは如何に別れの悲しからまし

十月ばかりに物へまかりける人に　　忠見

露にだに當てじと思ひし人しもぞ時雨降る頃旅に行きける

物へまかりける人に餞し侍りて、扇遣はしける　　能宣

別れ路を隔つる雲のためにこそ扇の風を遣らまほしけれ

題しらず　　読人しらず

別れては逢はん逢はじぞ定め無きこの夕暮や限りなるらん

物へまかりける人の送り、関山までし侍るとて　　貫之

別れ路は戀しき人の文なれや遠ざからでのみこそ見まく欲しけれ

伊勢より上りて侍りけるに、忍びて物語し侍りける女の東へ下りけるが、逢坂にまかり逢ひて侍りけるに遣はしける　　能宣

別れ行く今日は惑ひぬ逢坂は歸り來ん日の名にこそ有りけれ

大江為基、東へまかり下りけるに、扇を遣はすとて　　赤染衛門

行末の命も知らぬ別れ路は今日逢坂や限りなるらん

惜むとも無きものゆゑにしかすがの渡［遠］りと聞けば直ならぬかな

源のよしたねが參河の介にて侍りける女の許に、母の詠みて遣はしける

諸共に行かぬ參河の八つ橋は戀しとのみや思ひ渡らん

兼盛、駿河の守にて下り侍りける餞し侍るとて　　源順

別れ路に渡せる橋も無きものを如何でか常に戀ひ渡るべき

信濃の國に下りける人の許に遣はしける　　貫之

月影は飽かず見るとも更科の山の麓に長居すな君

共政朝臣、肥後守にて下り侍りけるに、妻の肥前が下りけるに、筑紫櫛、御衣など賜ふとて

天暦ノ御製〔村上天皇〕

別るれば心のみこそ筑〔盡〕し紫櫛さし〔挿〕て逢ふべき程を知らねば

天暦ノ御時、御乳母肥前が出羽の國に下り侍りけるに餞賜ひけるに、藤壺〔女御藤原ノ安子〕より裝束給ひけるに添へられたりける　　讀人知らず

行く人を止め難み〔形見〕の唐衣立〔裁〕つより袖の露けかるらん

同じ御乳母の餞に、殿上の男ども、女房など、別れ惜み侍りけるに　　御乳母少納言

惜むとも難しや別れ心なる涙をだにもえやは止むる　　女藏人參河

題知らず　　讀人知らず

東路の草葉を分けん人よりも後るる袖ぞ先づは露けき

別るれば先づ涙こそ先きに立て如何で後るる袖の濡るらん

別るるを惜し〔鴛鴦〕とぞ思ひ〔ふノ誤カ〕劔羽の身をより碎く心地のみして

源ノ弘景物へまかりけるに、裝束賜ふとて　　三條ノ太皇大后宮〔昌子內親王〕

旅人の露拂ふべき唐衣まだきも袖の濡れにけるかな

橘ノ公頼、帥に成りてまかり下りける時、利貞が繼母典侍の餞し侍りけるに、裝束に添へて遣はしける　　貫之

數多には縫ひ重ねねど唐ころも思ふ心は千重にぞ有りける

題知らず

遠く行く人の爲めには我袖の涙の玉も惜しからなくに

讀人知らず

惜むとて留まる事こそ難からめ我が衣手を干してだに行け

田舍へまかりける時　　貫之

糸に縒る物ならなくに別れ路は心細くも思ほゆるかな

陸奥の國の守これともがまかり下りけるに、彈正の親王〔章明親王カ〕の膏藥遣はしけるに

戒秀法師

龜山に生く〔行〕藥のみ有りければ止むる方も無き別れかな

藤原まさただが豐前ノ守に侍りける時、爲頼が裝束なしとて下り侍りけるに、餞し侍るとて

思ふ人在る方へ行く別れ路を惜む心ぞ且つは理無き　藤原ノ清正

肥後ノ守にて清原ノ元輔下り侍りけるに、源ノ滿仲餞し侍りけるに、杯把りて　元輔

如何ばかり思ふらんとか思ふらん老いて別るる遠き別れを

返し　源ノ滿仲朝臣

君は好し行末遠し留まる身の待つほど如何が有らんとすらん

題知らず　讀人知らず

後れ居て我が戀ひ居れば白雲のたなびく山を今日や越ゆらん

命をぞ如何ならんとは思ひ來し生きて別るる世にこそ有りけれ　右衞門

筑紫へまかりける人の許に云ひ遣はしける　橘ノ倚平

昔見し生きの松原言問はば忘れぬ人も有りと答へよ

陸奥ノ守にて下り侍りける時、三條ノ太政大臣〔頼忠〕餞し侍りければ、詠み侍りける　藤原ノ爲頼

武隈の松を見つつや慰めん君が千年の蔭に並びて

陸奥の國の白河の關越え侍りけるに　平ノ兼盛

便り有らば如何で都へ告げやらん今日白河の關は越えぬと

東路の木の下晴［下蔭］く成り行かば都の月を戀ひざらめやは　右衛門ノ督公任

實方朝臣、陸奧の國へ下り侍りけるに、下鞍遣はすとて

題知らず

旅行かば袖こそ濡るれ守山の雫にのみはおほせざらなん　讀人知らず

恒德公［爲光］ノ家の障子に

潮滿てる程に行き交ふ旅人や濱名［無］の橋と名づけ初めけん　兼盛

田簑の島の邊にて雨に逢ひて

雨に由り田簑の島を分け行けど名には隱れぬものにぞ有りける　貫之

難波に祓し侍りて、まかり歸りける曉に、森の侍りけるに杜鵑の鳴き侍りけるを聞きて

はとときす哢ながらの聲聞けば草の枕ぞ露けかりける　伊勢

物へまかりける路にて、雁の鳴くを聞きて

草枕我のみならず雁がねも旅の空にぞ鳴き渡りける　能宣

題知らず

君をのみ戀ひつつ旅の草枕露繁からぬ曉ぞ無き　讀人知らず

源ノ公貞が大隅へまかり下りけるに、關戸の院にて、月の明かりけるに、別れ惜み侍りて

平ノ兼盛

遙かなる旅の空にも後れねば羨ましきは秋の夜の月

秋、旅にまかりけるに、印南野に宿りて

能宣

女郎花我に宿借せ印南野の否と云ふとも此處を過ぎめや

筑紫へ下りける道にて

貫之

船路には草の枕も結ばねば起き〔沖〕ながらこそ夢も見えけれ

帥伊周、筑紫へまかり下りけるに、河尻離れ侍りけるに詠みける

弓削ノ嘉言

思出も無き故郷の山なれど隱れ行くはた哀れなりけり

流され侍りて後、云ひおこせて侍りける

贈太政大臣〔菅原ノ道眞〕

住が住む宿の木末を行くく隱るるまでに返り見しはや

笠の金岡が唐土に渡り侍りける時、妻の長歌詠みて侍りける、返し

金岡

浪の上に見えし小島の島隱れ行く空も無し君に別れて

唐土にて

柿ノ本ノ人麻呂〔作者ノ名ハ誤ナリ〕

天飛ぶや雁の使に何時しかも奈良の都に言傳て遣らん

拾遺和歌集　卷第七

物名

紅梅

鶯の巣造る枝を折りつれば子をば如「紅梅」何でか生まんとすらん　讀人知らず

櫻

花の色を顯露に愛でば浮華めきぬいさ暗「櫻」闇に成りて揷さん

岩柳

旅の睡は屋無き「岩柳」床にも寢られけり草の枕に露は置けども　藤原ノ輔相

さるとりの花

鳴く聲は數多すれども鶯に勝る鳥のは無「さるとりの花」くこそ有りけれ　伊勢

雁皮の花

わたつみの沖中に日の離「雁皮の花」れ出でて燃ゆと見ゆるは漁人の漁火か　讀人知らず

杜若

石楠草　　如覺法師

濃き色が何時はた〔杜若〕薄く移ろはん花に心も付けざらんから

下野花　　讀人知らず

紫の色には咲くな武藏〔石楠草〕野の草のゆかりと人もこそ知れ

龍膽

植ゑて見る君だに知らぬ花の名を我しも告げ〔下野〕ん事の奇しさ

川上に今より打たん〔龍膽〕網代には先づもみぢ葉や寄らんとすらん

桔梗

浮華人の眞垣近う〔桔梗〕な花植ゑそ匂ひも敢へず折り盡しけり

朝顏

我宿の花の端にのみ寢る蝶の如何なる朝か外〔朝顏〕よりは來る

牽牛子

忘れにし人の更にも戀しきか無下に來じ〔牽牛子〕とは思ふものから

蘭

秋の野に花てふ花を折りつれば侘びしらに〔蘭〕こそ虫も鳴きけれ

刈萱　　忠岑

白露の掛かるがや〔刈萱〕がて消えざらば草葉ぞ玉の櫛笥ならまし

萩の花

山川は木の葉流〔萩の花〕れず淺き瀨を塞けば淵とぞ秋は成るらん

松虫

瀧つ瀨の中に玉積む白〔松虫〕浪は流るる水を緒にぞ貫きける

蜩

今來んと云ひて別れし朝より思ひ暮し〔蜩〕の音をのみぞ泣く

杣人は宮木引くらし〔蜩〕あしびきの山の山彥響動むなり　　貫之

松の音は秋の調に聞ゆなり高く促め上げて風ぞ彈くらし〔蜩〕

一本菊　　祐見

淫華なりと人非難き來〔一本菊〕る物しもぞ花の邊りを過ぎ難てにする

蘇芳宮

鶯の巢は動け〔蘇芳宮〕ども主も無し風に任せて何地往ぬらん

大和

古道に我や迷「大和」はんいにしへの野中の草は茂り合ひにけり

印南野

住吉の岡の松傘さしつれば雨は降るとも否蓑「印南野」は着じ

來栖野

白浪の打寄くる渚「來栖野」の乾かぬに我袂こそ劣らざりけれ

木の島に尼の詣でたりけるを見て

水も無く舟も通はぬ此島「木の島」に如何でか漁人の艶め「生海布」かる「苅」らん

在原元方

淀川

植ゑて往にし人も見なくに秋萩の誰れ見よとかは「淀川」花の咲くらん

貫之

あしびきの山邊に居れば白雲の如何にせよとか晴「淀川」るる時無き

在原業平朝臣

小河の橋

筑紫より此庵まで來れど苞も無し太刀の緒革の端「小河の橋」のみぞ有る

くまのくらと云ふ山寺に賀縁法師の宿りて侍りけるに、住持し侍りける法師に歌詠めと云ひければ詠め

る

讀人知らず

身を捨てて山に入りにし我なれば熊の食ら「くまのくら」はん事も覺えず

犬飼の御湯

鳥の子はまだ雛ながら立ちて往ぬ卵の見ゆ「犬飼の御湯」るは巣守なりけり

荒船の御社

高向ノ草春

莖も葉も皆綠なる深芹は洗ふ根のみや白「荒船の御社」く見ゆらん

名取の郡

貫之

徒なりな鳥の氷に「名取の郡」に下り居るは下より解くる事は知らぬか

名取の御湯

兼盛

雪東な雲の通路見こしがな鳥のみ行「名取の御湯」けば跡はかも無し

佐波古の御湯

讀人知らず

飽かずして別るる人の住む里は然に此の見ゆ「佐波古の御湯」る山の彼方か

紀 輔時

鼓の嶽

篝火の所定めず見えつるは流れつつのみ燒け「鼓の嶽」ばなりけり

檉の木

神南備の三室の岸「櫁の木」の崩るらん立田の川の水の濁れる

櫁の木　輔見

怒り猪の石を含みて咬み來しは象の牙「きさの木」にこそ劣らざりけれ

花柑子　仙慶法師

五月雨にならぬ限りは杜鵑何かは鳴かん忍「花柑子」ぶばかりに

桃　輔見

心ざし深き時には底の藻も「桃」潜き出でぬる物にぞ有りける

榛子　讀人知らず

面影に戀見「榛子」ゆる君なれど戀しきことぞ時ぞとも無き

錬り柿　輔見

古は驕れりしかど侘びぬれば舍人が衣「錬り柿」も今は着つべし

尾張米

池を張り籠め「尾張米」たる水の多かれば井樋の口より餘るなるべし

松茸

あしびきの山下水に濡れにけりその火先づ焚け「松茸」衣焙らん

厭へどもつらき形見を見る時は先づ猛「松茸」からぬ音こそ泣かるれ

莨菪苗

山高み花の色をも見るべきに憎く立ち「くくたち」める霧かな

蒟蒻

野を見れば春めきにけり青葛籠にや組「こにやく」まゝし若菜摘むべく

そやし豆

漁りせし漁人の教へし何處にや島廻「そやし豆」るとて有りと云ひしは

高岳ノ相如

雉の雄鳥

河岸の踊り「雉の雄鳥」下るべき所あらば憂きに死にせぬ身は投げてまし「三字団つべし」

祐見

山雀女

もみぢ葉に衣の色は染みにけり秋の山から廻「山雀女」り来し間に

鵐

何とかや莖「かやくき」の姿は思ほえて怪しく花の名こそ忘るれ

大伴ノ黒主

鶇

我心あやしく浮華に春来れば花に附く身「つぐみ」と如何で成りけん

咲く花に思ひ附く身〔つぐみ〕のあぢきなき身に煩勞の入るも知らずて　祐見

燕

難波津に暗目〔つばくらめ〕にのみぞ舟は着く朝の風の定め無ければ　元輔

鰚

み吉野も若菜摘むらん卷向の檜原か〔はらか〕すみて日數經ぬれば　祐見

鮭搦

絁は裂けからみ〔鮭搦〕てぞ人は着る尋や足らぬと思ふなるべし

乾干の鮎

目迷ひ星の動搖〔ひぼしの鮎〕ぐと見えつるは螢の窓に飛ぶにぞ有りける

押鮎

はし鷹の招ぎ餌にせんと構へたる鼠弩動搖〔押鮎〕がすな鼠取るべく

包燒

吾妹子が身を捨てしより猿澤の池の堤や君〔包燒〕は戀しき

鰌煎

此家は賣るか入り〔鰌煎〕ても見てしがな主人ながらも買はんとぞ思ふ　重之

小贏子

東にて養はれたる人の子は舌濁み〔しただみ〕てこそ物は云ひけれ　讀人知らず

黄菜

春風の今朝早け〔黄菜〕れば鶯の花の衣も綻びにけり

糯餅

霞分け今雁〔まがり〕歸るものならば秋來るまでは戀ひや渡らん　祐見

橡、野老、橘

思ふどち所〔とち、ところ、〕も替へず住み經なん立ち離〔橘〕れなば戀しかるべし

朽葉色の折敷

あしびきの山の木の葉の落ち朽ちば色の惜しき〔朽葉色の折敷〕ぞ哀れなりける

足鼎

津の國の難波邊りに作る田は蘆か苗〔足鼎〕かとえこそ見分かね

客車

鷹飼のまだも來なくに繋ぎ犬の離れて行かむ投ぐる待〔客車〕つほど　躬恒

斑鳩二毛

事ぞとも聞くだに分かず理無くも人の怒るか逃げ〔斑鳩一毛〕や爲なまし

　鼠の琴の腹に子を生みたるを　　祐見

年を經て君をのみこそ寢住み〔鼠〕つれ異腹〔琴腹〕にやは子をば生むべき

　鴨頭草の衣を着て侍りけるに

ひさかたの月の衣〔つきの衣〕をば着たれども光は添はぬ我身なりけり

　象の牙の箱

夜と共に汐燒く漁人の絶えせねば渚の木の葉焦〔きさのきの箱〕れてぞ散る

　長莚

鶯の鳴かむ代〔長莚〕には我ぞ泣く花の匂ひや暫し留まると

　豹の皮

底へ鵜の川〔豹の皮〕浪分けて入りぬるか待つほど過ぎて見えずも有るかな

　鹿の皮の行縢

彼の川の六川來〔鹿の皮のむかばき〕過ぎて深からば渡らで唯だに歸るばかりぞ

　庚申

彼の江去る〔庚申〕舟待て暫し言問はん沖の白浪まだ立たぬ間に

辛と云ふことを

さ雄鹿の友〔辛〕紛はせる聲すなり妻や戀しき秋の山邊に　　眞靜法師

子、丑、寅、卯、辰、巳　　讀人知らず

一夜寢〔子〕て憂しと等〔丑寅〕こそは思ひけめ浮〔卯〕名立つ身〔辰巳〕ぞ侘びしかりける

午、未、申、酉、戌、亥

生〔午〕れより羊草〔未〕作れば山に去る〔申〕獨り〔酉〕往ぬ〔戌〕るに人率〔亥〕て行ませ

四十九日　　祐見

秋風の四方の山より己がじし吹くに散〔四十九日〕りぬる紅葉悲しな

拾遺和歌集　卷第八

雜上

月を見侍りて　　中務卿貞平親王

世に經〔降〕るに〔二字[イ]れば〕物思ふとしも無けれども月に幾度眺め〔長雨〕しつらん

清愼公ノ家ノ屛風に　貫之
思ふこと有りとは無しにひさかたの月夜となれば寢られざりけり
女に後れて侍りける頃、月を見侍りて　大江ノ爲基
眺むるに物思ふことの慰むは月は憂き世の外よりや行く
法師に成らんと思ひ立ち侍りける頃、月を見侍りて　藤原ノ高光
斯くばかり經難く見ゆる世の中に羨ましくも澄〔住〕める月かな
冷泉院の、東宮におはしましける時、月を待つ心の歌、男どもの詠み侍りけるに　藤原ノ仲文
有明の月の光を待つ程に我世の甚く更けにけるかな
參議玄上が女の、月の明き夜、門の前を渡るとて、消息云ひ入れて侍りければ　伊勢
雲居にて相語らはぬ月だにも我宿過ぎて行く時は無し
花山にまかりて侍りけるに、駒引の御馬を遣はしたりければ　素性法師
望月の駒より遲く出でつればたどるたどるぞ山は越えける
屛風の繪に　貫之
常よりも照り勝るかな山の端の紅葉を分けて出づる月影　躬恒

ひさかたの天つ空なる月なれど何れの水に影宿るらん

廉義公、後院に住み侍りける時、歌詠み侍りける人人召し集めて、「水ノ上ノ秋ノ月」と云ふ題を詠ませ侍りけるに　　左大將濟時

水底に宿る月さへ浮べるを深き「イ沈む」や何の水「身」屑なるらん

式部ノ大輔文時

水の面に月の沈むを見ざりせば我れ獨りとや思ひ果てまし

除目の朝に、命婦左近が許に遣はしける　　元輔

年毎に絶えぬ涙や積りつついとど深くは身を沈むらん

圓融院ノ御時ノ御屏風ノ歌奉りける次でに添へて奉りける　　順

程も無く泉「和泉」ばかりに沈む身は如何なる罪の深きなるらん

權中納言敦忠が西坂本の山庄の瀧の岩に書き付け侍りける　　伊勢

音羽川塞き入れて落す瀧つ瀬に人の心の見えもするかな

中務

君が來る宿に絶えせぬ瀧の糸は經「綜」て見まほしき物にぞ有りける

題知らず　　貫之

流れ來る瀧の白糸絶えずして幾らの玉の緒とか成るらん

延喜十三年、齋院ノ御屛風四帖が歌、仰せに由りて

流れ來る瀧の糸こそ弱からし貫けど亂れて落つる白玉

大覺寺に人人あまたまかりたりけるに、古き瀧を詠み侍りける　右衛門ノ督公任

瀧の糸「ノ音」は絶えて久しく成りぬれど名こそ流れて猶聞えけれ

題知らず　躬恒

大空を眺めぞ暮す吹く風の音はすれども目にし見えねば

野の宮に齋宮の庚申し侍りけるに、「松ノ風入ル夜ノ琴ニ」と云ふ題を詠み侍りける　齋宮ノ女御

琴の音に峰の松風通ふらし何れの緒「丘」より調べ初めけん

松風の音に亂るる琴の音を彈「引」けば子の日の心地こそすれ

天曆ノ御時、名ある所々を御屛風に書かせ給ひて、人人に歌奉らせ給ひけるに、高砂を　忠見

尾の上なる松の木末は打なびき浪の聲にぞ風も吹きける

延喜ノ御時、御屛風に　貫之

雨降ると吹く松風は聞ゆれど池の汀は增さらざりけり

同じ御時、大井に行幸ありて、人人に歌詠ませさせ給ひけるに

大井川川邊の松に言問はん斯かる御幸や有りし昔も

住吉に國の司の臨時祭し侍りける舞人にて、杯把りて詠み侍りける

昔にのみ聞きわたりつゝ住吉の松の千年を今日見つるかな

五條の尙侍の賀の屏風に、松の海に浸りたる所を　伊勢

海にのみ浸ぢたる松の深綠幾入とかは知るべかるらん

物へまかりける人に、幣遣はしける衣箱に、浮島の繪描し侍りて　能宣

わたつみの浪にも濡れぬ浮島は松に心を寄せて賴まん

題知らず　讀人知らず

賀古の島松原越しに鳴く鶴のあな長長し聞く人無しに

相語らひ侍りける人、陸奥國へまかりければ　能宣

如何で猶我身に代へて武隈の松〔待〕ともならん行く人の爲め

河原ノ院の古キ松を詠み侍りける　源ノ道濟

行末のしるしばかりに殘るべき松さへ甚く老いにけるかな

題知らず　讀人知らず

世の中を住み好し〔住吉〕としも思はぬに何を待つ〔松〕とて我身經ぬらん

官賜らで歎き侍りける頃、人の草子書かせ侍りける奥に書き付け侍りける　　貫之

いたづらに世に經るものと高砂の松も我をや友と見るらん

明石の浦のほとりを舟に乘りてまかりけるに　　源為憲

夜と共に明石〔明し〕の浦の松原は浪をのみこそ寄る〔夜〕と知るらめ

題知らず　　讀人知らず

藻刈舟今ぞ渚に來寄すなる汀の鶴も聲騷ぐなり

打忍びいざ住の江の忘れ草忘れて人の又や摘まんと

山寺にまかりける曉に、蜩の鳴き侍りければ　　左大將濟時

朝ぼらけ蜩〔日暮〕の聲聞ゆなり此や明暮と人の云ふらん

天暦ノ御時、御屏風の繪に、長柄の橋の橋柱の僅かに殘れる繪ありけるを　　藤原ノ清正

蘆間より見ゆる長柄の橋柱昔の跡の知るべなりけり

大江ノ爲基が許に賣りに參うで來たりける鏡の、包みたりける紙に書き付けて侍りける　　讀人知らず

今日までと見るに涙の眞銅〔增〕鏡馴れにし影を人に語るな

橘ノ直幹が、人の女に忍びて物云ひ侍りける頃、遠き所にまかり侍るとて、此女の許に云ひ遣はしける

忘るなよ程は雲居に成りぬとも空行く月の廻り逢ふまで

題知らず　貫之

年月は昔に有らず成りゆけど戀しき事は變らざりけり

淸愼公、月林寺にまかりけるに、後れて詣で來て詠み侍りける　藤原ノ後生

昔我が折りし桂の甲斐も無し月の桂の召しに入れねば

菅原の大臣、冠し侍りける夜、母の詠み侍りける

ひさかたの月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな

題知らず　人麿呂

鴨頭草に衣は摺らん朝露に濡れての後は移ろひぬとも

千千わくに人は云ふとも織りて着ん我が機物に白き麻衣

ひさかたの雨には着ぬをあやしくも我が衣手の干る時も無き

白浪は立〔我〕てど衣に重ならず明石も須磨も己が浦浦〔裏裏〕

唐土へ遣はしける時に詠める

夕暮れば衣手寒し吾妹子が解き洗ひ衣行きて早着ん

流され侍りける道にて詠み侍りける　贈太政大臣〔菅原ノ道眞〕

天つ星路も宿りも有りながら空に浮きても思はゆるかな

浮木と云ふ心を

流れ木も三年ありても逢ひ見てん世の憂き事ぞ返らざりける　平ノ定文

官取られて侍りける時、妹の女御の御許に遣はしける

憂き世には門鎖せりとも見えなくに何どか我身の出で難てにする　伊勢

中宮ノ長恨歌の御屏風に

木にも生ひず羽も比べで何しかも浪路隔てて君を聞くらん　人麻呂

大津の宮の荒れて侍りけるを見て

さざ浪や近江の宮は名のみして霞たなびき宮木守無し

初瀬へ詣でける路に、佐保山の邊りに宿りて侍りけるに、千鳥の鳴くを聞きて　能宣

曉の寢覺の千鳥誰が爲めか佐保の川原にをち返り鳴く

物へまかりける人の許に、幣を結び、袋に入れて遣はすとて

淺からぬ契結べる心葉は手向の神ぞ知るべかりける

初瀬の路にて三輪の山を見侍りて　元輔

三輪の山しるしの杉は有りながら敎へし人は無くて幾世ぞ

對馬ノ守小野のあきみちが女隱岐が下り侍りける時に、ともまさ朝臣の女肥前が詠みて遣はしける

沖つ島雲居の岸を行き返り踏み〔文〕通はさん幻術もがな

詠レ天ヲ　　人麻呂

空の海に雲の浪立ち月の舟星の林に漕ぎ返る見ゆ

藻を詠める

川の瀬の渦卷く見れば玉藻刈る散り亂れたる川の舟かも

山を詠める

鳴る神の音にのみ聞く卷向の檜原の山を今日見つるかな

詠レ葉ヲ

古に有りけん人も我が如や三輪の檜原に挿頭折りけん

題知らず　　貫之

人知れず越ゆと思ひしあしびきの山下水に影は見えつつ

伊勢の御幸にまかり留まりて　　人麻呂

をふの海に船乘りすらん吾妹子が赤裳の裾に潮滿つらんか

天暦十一年九月十五日、齋宮下り侍りけるに、内裏より硯調じて賜はすとて　　御製〔村上天皇〕

思ふ事成［鳴］ると云ふなる鈴鹿山越えて嬉しき境とぞ聞く

圓融院ノ御時、齋宮下り侍りけるに、母の前齋宮もろともに越え侍りて　齋宮ノ女御

世に經［振］れば又も越えけり鈴鹿山昔の今に成［鳴］るにや有るらん

飛鳥の女王を歛むる時詠める　人麿

飛鳥川しがらみわたし塞かませば流るる水も長閑からまし

小一條ノ左大臣［藤原ノ師尹］まかり隱れて後、彼家に侍りける鶴の鳴き侍りけるを聞きて　小野ノ宮ノ太政大臣［藤原ノ實頼］

後れ居て鳴くなるよりは鶴の何どか齡を讓らざりけん

左大臣［藤原ノ道長］の、土御門の左大臣［源ノ雅信］の婿に成りて後、鶴の雛を取りにおこせて侍りければ　愛ノ宮

年を經て立ち習しつる汀［足］鶴の如何なる方［型］に跡留むらん

大貳國章、穀の帶を借り侍りけるを、筑紫より上りて返し遣はしたりければ　元輔

行末の忍ぶ草にも有りやとて露の形見も置かんとぞ思ふ

題知らず　中務

植ゑて見る草葉ぞ世をば知らせける置［起］きては消ゆる今朝の朝露

田舍にて病ひ侍りけるを、京より人の問ぶらひにおこせて侍りければ　弓削嘉言

露の命惜しとには有らず君をまた見でやと思ふぞ悲しかりける

神明寺の邊に無常所設けて侍りけるが、いと面白く侍りければ　元輔

惜しからぬ命や更に延びぬらん終りの煙燻むる野邊にて

二條ノ右大臣、左近ノ番長佐伯ノ清忠を召して歌詠ませ侍りけるを、望む事侍りけるが、協ひ侍らざりける頃にて、詠み侍りける

限り無き涙の露に結ばれて人の下〔霜〕とは成るにや有るらん

加階し侍るべかりける年、え爲侍らで、雪の降りけるを見て　元輔

憂き世には行き〔雪〕隱れなでかき曇り經〔降〕るは思の外にも有るかな

司召に賜らざりける頃、人の問ぶらひにおこせたりける返り事に　源景明

侘人は憂き世の中に生けらじと思ふことさへ協はざりけり

題知らず　讀人知らず

世の中に有らぬ所も得てしがな年舊りにたる形隱さん

世の中を斯く云ひ云ひの〔困て〕果て果ては如何にや如何に成らんとすらん

男侍りける女を切に掛想し侍りて、男の云ひ遣はしける

古の虎の類ひに身を投げば然か〔釋迦〕とばかりは問はんとぞ思ふ

拾遺和歌集　卷第九

雜下

或所に「春秋何れか勝る」と問はせ給ひけるを、詠みて奉りける　紀ノ貫之

春秋に思ひ亂れて分きかねつ時に付けつつ移る心は

元良親王、承香殿の俊子に「春秋何れか勝る」と問ひ侍りければ、「秋もをかしう侍り」と云ひければ、面白き櫻を、「是れは如何が」と云ひて侍りければ

大方の秋に心は寄せしかど花見る時は何れとも無し

題知らず　讀人知らず

春は唯だ花の偏〔一重〕に咲くばかり物の哀れは秋ぞ勝れる

圓融院の上、「鶯と杜鵑と何れか勝ると申せ」と仰せられければ　大納言朝光

折からに何れとも無き鳥の音も如何が定めん時ならぬ身は　參議伊衡

躬恒、忠岑に問ひ侍りける

白露は上より置くを如何なれば萩の下葉の先づ紅づらん　躬恒

答ふ

さ雄鹿のしがらみ伏する秋萩は下葉や上に成り返るらん　忠岑

秋萩は先づ差す枝より移ろふを露の分くとは思はざらなん　伊衡

又問ふ

千年經る松の下葉の色づくは誰がしたかみ(モトノママ)に掛けて返すぞ　躬恒

答ふ

松と云へど千年の秋に逢ひ來れば忍びに落つる下葉なりけり　伊衡

又問ふ

白栲の白き月をも紅の色をも何どか明しと云ふらん　躬恒

答ふ

昔より云ひし來にける言なれば我等は如何が今は定めん

又問ふ　伊衡

影見れば光無きをも衣縫ふ糸をも何どか夜〔縒〕と云ふらん

答ふ　躬恒

烏羽玉の夜は戀しき人に逢ひて糸をも縒〔寄〕れば逢〔合〕ふとやは見る

又問ふ　伊衡

夜晝の數は三十路に餘らめを何ど長月と云ひ初めけん

答ふ　躬恒

秋深み戀する人の明しかね夜を長月と云ふにや有るらん

歌合の合はせず成りにけるに　讀人知らず

水の沫や種と成るらん浮草の蒔〔負〕く人無み〔浪〕の上に生ふれば

此歌貫之が集に有り

草合し侍りける所に　恵慶法師

種無くて無き物草は生ひにけり負〔蒔〕くてふ事は有らじとぞ思ふ

何ぞ何ぞ〔謎〕物語しけるに　曾根好忠

我事はえも岩〔云〕代の結び松千年を經とも誰か解くべき

題知らず　　讀人知らず

あしびきの山の小寺に住む人は我が云ふ事も協はざりけり

健守法師、佛名の野臥にてまかり出でて侍りける年、云ひ遣はしける　　源ノ經房朝臣

山ならぬ住所數多に聞く人は野臥に疾くも成りにけるかな

返し　　健守法師

山臥も野臥も斯くて試みつ今は舍人の閨ぞゆかしき

屏風に、法師の舟に乘りて漕ぎ出でたる所　　右大將道綱ノ母

わたつみは漁人の舟こそ有りと聞け乘り違へても漕ぎ出でたるかな

内裏より、人の家に侍りける紅梅を掘らせ給ひけるに、鶯の巣くひて侍りければ、家の主人の女先づ斯く奏せさせ侍りける（世ニ村上天皇ノ御時、紀ノ内侍（貫之ノ女）ノ作ナリト傳フ）

勅なればいとも畏し鶯の宿はと問はば如何が答へん

斯く奏せさせければ掘らずなりにけり

或所に說經し侍りける法師の從僧ばらの居て侍りけるに、簾の中より「花を折りて」と云ひ侍りければ　　諦玄法師

否折らじ露に袂の濡れたらば物思ひけりと人もこそ見れ

月を見侍りて　　能宣

梓弓〔張〕かに見ゆる山の端を如何でか月のさして入〔射〕るらん

賀茂に詣でて侍りける男の、見侍りて、「今はな隠れそ、いと能く見てき」と云ひおこせて侍りければ　　伊勢

空目をぞ君は見たらし〔御洗〕川の水淺しや深し其れは我かは

能宣に、車の釭を乞ひに遣はして侍りけるに、「侍らず」と云ひて侍りければ　　藤原ノ仲文

鹿を指して馬と云ふ人有りければ鴨〔釭〕をも鴛鴦〔惜し〕と思ふなるべし

返し　　能宣

無しと云へば惜〔鴛鴦〕むかも〔鴨、釭〕とや思ふらん鹿や馬とぞ云ふべかりける

廉義公ノ家の紙繪に、白馬ある所に蘆の花毛の馬ある所　　惠慶法師

難波江の蘆の花毛のまじれるは津の國飼の駒にやあるらん

津の守に侍りける人の許にて　　忠見

難波潟繁り合へるは君が代に惡しかる〔蘆刈〕業を爲ねばなるべし

津の國にまかれりけるに、知りたる人に逢ひ侍りて

都には住み佗び果てて津の國の住み好し〔住吉〕と聞く里にこそ行け

難波に祓しに或女まかりたりけるに、もと親しく侍りける男の、蘆を刈りて、あやしき樣なる路に逢ひて侍りけるに、然りげ無くて、年頃え逢はざりつることなど云ひ遣はしければ、男の詠み侍りける

君無くて悪しかり〔蘆刈〕けりと思ふにもいとど難波の浦ぞ住み憂き

返し

悪しから〔蘆刈〕じ善からんとてぞ別れけん何か難波の浦は住み憂き

伊勢の御息所、生み奉りたりける王子の亡くなりにけるが書き置きたりける繪を、麗景殿より麗景殿の女御の方に遣はしたりければ、此繪を返すとて　麗景殿ノ宮の君

亡き人の形見と思ふに奇しきは笑み〔繪見〕ても袖の濡るるなりけり

地獄の繪書きたるを見て　菅原ノ道雅ノ女

三途川渡る水棹も無かりけり何に衣を脱ぎて掛くらん

去年の秋、女に後れて侍りけるに、孫の、後の春、兵衞ノ佐に成りて侍りける喜びを、人人云ひ遣はし侍りければ　皇太后宮ノ權大夫國章

斯くしこそ春の始は嬉しけれ冷酷さは秋の終りなりけり

源ノ重之が母の近江の國府に侍りけるに、孫の東より夜上りて、「急ぐ事侍りて、え此度は逢はで上りぬること」と云ひて侍りければ、祖母の女の詠み侍りける

親の親と思はましかば訪ひてまし我子の子には有らぬなるべし

題知らず　人麿

山高み夕日隠れぬ淺茅原後見ん爲めに注縄結はましを

貫之

名のみして山は三笠も無かりけり朝日夕日の射すを云ふかも

讀人知らず

名のみして鳴［生］るも見えず梅津川ゐせきの水も［漏］守ればなりけり

名には云へど黒くも見えず漆川さすがに渡る水は濁［塗］めり

雨降る日、大原川をまかり渡りけるに、蛭の付きたりければ　惠慶法師

世の中にあやしきものは雨降れど大原川の干る［蛭］にぞありける

冠柳を見て　仲文

川柳糸は緑に有るものを何れか紅の衣なるらん

天暦御時、一條攝政［伊尹］、藏人頭にて侍りけるに、帶を賭けて御碁遊ばしける、負け奉りて、御數多く成り侍りければ、帶を返し給ふとて　御製［村上天皇］

白浪の打ちや返すと待つ程に濱の眞砂［碁］の數ぞ積れる

內侍馬が家に、右大將實資が童に侍りける時、碁打ちにまかりたりければ、物書かぬ草子を賭け物にして侍りけるを見侍りて　　小野宮太政大臣〔實賴〕

何時しかと開けて見たれば濱千鳥跡あることに跡の無きかな

返し〔馬內侍〕

留めても何にかはせん濱千鳥舊りぬる跡は浪に消えつつ

題知らず　　讀人知らず

水底の湧く〔枠〕ばかりにや斯か〔掛〕るらん寄〔縒〕る人も無き瀧の白糸

清原元輔、肥後守に侍りける時、彼國の鼓の瀧と云ふ所を見にまかりたりけるに、異樣なる法師の詠み侍りける〔法師某〕

音に聞く鼓の瀧を打見れば唯だ山川の鳴るにぞ有りける

三位國章、小さき瓜を扇に置きて、藤原かねのりに持たせて、大納言朝光が兵衛佐に侍りける時遣はしたりければ〔朝光〕

音に聞く狛の邊りの瓜作と成〔生〕り斯く成〔生〕り成〔生〕る心かな

返し

定め無く生〔成〕るなる瓜の面見ても立ちや寄り來ん狛の好色者

陸奥國名取の郡黒塚と云ふ所に、重之が妹あまた有りと聞きて、云ひ遣はしける　兼盛

陸奥の安達の原の黒塚に鬼籠れりと聞くは眞か

廉義公の家の紙繪に、旅人の盜人に逢ひたる繪書ける所　藤原爲賴

盜人の立田の山に入りにけり同じ挿頭の名にや汚れん

無き名のみ立「立つ」田の山の麓には世にも嵐「有らじ」の風も吹かなん

高尾にまかり通ふ法師に名立ち侍りけるを、少將しげもとが聞き付けて、「眞か」と云ひ遣はしたりければ　八條の大い君

無き名のみ高雄の山と云ひ立つる君は愛「浮華」宕の峰にや有るらん

御嶽に年老いて詣で侍りて　元輔

いにしへも上りやしけん吉野山山より高き齢なる人

大隅守櫻島忠信が國に侍りける時、郡の司に頭白き翁の侍りけるを召し考へんとし侍りにける時、翁の詠み侍りける

老い果てて雪の山をば戴けど霜と「答」見るにぞ身は冷えにける

此歌に由りて宥され侍りにける

旋頭歌(せどうか)

ます鏡底なる影に向ひ居て
見る時にこそ知らぬ翁に逢ふ心地すれ　〔作者ノ名ナシ〕

ます鏡見しかとぞ思ふ妹に逢はんかも
玉の緒の絶えたる戀の繁き此頃　柿ノ本ノ人麻呂

×

彼岡に草刈る男(をのこ)然かな刈りそ〔萬葉集、ね〕
有りつつも君か來まさんみ秣(まくさ)にせん

女の許にまかりたりけるに、疾く入りにければ、朝(あした)に　源ノ景明(かげあきら)

梓弓思はず〔筈〕にして入りにしを
さも妬(ね)たく引き留めてぞ臥すべかりける

長歌

吉野の宮に奉る歌　人麻呂

ちはやぶる我が大君の、聞し召す天の下なる、草の葉も潤ひにたりと、山川の澄める河内と、御心を吉野の國の、花盛り秋津の野べに、宮柱ふとしきまして、百敷の大宮人は、船並らべ朝川渡たり、船比べ夕川渡り、此川の絶ゆること無く、此山のいや高からし、玉水の瀧つの宮處、見れど飽かぬかも

反歌

見れど飽かぬ吉野の河の流れても絶ゆる時無く行き返り見ん

「右ハ萬葉集卷一ニアル作ヲ讀ミ誤レルナリ」

身の沈みぬる事を歎きて、勘解由ノ判官にて「てハ不用カ」　源ノ順

あらたまの年の二十に、足らざりし常「時」磐の山の、山寒み風も障らぬ、藤ごろも二たび立「裁」ちし、朝霧に心も空に、惑ひ初めみなしご「孤兒」草に、成りしより物思ふ事「言」の、葉を茂み消ぬべき露の、夜は起き「置」て夏は汀に、燃えわたる螢を袖に、拾ひつつ冬は花かと、見え紛ひ此面彼面に、降り積る雪を袂に、集めつつ書見て出でし、道は猶身の憂きにのみ、有りければ此處も彼處も、蘆根這ふ下にのみこそ、沈みけれ誰れ九つの、澤水に鳴く鶴の音を、ひさかたの雲の上まで、隠れ無み高く聞ゆる、甲斐ありて云ひ流しけん、人は猶甲斐もな「無」ぎさ「渚」に、滿つ汐の世には辛くて、住の江の松「待」は徒ら、老いぬれど緋の衣、脱ぎ捨てん春は何時とも、白「知」浪の波路に遠く、行き通ひゆも取りあへず、成りにける舟の我をし、君知らば哀れ今だに、沈めじと漁人の釣綱、うちはへて引くとし聞かば、物は思はじ

返し　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　能宣

世の中を思へば苦し、忘るればえも忘られず、誰れも皆同じみ山の、松［待］が枝と枯るること無く、天皇の千代も八千代も、仕へんと高き頼みを、隠れ沼の下より根ざす、あやめ草あやなき身にも、人並に斯かる［掛］心を、思ひつつ世に降［經］る雪を、君はしも冬は取り積み、夏はまた草の螢を、集めつつ光さやけき、ひさかたの月の桂を、折るまでに時雨に濡ち、露に濡れ經にけん袖の、深緋色褪せがたに、今は成り且つ下葉より、紅に移ろひ果てん、秋に逢はば先づ開けなん、花よりも木高き蔭と、仰がれん物とこそ見し、鹽釜のうら［浦］寂しげに、何ぞも斯く世をしも思ひ、那須の湯のたぎる故をも、構へつつ我身を人の、身に成して思ひ比べよ、百敷に明し暮して、常夏の雲居遥けき、皆人に後れて歎く、我も有らし

或男の物云ひ侍りける女の、忍びて逃げ侍りて、年頃ありて、消息して侍りけるに、男の詠み侍りける

讀人知らず

今はとも云はざりしかど、八少女の立つや春日の、故里に歸りや來ると、眞土山待つほど過ぎて、雁がねの雲の外にも、聞えねば我は空しき、玉梓を書く手も倦く、結び置きて傳て遣る風の、便りだにな［無］きさ［渚］に來ゐる、夕千鳥恨みは深く、滿つ汐に袖のみいとど、濡れつつぞ跡も思はぬ、君に由り甲斐無き濱に、何しかも我のみ獨り、浮舟の漕が［憧］れて世には、渡るらんとさへぞ果ては、蚊遣火の悔［燻］ゆる心も、付きめべく思ひなるまで、音づれずおぼつかなくて、歸れども今日水ぐきの、跡見れば契りし事は、

君もまた忘れざりけり、然かし有らば誰れも憂き世の、朝露に光待つ間の、身にし有れば思はじ如何で、常
夏の花の移ろふ、秋も無く同じ邊りに、住の江の岸の姫松、根を結び世世を經つつも、霜雪の降るにも濡
れぬ、中と成りなん

圓融院ノ御時、大將放れ侍りて後、久しく參らで、奏せさせ侍りける　東三條ノ太政大臣〔藤原兼家〕

あはれ我れ五つの宮の、宮人と其數ならぬ、身を成して思ひし事は、掛けまくも畏けれども、頼もしき蔭に
二たび、後れたる二葉の草を、吹く風の荒き方には、當てじとて狹き袂を、防ぎつつ塵も据ゑじと、磨き
ては玉の光を、誰れか見んと思ふ心に、おほけなく上つ枝をば、さし越えて花咲く春の、宮人と成りし常
〔時ノ盤は、如何ばかり繁き蔭とか、頼まれし末の世までと、思ひつつ九重の、其中にいつき居ゑしも、
ことでしも誰れならなくに、小山田を人に任せて、我は唯だ袂濕つ〔案山子〕に、身を成して二春三春、
過ごしつつその秋冬の、朝霧の絶間にだにもと、思ひしを峰の白雲、横ざまに立ち變りぬと、見てしかば身
を限りとは、思ひにき命有らばと、頼みしは人に後るる、名なりけり思ふも著し、山川の水下〔皆下〕なり
し、諸人も動かぬ岸に、守り上げて沈む水屑の、果て果てはかき流されし、神無月薄き氷に、閉ぢられて留
まれる方も、泣き〔無〕侘ぶる涙沈みて、數ふれば冬も三月に、成りにけり長き夜な夜な、敷き栲の臥さず
休まず、明け暮し思へども猶、悲しきは八十氏人も、あだし世の例なりとぞ、騷ぐなる況して春日の、杉む
らに未だ枯れたる、枝は有らじ大原野邊の、つぼ菫罪〔摘〕犯し有る、ものならば照る日も見よと、云ふこ

とせ年の終りに、清めずは我身ぞ遂に、朽ちぬべき谷の埋れ木、青くとも然こそ止みなん、年の内に春吹く風も、心あらば袖の氷を、解けと吹かなん

是れが御返り、唯だ「稲舟の」と仰せられたりければ、又御返し「東三條ノ太政大臣」

如何にせん我身下れる稲舟の暫しばかりの命堪へずば

拾遺和歌集　卷第十

神樂歌

榊葉に木綿幣掛けて誰が世にか神の御前に祝ひ初めけん

榊葉の香を香はしみ覓め來れば八十氏人ぞ圓居せりける

御幣に成らましものを皇神の御手に取られて馴さはましを

御幣は我がにはあらず天に在す豐岡姫の宮の御幣

逢坂を今朝越え來れば仙人の千歳つけとて切れる杖なり

四方山の人の寶とする弓を神の御前に今日たてまつる

石の上布留や男の太刀もがな組の緒垂て宮路通はん

銀の目貫の太刀を下げ佩きて奈良の都を練るや誰が子ぞ

我駒は早く行かなん朝日子が八重さす岡の玉笹の上に

さいばりに衣は摺らん雨降れど移ろひ難し深く染めてば

しなが鳥猪名の柴原飛び渡る鴫の羽音面白きかな

住吉の來し［岸］もせざらん物故に妬たくや人に待つ［松］と云はれん

或人の云く、住吉明神の託宣とぞ

左兵衛ノ督高遠、賀茂に七日詣でける果ての夢に、御社よりとて、ちはや［祭服の一種］着たる老女の、文を持て參で来たりけるを、開けて見侍りければ、斯く書きて侍りける。其後大貳に成りて侍りける

木綿襷掛かる［斯かる］袂は煩はし闕げに解きて有らんとを知れ

住吉に詣でて　　安法法師

天降る現人神の相生を思へば久し住吉の松

恵慶法師

我が問はば神代の事も答へなん昔を知れる住吉の松

箱崎を見侍りて　　重之

幾世にか語り傳へん箱崎の松の千歳の一つならねば

源ノ遠古朝臣、子生ませて侍りけるに　　元輔

生ひ茂れ平野の原のあや［綾］杉よ濃き紫に立ち［裁］重ぬべく

比叡の社にて詠み侍りける　　僧都實因

願ぎ掛くる比叡の社の木綿襷草の垣葉も言止めて聞け

恆德公ノ家ノ障子に　　源ノ兼澄

大淀の濱に幾世に成りぬらん神さびにたる浦の姫松

粟田ノ右大臣ノ家の障子に、唐崎に移したる所に網引く繪書ける所　　平ノ祐擧

御祓する今日唐崎に下ろす網は神の承け引くしるしなりけり

題知らず　　人麻呂

ちはやぶる神の保てる命をば誰れが爲めにか長くと思はん

ちはやぶる神も思ひの有ればこそ年經て富士の山も燃ゆらめ

安和元年、大嘗會ノ風俗、長柄の山　　大中臣ノ能宣

君が代の長柄の山の甲斐ありと長閑けき雲の居る時ぞ見る

小浪の長柄の山の長らへて樂しかるべき君が御代かな

岩倉山　　讀人知らず

動き無き岩倉山に君が代を運び置きつつ千世をこそ積め

三上の山　　能宣

ちはやぶる三上の山の榊葉は榮えぞ増さる末の世までに

讀人知らず

萬づ代の色も變らぬ榊葉は三上の山に生ふるなりけり

元輔

萬づ代を三上の山の響くには八洲の川水澄みぞ合ひにける

大藏山　　能宣

貢積む大藏山は常磐にて色も變らず萬づ代や經ん

水尾山　　讀人知らず

高島や水尾の中山杣立てて作り重ねよ千世の並藏

鏡山　　能宣

磨きける心も著し鏡山曇り無き世に逢ふが樂しさ

松が崎　　清原ノ元輔

千歳經る松が崎には群れ居つつ鶴さへ遊ぶ心有るらし

御物の濱　　兼盛

滯る時も有らじな近江なる御物の濱の天の日嗣は

天祿元年、大嘗會ノ風俗、千世能山　　能宣

今年より千歳の山は聲絶えず君が御代をぞ祈るべらなる

彌高の山　　兼盛

近江なる彌高山の諸にて君が千代をば祈り飾らん

三上の山　　能宣

祈り來る三上の山の甲斐〔峡〕し有れば千年の影に斯くて仕へん

岩倉山

今日よりは岩倉山に萬づ代を動き無くのみ積さんとぞ思ふ

鏡山　　中務

萬づ代を明らけく見ん鏡山千年の程は塵も積らじ

大國の里　　兼盛

年も好し蠶飼も得たり大國の里頼もしく思ほゆるかな

吉田の里

名に立てる吉田の里の杖なれば衝くとも盡きじ君が萬づ代

泉川

泉川のどけき水の底見れば今年は影ぞ澄み増さりける

松が崎

鶴の住む松が崎には並べたる千代の例を見するなりけり

延長四年八月廿四日、民部卿清貫が六十ノ賀、中納言恒佐が妻し侍りける時ハ屏風に、神樂する所の歌

貫之

あしびきの山の榊葉常磐なる蔭に榮ゆる神の宜禰かな

旅にて詠み侍りける　人麻呂

大名牟遅少名御神の造れりし妹夫の山を見るぞ嬉しき

延喜廿年、亭子院の春日に御幸侍りけるに、國の司廿一首歌詠みて奉りけるに

藤原ノ忠房

珍らしき今日の春日の八少女を神も嬉しと偲ばざらめや

拾遺和歌集　卷第十一

戀一

天暦ノ御時ノ歌合　壬生ノ忠見

戀すてふ我名は尙早（まだき）立ちにけり人知れずこそ思ひ初（そ）めしか

平ノ兼盛

忍ぶれど色に出でにけり我戀は物や思ふと人の問ふまで

題知らず　貫之

色ならば映（うつ）るばかりも染めてまし思ふ心を知る人の無き

女の許に初めて遣はしける　平ノ公誠

忍ぶるも誰れ故ならぬものなれば今は何かは君に隔てん

題知らず　讀人知らず

歎き餘り終に色にぞ出でぬべき云はぬを人の知らばこそ有らめ

逢ふ事を待つ〔松〕にて年の經ぬるかな身は住の江に生ひぬものゆゑ

音に聞く人に心を筑波嶺の見ね〔峰〕ど戀しき君にも有るかな

人麻呂

天雲の八重雲隠れ鳴る神の音にのみやは聞き渡るべき

讀人知らず

見ぬ人の戀しきや何ぞおぼつかな誰とか知らん夢に見ゆとも

夢よりぞ戀しき人を見初めつる今は合〔逢〕はする人も有らなん

斯くてのみ有磯の浦の濱千鳥外に泣〔鳴〕きつつ戀ひや渡らん

外にのみ見てやは戀ひん紅の末摘む花の色に出でずは

まさただが女に云ひ初め侍りける、侍從に侍りける時　　權中納言敦忠

身に沁みて思ふ心の年經れば終に色にも出でぬべきかな

侍從に侍りける時、女に初めて遣はしける　　くにまさ

如何でかは知らせ初むべき人知れず思ふ心の色に出でずば　　權中納言敦忠

如何でかは斯く思ふてふ事をだに人傳てならで君に知らせん

堤の中納言〔藤原兼輔〕の御息所を見て遣はしける　　小野ノ宮ノ太政大臣〔實賴〕

あだ戀し僅かに人を水「見」の泡の消え返るとも知らせてしがな

返し「兼輔ノ女」

長からじと思ふ心は水の泡に比ふる人の頼まれぬかな

題知らず　　　　　　　　　　　　讀人知らず

湊出づる漁人の小舟の綻「編苦一繰」しきものと戀を知りぬる

大井河下す筏の水馴棹見慣れぬ人も戀しかりけり　　　　　　人麿

水底に生ふる玉藻の打なびき心を寄せて戀ふる頃かな　　　　讀人知らず

音にのみ聞きつる戀を人知れずつれなき人に依ひぬるかな

如何がせん命は限りあるものを戀は忘れず人はつれなし

女の許に男の文遣はしけるに、返り事もせず侍りければ

山彦も答へぬ山の呼子鳥我れ獨りのみ泣きや渡らん

題知らず

山彦は君にも似たる心かな我れ離せねば音づれもせず

あしびきの山下動響み行く水の時ぞとも無く戀ひわたるかな

如何にして暫し忘れん命だに有らば逢ふ夜の有りもこそすれ

貫き亂る涙の玉も留まるやと玉の緒ばかり逢はんと云はなん

岩の上に生ふる小松も引きつれど猶寢［根］難きは君にぞ有りける

織女も逢ふ夜ありけり天の川此の邊りには渡る瀬も無し

九條右大臣［師輔］

澤［多］にのみ年は經ぬれど汀鶴の心は雲の上にのみこそ

讀人知らず

大空は曇らざりけり神無月時雨ごこちは我のみぞする

忍ぶれど猶強ひてこそ思はゆれ戀と云ふものの身をし去らねば

男の詠みておこせて侍りける［某］

返し　中務

哀れとも思はじものを白雪の下に消えつつ猶も經［降］るかな

程無くも消えぬる雪は甲斐も無し身［見］を積みてこそ哀れと思はめ

題知らず　讀人知らず

外ながら逢ひ見ぬ程に戀ひ死なば何に代へたる命とか云はん

何時とてか我戀止まんちはやぶる淺間の嶽の烟絶ゆとも

大原野祭の日、榊にさして女の許に遣はすとて　一條攝政〔伊尹〕

大原の神も知るらん我戀は今日氏人の心遣らなん

返し　讀人知らず

榊葉の香さす枝の數多あれば咎むる神も有らじとぞ思ふ

題知らず

天地の神ぞ知るらん君が爲め思ふ心の限り無ければ

海も淺し山も程無し我戀を何に比へて君に云はまし　人麿

奥山の岩垣沼の水籠りに戀ひや渡らん逢ふ由を無み

大嘗會の御禊に物見侍りける所に、童女の侍りけるを見て、又の日遣はしける　寛祐法師

數多見し豐の御禊の諸人の君しも物を思はするかな

題知らず　讀人知らず

下簾の絹間に人を見て透好ける心は思ひ掛けてき

玉垂れの好〔簾、透〕ける心と見てしより冷淡〔由〕して言掛けぬ日に無し

我こそや見ぬ人戀ふる病すれ葵〔逢ふ日〕ならでは止む藥無し

玉江漕ぐ菰刈り舟のさしはへて浪間も有らば寄らんとぞ思ふ

海松海布〔見る目〕刈る漁人とは無しに君戀ふる我が衣手の乾く時無き

柿ノ本ノ人麿

三熊野の浦の濱木綿百重なる心は思へど唯だに逢はぬかも

貫之

朝な朝な梳れば積る落ち髮の亂れて物を思ふ頃かな

掛想し侍りける女の、さらに返りごとし侍らざりければ　藤原ノ實方朝臣

我が爲めは棚井の淸水溫けれど猶掻〔書〕き遣らん然ては澄〔住〕むやと

返し　讀人知らず

掻き遣らば濁りこそ爲め淺き瀨の水〔身〕屑は誰か澄〔住〕ませても見ん

題知らず

人知れぬ心の中を見せたらば今までつらき人は有らじな

女の許に遣はしける　小野ノ宮ノ太政大臣〔實賴〕

人知れぬ思ひは年も經にけれど我のみ知るは甲斐無かりけり

女の許に遣はしける　讀人知らず

人知れぬ涙に袖は朽ちにけり逢ふ夜も有らば何に包まん

返し〔采女〕　讀人知らず

君は唯だ袖ばかりをや朽たすらん逢ふには身をも換ふとこそ聞け

題知らず

人知れず落つる涙は津の國の流す〔長洲〕と見えて袖ぞ朽ちぬる

戀と云へば同じ名にこそ思ふらめ如何で我身を人に知らせん

天暦ノ御時ノ歌合に　中納言朝忠

逢ふ事の絶えてし無くばなかなかに人をも身をも恨みざらまし

題知らず　兼盛

逢ふ事は片膝行りする看阪兒〔嬰兒〕の立たん月にも逢はじとやする

逢ふ事を月日に添へて待つ時は今日行末に成りねとぞ思ふ

逢ふ事を何時とも知らで君が云はん常磐の山の待つ〔松〕ぞ苦しき

命をば逢ふに換ふとか聞きしかど我や例に逢はぬ死せん　貫之

　　讀人知らず

行末は終に過ぎつつ逢ふ事の年月無きぞ侘びしかりける

　　大伴〔石江〕百世

生きたれば戀する事の苦しきに猶命をば逢ふに換へてん

　　源ノ經基

戀ひ死なん後は何せん生ける日の爲めこそ人は見まく欲しけれ

　　讀人知らず

　掛想し侍りける女の家の前を渡るとて云ひ入れ侍りける

哀れとも君だに云はば戀ひ侘びて死なん命も惜しからなくに

　題知らず

人知れず思ふ心を留めつつ幾たび君が宿を過ぐらん

　　菅原ノ輔昭

　契りたる事ありける女に遣はしける

時雨にも雨にも有らで君戀ふる年の經る〔降〕にも袖は濡れけり

露ばかり賴めし程の過ぎ行けば消えぬばかりの心地こそすれ

返し　　讀人知らず

露ばかり頼むる事も無きものを契しや何に思ひ置きけん

題知らず

流れてと頼むるよりは山川の戀しき瀬々に渡りやは爲ぬ

逢ひ見ては死にせぬ身とぞ成りぬべき頼むるにだに延ぶる命は

如何でかと思ふ心の有る時はおぼめくさへぞ嬉しかりける

侘びつつも昨日ばかりは過ぐしてき今日や我身の限りなるらん

人麻呂

戀ひつつも今日は暮しつ霞立つ明日の春日を如何で暮さん

戀ひつつも今日は有りなん玉櫛笥明け〔開〕ん朝を如何で暮さん

讀人知らず

君をのみ思ひ掛鐫の玉櫛笥明け〔開〕立つ毎に戀ひぬ日は無し

拾遺和歌集　卷第十二

戀二

題知らず　讀人知らず

春の野に生ふる無き名の侘びしきは身を抓［摘］みてだに人の知らぬよ

無き名のみ立田の山の青葛また來［繰］る人も見えぬ所に　人麻呂

無き名のみ辰［立］の市とは騷げどもいさまた人を得［賣］る由も無し　讀人知らず

無き事を磐余［云はれ］の池の浮［憂］蓴菜［繩］苦［繰］しきものは世にこそ有りけれ　人麻呂

竹の葉に置き居る露の轉び合ひて寢［濡］るとは無しに立つ我名かな　讀人知らず

あぢきなや我名は立ちて唐ころも身にも馴らさで止みぬべきかな

年ごろも我に刃の讐なくに先づ立つ一番ものは無き名なりけり

源ノ重之

涙河に宿借る浪の早ければ無き名立つとも今は覚えじ

読人しらず

大荒木には罪なかりし言の葉ぞ実なき名を騒がしく立つ頃ぞ無し

女の許に遣はしける

藤原ノ忠房朝臣

君が名の立つに咎なき身なりせば大外人に為して見ましや

題しらず

読人しらず

夢かとも思ふべけれど寝もせずは何ぞ心に忘れ難きは

夢よ夢恋しき人に逢ひ見すな覚めての後は侘びしかりけり

権中納言敦忠

逢ひ見ての後の心に比ぶれば昔は物も思はざりけり

是則

逢ひ見ては慰むやとぞ思ひしに名残しもこそ忘れ難けれ

読人しらず

逢ひ見ても在りにしものを何時の間に習ひて人の戀しかるらん

我が戀は猶逢ひ見ても慰まずいや增さりなる心地のみして

能宣

初めて女の許にまかりて、翌朝に遣はしける

逢ふ事を待ちし月日の程よりも今日の暮こそ久しかりけれ

貫之

曉の無からましかば白露の起「置」きて侘びしき別れ爲ましや

逢ひ見ても猶慰まぬ心かな幾千夜寢てか戀の醒むべき

人麻呂

ぬばたまの今宵な明けそ明け行かば朝行く君を待つ苦しに

讀人知らず

獨り寢し時は待たれし鷄の音も稀に逢ふ夜は侘びしかりけり

葛城や我やは久米の橋造り明け行く程は物やこそ思へ

平ノ行時

本院ノ五の君の許に初めてまかりて、翌朝に

朝まだき露分け來「濡」つる衣手の乾「干」ぬ間ばかりに戀しきや何ぞ

大納言清蔭

本院の東の對の君にまかり通ひて、翌朝に

二つ無き心は君に置［起］きつるをまた程も無く戀しきや何ぞ

題知らず　讀人知らず

何時しかと暮を待つ間の大空は曇るさへこそ嬉しかりけれ

女の許にまかり初めて　大江ノ爲基

日の中に物を二度思ふかな疾く明けぬると遲く暮るると

題知らず　貫之

百羽搔き羽搔く鴫も我が如く朝侘びしき數は增さらじ

讀人知らず

現にも夢にも人に夜し逢へば暮れ行くばかり嬉しきは無し

曉の別れの路を思はずは暮れ行く空は嬉しからまし

君戀ふる涙の凍る冬の夜は心解けたる寢やは寢らるる

女に物云ひ初めて、障る事侍りてえまからで、云ひ遣はし侍りける　在原ノ業平朝臣

斯からでも有りにしものを白雪の一日も經［降］れば增さる我が戀

女に遣はしける　能宣

朝氷解くる間も無き君に由り何どて濡つる袂なるらん

讀人知らず

身を抓めば露を哀れと思ふかな曉毎に如何で置「起」くらん

戀しと思ふものから人の戀しきは何處を忍ぶ心なるらん

外にても有りにしものを花薄ほ「穗」のかに見てぞ人は戀しき

夢よりもはかなき物は陽炎の微かに見えし影にぞ有りける

天曆ノ御時ノ歌合に　忠見

夢の如何どか夜しも君を見ん暮るる待つ間も定め無き世に

順

戀しきを何に付けてか慰めん夢だに見えず寢る夜無ければ

女の許より暗きに歸りて遣はしける

明暗の空にぞ我は迷ひぬる思ふ心の行かぬまにまに

源ノ公忠朝臣、日日にまかり逢ひ侍りけるを、如何なる日にか有りけん、逢ひ侍らざりける日、遣はしける　貫之

玉鉾の遠路もこそ人は行け何ど時の間も見ねば戀しき

題知らず　讀人知らず

身に戀の餘りにしかば忍ぶれど人の知るらん事ぞ佗びしき

忍びつつ思へば苦し住の江の松の寢［根］ながら顯はれなばや

忠房が女の許に久しうまからで遣はしける　大納言清蔭

住吉の松ならねども久しくも君と寢ぬ夜の成りにけるかな

返し［忠房ノ女］

久しくも思ほえねども住吉の松や二たび生ひ變るらん　讀人知らず

或男の、松を結びて遣はしたりければ　讀人知らず

何せんに結び初めけん岩代の松［待］は久しきものと知る知る

題知らず

片岸の松［待］の浸き根［寢］と忍びしは然ればよ終に顯はれにけり

人麻呂

逢ひ見では幾久さにも有らねども年月の如思ほゆるかな

年を經て思ひ思ひて逢ひぬれば月日のみこそ嬉しかりけれ

杉板もて葺ける板間の逢［合］はざらば如何にせんとか我が寐初めけん

來ぬかなと將しは人に思はせん逢はで歸りし夜半の妬たさに

秋霧の晴れぬ朝の大空を見るが如くも見えぬ君かな

戀ひ侘びぬ音をだに泣かん聲立てて何處なるらん音無しの瀧

忍びて掛想し侍りける女の許に遣はしける　元輔

音無の河とぞ終に流れ出づる云はで物思ふ人の涙は

題知らず　讀人知らず

風寒み聲弱り行く虫よりも云はで物思ふ我ぞ勝れる

志賀の漁人の釣に點せる漁火の微かに妹を見る由もがな

戀するは苦しきものと知らすべく人を我身に將し爲さばや

知るや君知らずは如何につらからん我が斯くばかり思ふ心を

掛想し侍りける女の、五月夏至の日なりければ、疑ひ無く思ひ弛みて物云ひ侍りけるに、親しきさまに成りにければ、いみじく恨み侘びて後に、更に逢はじと云ひ侍りければ　能宣

明日知らぬ我身なりとて恨み置かん此世にてのみ止まじと思へば

題知らず　人麿

思ふなと君は云へども逢ふ事を何時と知りてか我が戀ひざらん

萬葉集和し侍りけるに　　源ノ順

思ふらん心の中を知らぬ身は死ぬばかりにも有らじとぞ思ふ

侍從に侍りける時、村上の先帝の御乳母に忍びて物述給びけるに、調和無き事たりとて更に逢はず侍りければ　　一條ノ攝政［伊尹］

隱れ沼の底の心ぞ恨めしき如何にせよとてつれなかるらん

題知らず　　讀人知らず

我ながら然ももどかしき心かな思はぬ人は何か戀しき

舊く物云ひ侍りける人に　　元輔

草隱れ凋れにし水は濁くとも結びし袖は今も乾かず

題知らず　　讀人知らず

我が思ふ人は草葉の露なれや掛くれば袖の先づ萎るらん

袂より落つる涙は陸奧の衣川とぞ云ふべかりける

衣をや脱ぎて遣らまし涙のみ掛［斯］かりけりとも人の見るべく

忍びて物云ひ侍りける人の、人繁き所に侍りければ　　賀茂朝臣

人目をも愼まぬものと思ひせば袖の涙の斯［掛］からましやは

題知らず　　大伴ノ方見

石の上降る「布留」とも雨に障らめや逢はんと妹に云ひてしものを

元良親王

侘びぬれば今はた同じ難波なる身を盡し「澪標」ても逢はんとぞ思ふ

五月五日、或女の許に遣はしける　　讀人知らず

何時か「五日」とも思はぬ澤の菖蒲草唯だつくづくと音「根」こそ泣かるれ

題知らず　　躬恒

生ふれども駒もすさめぬ菖蒲草假「刈」りにも人の來ぬが侘びしき

蚊遣火を見侍りて　　能宣

蚊遣火は物思ふ人の心かも夏の夜すがら下に燃ゆらん

題知らず　　勝觀法師

忍ぶれば苦しかりけり篠薄秋の盛りに成りや爲なまし

讀人知らず

思ひきや我が待つ人は外ながら棚機つ女の逢ふを見んとは

今日さへや外に見るべき彦星の立ち平すらん天の河浪

侘びぬれば常はゆゆしき織女も羨まれぬるものにぞ有りける

露だにも無からましかば秋の夜を誰と起〔置〕き居て人を待たまし

今さらに問ふべき人も思ほえず八重葎して門鎖せりてへ〔二字、と云へノ約語〕

秋は我が心の露に有らねども物歎かしき頃にも有るかな

拾遺和歌集　巻第十三

戀三

題知らず　　讀人知らず

あしびきの山下風も寒けきに今宵も又や我が獨り寢ん

人麿

あしびきの山鳥の尾の下垂り尾の長長し夜を獨りかも寢ん

讀人知らず

あしびきの葛城山にゐる雲の立ちても居ても君をこそ思へ

あしびきの山の山菅止まずのみ見れば悲しき君にも有るかな

「旅の思ひを述ぶ」と云ふ事を　石上ノ乙麿

あしびきの山越え暮れて宿假らば妹立ち待ちて寝ねざらんかも

題知らず　人麻呂

あしびきの山より出づる月待つと人には云ひて君をこそ待て

三日月のさやかに見えず雲隠れ見まくぞ欲しき變たて此頃

讀人知らず

逢ふ事は片〔難〕割れ月の雲隠れ朧ろげにやは人の戀しき

人麻呂

秋の夜の月かも君は雲隠れ暫しも見ねば許多戀しき

圓融院ノ御時ノ御屏風、八月十五夜、月の影、池に映れる家に、男、女居て、掛想したる所　平ノ兼盛

秋の夜の月見るとのみ起き居つつ今宵も寝でや我は歸らん

月の明かりける夜、女の許に遣はしける　源ノ實明

戀しさは同じ心に有らずとも今宵の月を君見ざらめや

返し　中務

さやかにも見るべき月を我は唯だ涙に曇る折ぞ多かる

題知らず　人麻呂

ひさかたの天照る月も隱れ行く何に比へて君を偲ばん

京に思ふ人を置きて、遙かなる所にまかりける路に、月の明かりける夜　讀人知らず

都にて見しに變らぬ月影を慰めにても明す頃かな

題知らず　貫之

照る月も影水底に映りけり似たるもの無き戀もするかな

月を見て、田舍なる男を思ひ出でて遣はしける　中宮ノ内侍〔馬ノ内侍〕

今宵君如何なる里の月を見て都に我〔イ誰〕を思ひ出づらん

題知らず　忠岑

月影を我身に代ふるものならば思はぬ人も哀れとや見ん

萬葉集和せる歌　順

獨り寢る宿には月の見えざらば戀しき事の數は增さらじ

題知らず　人麻呂

長月の有明の月の在りつつも君し來まさば我れ戀ひめやも

月の明き夜、人を待ち侍りて

事成らば闇にぞ有らまし秋の夜の何ぞ月影の人頼めなる

題知らず　　春宮ノ左近

降らぬ夜の心を知らで大空の雨をつらしと思ひけるかな

讀人知らず

衣だに中に有りしは疎かりき逢はぬ夜をさへ隔てつるかな

長き夜も人をつらしと思ふには寢なくに明くるものにぞ有りける

「今は問はじ」と云ひ侍りける女の許に遣はしける

忘れなん今は問はじと思ひつつ寢る夜しもこそ夢に見えけれ

題知らず

夜とても寢られざりけり人知れず寢覺の戀に驚かれつつ

ぬばたまの妹が黑髮今宵もや我が無き床に靡き出でぬらん

我が夫子が在處も知らで寢たる夜は曉がたの枕寂しも

如何なりし時呉竹の一夜「節」だに徒ら臥しを苦しと云ふらん

如何ならん折節にかは呉竹の夜は戀しき人に逢ひ見ん

正してふ八十の衢に夕封問ふ占正にせよ妹に逢ふべく　　人麻呂
夕封問ふ占にも吉く有り今宵だに来ざらん君を何時か待つべき
夢をだに如何で形見に見てしがな逢はで寝る夜の慰めにせん
現には逢ふこと難し玉の緒の夜「緒一は絶えせず夢に見えなん
廣幡の御息所、久しう内裏にも参らざりける、夢になん例のやうにて内裏に侍ひ給ひつると、人の云ひ
侍りけるを聞きて「廣幡ノ御息所」　　讀人知らず
往時を如何でかとのみ思ふ身に今宵の夢を春に為さばや
延喜十五年、御屏風ノ歌
忘らるる時し無ければ春の田を返す返すぞ人は戀しき　　貫之
題知らず
梓弓春の荒田を打返し思ひ止みにし人ぞ戀しき　　讀人知らず
彼の岡に萩刈る男繩を無み錬るや錬り紵の碎けてぞ思ふ　　躬恒

春來［縲］れば柳の糸も解けにけり結ぼほれたる我が心かな

何方に寄［縒］るとかは見ん青柳のいと［糸］定め無き人の心を

まきむくの檜原の霞立ち返り斯くこそは見め飽かぬ君かな

冬より比叡の山に上りて春まで音せぬ人の許に　　藤原清正が女

眺め遣る山邊はいとど霞みつつおぼつかなさの增さる春かな

題知らず　　人麻呂

我が夫子を來增の山と人は云へど君も來まさぬ山の名ならし　　山邊赤人

我が夫子を那良志［習］の岡の呼子鳥君呼び返せ夜の更けぬ時

讀人知らず

來ぬ人を眞土［待］の山のほととぎす同じ心に音こそ泣［鳴］かるれ

曉に鳴きこそ渡れほととぎす物思ふ宿は著くや有るらん

叩くとて山の妻戸を明けたれば人も木末［來ず］の水鷄なりけり

夏ごろも薄きながらぞ賴まるる一重なるしも身に近ければ

刈りて干す淀の眞菰の雨降れば束ねも敢へぬ戀もするかな

水無月の土さへ裂けて照る日にも我が袖干めや妹に逢はずして

鳴る神の暫し動きて空曇り雨も降らなん君留まるべく　　人麿

人言は夏野の草の繁くとも君と我とし携はりなば

野も山も茂り合ひぬる夏なれど人のつらさは言の葉も無し　　讀人知らず

夏草の茂みに生ふるまろ小菅麻呂が因寝よ幾世經ぬらん

天暦ノ御時、廣幡の御息所久しく參らざりければ、御文遣はしける　　御製「村上天皇」

山賤の垣穂に生ふ［三字］ (咲け) る撫子に思ひ比へぬ時の間ぞ無き

廣義公ノ家の障子の繪に、瞿麥生ひたる家の心細げなるを　　清原元輔

思ひ知る人に見せばや夜もすがら我が床夏に置き居たる露

題知らず　　讀人知らず

秋の野の草葉も分けぬ我が袖の露けくのみも成り増さるかな

三百六十首歌の中に　　曾禰ノ好忠

我が夫子が來まさぬ宵の秋風は來ぬ人よりも恨めしきかな

題知らず　　讀人知らず

うらやまし朝日に當る白露を我身と今は爲す由もがな

人麻呂

秋の田の穗の上に置ける白露の消ぬべく我は思ほゆるかな

住吉の岸を田に掘り蒔きし稻の刈る程までも逢はぬ君かな

赤人

戀しくは形見にせんと我宿に植ゑし秋萩今盛りなり

中將の御息所の許に、萩に付けて遣はしける　　廣平ノ親王

秋萩の下葉を見ずば忘らるる人の心を如何で知らまし

讀人知らず

占繩結はぬ野邊の秋萩風吹けばと臥し斯く臥し物をこそ思へ

中宮ノ内侍〔馬ノ内侍〕

移ろふは下葉ばかりと見し程にやがても秋に成りにけるかな

女の許に遣はしける　　能宣

言の葉も霜には敢へず枯れにけり此や秋「飽」果つるしるしなるらん

貫之

色も無き心を人に染めしより變ろはんとは我が思はなくに

讀人知らず

數ならぬ身を宇治川の網代木に多くの日を〔氷魚〕も過ごしつるかな

下紅葉するをば知らで松の木の上の綠を賴みけるかな

人麿

我が夫子を我が戀ひ居れば我宿の草さへ思ひ末枯れにけり

貞文が家の歌合に　讀人知らず

霜の上に降る初雪の朝氷解けずも物を思ふ頃かな

絶えて年頃に成りにける女の許にまかりて、雪の降り侍りければ　源景明

み吉野の雪に籠れる山人も古道覓めて音をや泣くらん

題知らず　人麿

・頼めつつ來ぬ夜數多に成りぬれば待たじと思ふぞ待つに勝れる

拾遺和歌集　巻第十四

戀四

題知らず　　人麻呂

朝寝髪我れは梳らじ美くしき人の手枕觸れてしものを

元輔が聟に成りて、翌朝に　　藤原ノ實方朝臣

時の間も心は空に成るものを如何で過ぐしし昔なるらん

題知らず　　讀人知らず

白浪の打頻りつつ今宵さへ如何でか獨り寝るとかや君

一條ノ攝政、「内裏にては便無し、里に出でよ」と云ひ侍りければ、人も無き所にて待ち侍りけるに、參うで來ざりければ　　小貳ノ命婦

如何にして今日を暮さん小餘綾の急「磯」ぎ出でても甲斐「貝」無かりけり

題知らず　　人麻呂

湊入りの蘆分小舟障り多み我が思ふ人に逢はぬ頃かな

岩代の野中に立てる結び松心も解けず昔思へば

讀人知らず

我宿は播磨潟にも有らなくに明し〔明石〕も果てで人の行くらん

浪間より見ゆる小島の濱楸久しく成りぬ君に逢はずて

人麻呂

ます鏡手に取り持ちて朝な朝な見れども君に飽く時ぞ無き

皆人の笠に縫ふてふ有間菅有りての後も逢はんとぞ思ふ

讀人知らず

伊香保のや伊香保の沼の如何にして戀しき人を今ひと目見ん

玉川に曬す手造りさらさらに昔の人の戀しきや何ぞ

身は早く奈良の都に成りにしを戀しき事の古りせざるらん

藤原ノ忠房朝臣

石の上古りにし戀の神さびて祟るに我は祈ぎぞかねつる

讀人知らず

如何ばかり苦しきものぞ葛城の久米路の橋の中の絶間は

限り無く思ふ〔（イ）ひ〕長柄の橋柱思ひながらに中や絶えなん　源ノ頼光

女の許に遣はしける

なかなかに云ひも放たで信濃なる木曾路の橋の掛けたるや何ぞ　讀人知らず

題知らず

杉立てる宿をぞ人は尋ねける心の待つ〔松〕は甲斐無かりけり

石の上布留の社の木綿襷掛けてのみやは戀ひんと思ひし

我や憂き人やつらきとちはやぶる神てふ神に問ひ見てしがな

住吉の現人神に誓ひても忘るる君が心とぞ聞く

忘らるる身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくも有るかな　右近

女を恨みて、更に參うで來じと誓ひて後に遣はしける　實方朝臣

何せんに命を掛けて誓ひけん生〔行〕かばやと思ふ折も有りけり　讀人知らず

題知らず

塵泥の數にも有らぬ我れ故に思ひ佗ぶらん妹が愛しさ　人麻呂

戀ひ戀ひて後も逢はんと慰むる心し無くば命あらめや

斯くばかり戀しきものと知らませば外に見るべく有りけるものを　　讀人知らず

淚川のどかにだにも流れなん戀しき人の影や見ゆると　　貫之

淚川落つる水上早ければ塞きぞかねつる袖のしがらみ

萬葉集和し侍りける歌　　源順

淚川底の藻屑と成り果てて戀しき瀬瀬に流れこそすれ

女の許に遣はしける　　藤原惟成

人知れず落つる淚の積りつつ數書くばかり成りにけるかな

天暦御時、承香殿の前を渡らせ給ひて、他御方に渡らせ給ひければ　　齋宮女御

且つ見つつかけ離れ行く水の面に書く數ならぬ身を如何にせん

題知らず　　讀人知らず

さ雄鹿の爪だに濡ぢぬ山川のあさ〔淺〕ましきまで問はぬ君かな

あさましや木の下蔭の岩清水幾十の人の影を見つらん

行く水の泡ならばこそ消え返り人の淵瀨を流れても見め

津の國の堀江の深く思ふとも我は難波の何とだに見ず

津の國の生田の川の幾度かつらき心を我に見すらん

津の國の難波邊りに作るなる小屋「來や」と云はたん行きて見るべく

旅人の茅刈り覆ひ作るてふ麻呂や「圓屋」は人を思ひ忘るる

人麿

難波人葦火焚く屋は煤垂れど己が妻こそ常珍らなれ

讀人知らず

住吉の岸に生ひたる忘れ草見ずや有らまし戀ひは死ぬとも

八百日行く濱の眞砂と我が戀と何れ增されり沖つ島守

屏風に、み熊野の繪書きたる所　兼盛

さしながら人の心をみ〔見〕熊野の浦の濱木綿幾重なるらん

富士の山の形を作らせ給ひて、藤壺の御方へ遣はすとて　天暦ノ御製〔村上天皇〕

世の人の及ばぬものは富士の嶺の雲居に高き思ひなりけり

題知らず　讀人知らず

我戀の顯露に見ゆるものならば都の富士と云はれなましを
鷹根伺ふ水城は上こそつれなけれ下はえならず思ふ心を
蓴菜〔繩〕の苦〔繰〕しかるらん人よりも我ぞ益〔増〕田の生け〔池〕る甲斐無き

人麻呂

たらちねの親の飼ふ蠶の繭籠り悒せくも有るか妹に逢はずて

讀人知らず

いさやまた戀てふ事も知らなくに此や其なるらん寢こそ寢られね
たらちねの親の諫めしうたた寢は物思ふ時のわざにぞ有りける

年を經て會明の朝臣參うで來たりければ、簾越しに居ゑて物語し侍りけるに、如何が有りけん

中務

內外無く慣れも爲たまし玉簾の離れ〔垂〕年月を隔て初めけん

題知らず

貫之

憂かりける節をば捨てて白糸の今來る〔繰〕人と思ひ爲さなん

讀人知らず

思ふとていとこそ人に慣れざらめ然か慣らひてぞ見れば戀しき

手枕の隙間の風も寒かりき身は習はしの物にぞ有りける

吹く風に雲の旗手は留むとも如何が頼まん人の心は

若草に留めも敢へぬ駒よりも馴附け侘びぬる人の心か

逢ふ事の片〔難〕飼したる陸奥の來ま〔駒〕ほしくのみ思ほゆるかな

陸奥の安達の原の白檀心強くも見ゆる君かな

伊勢

年月の行くらん方も思ほえず秋の微かに人の見ゆれば

思ひきや逢ひ見ぬ程の年月を數ふばかりに成らんものとは

遥かなる程にも通ふ心かな然りとて人の知らぬものゆゑ

遠き所に思ふ人を置き侍りて　源ノ經基

雲居なる人を遥かに思ふには我が心さへ空にこそ成れ

道をまかりて詠み侍りける　人麻呂

餘所に有りて雲居に見ゆる妹が家に早く到らん歩め黒駒

題知らず　讀人知らず

我が歸る路の黒駒心あらば君は來ずとも己れ嘶け

入道攝政「兼家」まかりたりけるに、門を遲く開けければ、「立ち煩ひぬ」と云ひ入れて侍りければ

右大將道綱ノ母

歎きつつ獨り寢る夜の明くる間は如何に久しきものとかは知る

題知らず　　讀人知らず

歎き「木」戀「樵」る人入る山の斧の柄のほとほとしくも成りにけるかな

修行せんとて山に籠り侍りけるに、里の人に遣はしける

人にだに知らせで入りし奧山に戀しさ如何で尋ね來つらん

題知らず　　讀人知らず

くにもちが女を、ともみつまかり去りて後、鏡を返し遣はすとて、書き付けて遣はしける

影斷えて覺束なさのます「増」鏡見ずば我が身の憂さも知られじ

題知らず

思ひ増す人し無ければ眞澄鏡うつれる影と音をのみぞ泣く

我が袖の濡るるを人の咎めずば音をだに易く泣くべきものを

元良の親王、小馬の命婦に物云ひ侍りける時、女の云ひ遣はしける

數ならぬ身は唯だにだに思ほえで如何にせよとか眺めらるらん

題知らず　　讀人知らず

夢にさへ人のつれなく見えつれば寝ても覚めても物をこそ思へ

見る夢の現に成るは世の常ぞ現の夢に成るぞ悲しき

逢ふ事は夢の中にも嬉しくて寝覚の戀ぞ佗びしかりける

忘れじよゆめ〔夢〕と契りし言の葉は現につらき心なりけり

可惜〔新〕しと何に命を思ひけん忘れば舊く成りぬべき身を

ちはやぶる神の忌垣も越えぬべし今は我身の惜しけくも無し　柿ノ本ノ人麻呂

拾遺和歌集　巻第十五

戀五

善祐法師流されて侍りける時、母の云ひ遣はしける

泣く涙世は皆海と成りたなん同じ渚に流れ寄るべく

題知らず　人麻呂

住吉の岸に向へる淡路島哀れと君を云はぬ日ぞ無き

讀人知らず

捨て果てん命を今は頼まれよ逢ふべき事の此世ならねば

生き死なん事の心に協ひせば二たび物は思はざらまし

燃え果てて灰と成りなん時にこそ人を思ひ「火」の止まん期に爲め

何方に行き隠れなん世の中に身の在ればこそ人もつらけれ

在り經んと思ひも掛けぬ世の中はなかなか身をぞ歎かざりける

僞りと思ふものから今さらに誰が誠をか我は頼まん

世の中の憂きもつらきも忍ぶれば思ひ知らずと人や見るらん

一向に死なば何かは然も有らば有れ生きて甲斐無き物思ふ身は

人麻呂

戀するに死するものに有らませば千度ぞ我は死に更へらまし

貫之

戀ひて死ね戀ひて死ねとや吾妹子が我家の門を過ぎて行くらん

戀ひ死なば戀ひも死ねとや玉鉾の路行く人に言傳も無き

戀しきを慰めかねて菅原や伏見に來ても寢られざりけり

讀人知らず

戀しきは色に出でても見えなくに如何なる時か胸に沁むらん

忍ばんに忍ばれぬべき戀ならばつらきに付けて止みもしなまし

女に遣はしける　　大中臣ノ能宣

如何で如何で戀ふる心を慰めて後の世までの物を思はじ

題知らず　　讀人知らず

限り無く思ふ心の深ければつらきも知らぬものにぞ有りける

理無しや強ひても頼む心かなつらしと且つは思ふものから

憂しと思ふものから人の戀しきは何處を忍ぶ心なるらん

身の憂きを人のつらきと思ふこそ我とも云はじ理無かりけれ

つらきをも思ひ知るやは我が爲めにつらき人しも我を怨むる

心をばつらきものぞと云ひ置きて變らじと思ふ顏ぞ戀しき

あさましや見しかとだにも思はぬに變らぬ顏ぞ心ならまし

物云ひ侍りける女の、後につれなく侍りて、さらに逢はず侍りければ　　一條ノ攝政〔伊尹〕

哀れとも云ふべき人は思ほえで身の徒らに成りぬべきかな

題知らず　伊勢

然もこそは逢ひ見ん事の難からめ忘れずとだに云ふ人の無き

藤原ノ有時

逢ふ事の歎き「木」の本を尋ぬれば獨り寢よりぞ生ひ初めける

人麿

荒ち男の狩る矢の先に立つ鹿もいと我ばかり物は思はじ

荒磯の外行く浪の外心我は思はじ戀ひは死ぬとも

かき曇り雨降る川のさざら浪間無くも人の戀ひらるるかな

我が如や雲の中にも思ふらん雨も涙も降りにこそ降れ

貫之

降る雨に出でても濡れぬ我袖の蔭に居ながら濡ぢ増さるかな

讀人知らず

是れをだに書きぞ煩ふ雨と降る涙を拭ふ暇無ければ

君戀ふる我も久しく成りぬれば袖に涙も降「舊」りぬべらなり

吾戀ふる涙の掛かる袖の浦は巖なりとも朽ちぞしぬべき

まだ知らぬ思ひに燃ゆる我身かな然るは涙の川の中まで

源ノ景明

女の許にまかりけるを、本の妻の制し侍りければ

風を甚み思はぬ方に泊りする漁人の小舟も斯くや侘ぶらん

讀人知らず

題知らず

瀬を早み斷えず流るる水よりも盡きせぬものは涙なりけり

我が如く物思ふ人は往時も今行末も有らじとぞ思ふ

坂上ノ郎女

黒髪に白髪まじり生ふるまで斯かる戀には未だ逢はざるに

潮滿てば入りぬる磯の草なれや見らく少なく戀ふらくの多き

志賀の漁人の釣に點せる漁火のほのかに人を見る由もがな

藤原ノ有時

岩根踏み重なる山は無けれども逢はぬ日數を戀ひやわたらん

歎き〔木〕こ〔樵〕る山路は人も知らなくに我心のみ常に行くらん

圓融院ノ御時、少將ノ更衣の許に遣はしける

〔圓融天皇〕

限り無き思ひ「火」の空に滿ちぬれば幾十の煙雲と成るらん　「少將更衣」

御返し

空に滿つ思ひ「火」の煙雲と成らば眺むる人の目にぞ見えまし

題知らず　讀人知らず

思はずはつれなき事もつらからじ頼めば人を怨みつるかな

つらけれど恨むる限り有りければ物は云はれで音こそ泣かるれ

紅の八入の衣斯くし有らば思ひ初「染」めずぞ有るべかりける

天暦ノ御時、承香殿ノ女御の方なりける女に、元良の親王まかり通ひ侍りける、絶えて後、云ひ遣はしける　承香殿ノ中納言

ほのかにも我を三「見」島の芥火の飽くとや人の音づれもせぬ

題知らず　讀人知らず

人を疾く芥「飽」川てふ津の國の名には「難波」違はぬものにぞ有りける

限り無く思ひ初め「染」てしくれなゐの人を飽く「灰汁」にぞ返らざりける

荒磯海の浦と頼めし名殘無み「浪」打寄せてける忘れ貝かな

つらけれど人には云はず岩見潟恨みぞ深き心一つに

恨みぬも疑はしくぞ思ほゆる頼む心の無きかと思へば

近江なる打出の濱の打出でつつ恨みや爲まし人の心を

わたつ海の深き心は有りながら恨「浦」みられぬるものにぞ有りける

數ならぬ身は心だに無からなん思ひ知らずは怨みざるべく

恨みての後さへ人のつらからば如何に云ひてか音をも泣かまし

小野ノ宮ノ大政大臣「實頼」に遣はしける　　閑院ノ大君

君を猶怨みつるかな漁人の刈る藻に栖む虫の名を忘れつつ

題知らず　　讀人知らず

漁人の刈る藻に栖む虫の名は聞けど唯だ我からのつらきなりけり

戀ひ侘びぬ悲しき事も慰めん何れ長洲「流」の濱邊なるらん

斯くばかり憂しと思ふに戀しきは我さへ心二つ有りけり

人麻呂

とにかくに物は思はず飛驒工打つ墨繩の唯だ一筋に

左大臣ノ女御「實頼ノ女」亡せ侍りにければ、父大臣の許に遣はしける　　天暦ノ御製「村上天皇」

いにしへを更に掛けじと思へども奇しく目にも滿つ涙かな

女の許に遣はしける　　平ノ忠依

逢ふ事は心にも有らで程經とも然やは契りし忘れ果てねと

題知らず　　讀人知らず

忘るるかいざ然は我も忘れなん人に從ふ心とならば

忘れぬる君はたかなかつらからで今まで生ける身をぞ恨むる

我ばかり我を思はん人もがな然てもや憂きと世を試みん

奇しくも厭ふに榮ゆる心かな如何にしてかは思ひ絶ゆべき

思ふ事なすこそ神の難からめ暫し忘るる心附けなん

遠き所に侍りける人、京に侍りける男を、路のままに戀ひまかりて、高砂と云ふ所にて詠み侍りける

高砂に我が泣く聲は成りにけり都の人は聞きや付くらん

題知らず

龍島なる筑間の神のつくづくと我身一つに戀を積みつる

拾遺和歌集　巻第十六

雜　春

題知らず　　凡河内ノ躬恒

春立つと思ふ心は嬉しくて今一年の老ぞ添ひける

讀人知らず

新しき年は來れども徒らに我身のみこそ舊り増さりけれ

新しき年には有れども鶯の鳴く音さへには變らざりけり

北宮ノ屏風に　　右近

年月の行方も知らぬ山賤は瀧の音にや春を知るらん

延喜十五年、齋院ノ屏風ノ歌　　紀ノ貫之

春來れば瀧の白糸如何なれや結べども猶泡に見ゆらん

正月に人人參りで來たりけるに、又の日の朝に、右衛門ノ督公任朝臣の許に遣はしける　　中務卿具平親王

飽かざりし君が匂ひの戀しさに梅の花をぞ今朝は折りつる

流され侍りける時、家の梅の花を見侍りて　贈太政大臣〔菅原道眞〕

東風吹かば匂ひおこせよ梅の花主人無しとて春を忘るな

桃園の齋院の屏風に　讀人知らず

梅の花春より前に咲きしかど見る人稀れに雪の降りつつ

題知らず　中納言安倍廣庭

往にし年根掘じて植ゑし我宿の若木の梅は花咲きにけり

天暦の御時、大盤所の前に鶯の巣を紅梅の枝に付けて立てられたりけるを見て　一條攝政〔伊尹〕

花の色は飽かず見るとも鶯の塒の枝に手なな觸れそも

同じ御時、梅の花の許に御椅子立てさせ給ひて、花の宴せさせ給ふに、殿上の男ども歌仕うまつりけるに　源寛信朝臣

折りて見る甲斐も有るかな梅の花今日九重に匂ひ増さりて

内裏の御遊侍りける時　參議伊衡

挿しては白髪に紛ふ梅の花今は何れを抽かんとすらん

清和の七の親王〔貞辰親王〕六十の賀の屏風に　貫之

數ふれどおぼつかなきを我宿の梅こそ春の數を知るらめ

題知らず　讀人知らず

年毎に咲きは變れど梅の花哀れなる香は失せずぞ有りける

圓融院ノ御時、三尺ノ御屏風十二帖ノ歌の中に　源ノ順

梅が枝を假り［狩］に來て折る人や有ると野邊の霞は立ち隱すかも

北白川の山庄に、花の面白く咲きて侍りけるを見に、人人參うで來たりければ　右衛門ノ督公任

春來てぞ人も訪ひける山里は花こそ宿の主人なりけれ

鞍馬に詣で侍りける折に、路を踏み違へて詠み侍りける　安法法師

おぼつかな鞍馬の山の路知らで霞の中に惑ふ今日かな

延喜十五年、齋院ノ屏風に、霞を分けて山寺に入る人あり　紀ノ貫之

思ふこと有りてこそ行け春霞路妨げに立ちな隱しそ

小一條の大政大臣［師尹］の家の障子に　能宣

田子の浦に霞の深く見ゆるかな藻潮の烟立ちや添ふらん

山里に忍びて女を率て參うで來て、或る男の詠み侍りける　讀人知らず

思ふこと云はで止みなん春霞山路も近し立ちもこそ聞け

人に物云ふと聞きて訪はざりける男の許に　中宮ノ内侍［馬ノ内侍］

春日野の荻の焼原探求るとも見えぬ無き名［菜］をおほすなるかな

女の裳着に薺の花に付けて遣はしける　　藤原ノ長能

雪を薄み垣根に摘める唐薺なづさはまくの欲しき君かな

東三條院「詮子」ノ御四十九日の中に、子日出で来たりけるに、宮の君と云ひける人の許に遣はしける　　右衛門ノ督公任

誰れに由り松をも引かん鶯の初音甲斐無き今日にも有るかな

子日　　恵慶法師

引きて見る子の日の松は程無きを如何で籠れる千世にか有るらん

題知らず　　讀人知らず

占めてこそ千年の春は来つつ見め松を手觸く何か引くべき

齋院ノ子日　　順

一もとの松の千年も久しきに齋の宮ぞ思ひ遣らるる

右大将済時、下臈に侍りける時、子日しけるに　　清原ノ元輔

老の世に斯かる御幸は有りきやと木高き峰の松に問はばや

正月叙位の頃、或所に人人まかり會ひて、子日の歌詠まんと云ひて侍りけるに、六位に侍りける時

大中臣ノ能宣

松ならば引く人今日は有りなまし袖の緑ぞ甲斐無かりける

除目の頃、子日に當りて侍りけるに、按察ノ更衣の局より、松を箸にて食べ物を出だして侍りけるに

元輔

引く人も無くて止みぬる吉野の松〔待〕は子の日を外にこそ聞け

康和二年、春宮ノ藏人に成りて、月の中に民部ノ丞に遷りて、二度喜びを述べて、右近ノ命婦が許に遣はしける

順

引く人も無しと思ひし梓弓今ぞ嬉しき諸矢しつれば

題知らず

讀人知らず

咲きし時猶こそ見しか桃の花散れば惜しくも思ひなりぬる

帥の親王、人人に歌詠ませ侍りけるに

弓削ノ嘉言

山里の家居は霞籠めたれど垣根の柳末は外に見ゆ

春、物へまかりけるに、壺裝束して侍りける女どもの、野邊に侍りけるを見て、「何わざするぞ」と問ひければ、「野老掘るなり」と答へければ

賀朝法師

春の野に所〔野老〕求むと云ふなるは二人寢ばかり見出でたりや君

返し

春の野に掘る掘る見れど無かりけり世に所「野老」狭き人の爲めには　　讀人知らず

題知らず

かき曇し雪も降らなん櫻花まだ咲かぬ間は比へても見ん　　讀人知らず

春風は花の無き間に吹き果てね咲きなば思ひ無くて見るべく　　躬恒

咲かざらん物とは無しに櫻花面影にのみ眞早見ゆらん　　讀人知らず

何處にか此頃花の咲かざらん心からこそ訪わられけれ

花見ノ御時、月次ノ御屏風の歌　　躬恒

櫻花我が宿にのみ有りと見ば無き物くさは思はざらまし

櫻の花の咲きて侍りける所に、諸共に侍りける人の、後の春、外に侍りけるに、其花を折りて遣はしける　　讀人知らず

諸共に折「居」りし春のみ戀しくて獨り見まうき花盛りかな

御厨子所に侍ひけるに、藏人所の男ども、櫻の花を遣はしたりければ　　壬生ノ忠見

諸共に我し折らねば櫻花思ひ遣りてや春を暮さん

或人の許に遣はしける　　御導師淨藏

霞立つ山の彼方の櫻花思ひ遣りてや春を暮さん

題知らず　　貫之

遠方の花も見るべく白浪の共にや我も立ちわたらまし

春、花山に亭子ノ法皇［宇多天皇］おはしまして還らせ給ひければ　　僧正遍昭

待てと云はばいとも畏し花山に暫しと鳴かん鳥の音もがな

京極ノ御息所［藤原褒子、宇多天皇御息所］春日に詣で侍りける時、國司の奉りける歌あまた有りける中に　　藤原ノ忠房朝臣

鶯の鳴きつる並べに春日野の今日の深雪［御幸］を花とこそ見れ

故郷に咲くと佗びつる櫻花今年ぞ君に見えぬべらなる

春霞春日の野邊に立ちわたり滿ちても見ゆる都人かな

圓融院ノ御時、三尺ノ御屏風に花の木の下に人人集まりゐたる所　　兼盛

世の中に嬉しきものは思ふどち花見て過ぐす心なりけり

清愼公ノ家にて、池の邊の櫻の花を詠み侍りける　　元輔

櫻花底なる影ぞ惜まるる沈める人の春と思へば

上總より上りて侍りける頃、源ノ賴光が家にて、人人酒食うべける次でに　藤原ノ長能

東路の野路の雪間を分けて來てあはれ都の花を見るかな

清愼公の家の侍に燈火の下に櫻の花を折りて挿して侍りけるを詠み侍りける　兼盛ノ弟

灯の下「日の本」に咲ける櫻の色見れば人の國にも有らじとぞ思ふ

山櫻を見侍りて　平ノ公誠

み山木の二葉三葉に萌ゆるまで消えせぬ雪と見えもするかな

金鼓打ち侍りける時に、畑燒き侍りけるを見て詠み侍りける　藤原ノ長能

片山に畑燒く男かの見ゆるみ山櫻は避きて畑燒け

石山の塔の前に侍りける櫻の木に書き附け侍りける　讀人知らず

閑心た如何で歸らん山櫻飽かぬ匂ひを風に任せて

敦慶ノ式部卿の親王の女、伊勢が腹に侍りけるが、近き所に侍りけるに、瓶に挿したる花を贈るとて　貫之

久しかれ徒に散るなと櫻花瓶「龜」に挿せれど移ひにけり

延喜ノ御時、南殿に散り積みて侍りける花を見て　源ノ公忠朝臣

殿守の伴の御奴心あらば此春ばかり朝清めすな

題知らず　讀人知らず

櫻花三笠の山の蔭し有れば雪と降れども濡れじとぞ思ふ

年毎に春の眺め「長雨」はせしかども身さへ舊「降」るとも思はざりしを

順

年毎に春は來「繰」れども池水に生ふる蓴菜「繰」は斷えずぞ有りける

三月閏月ありける年、八重山吹を詠み侍りける　菅原輔昭

春風は長閑けかるべし八重よりも重ねて匂へ山吹の花

屏風の繪の花の下に網引く所

浦人は霞を網に結べばや浪の花をも覓めて引くらん

延喜ノ御時ノ御屏風に　貫之

簗見れば河風甚く吹く時ぞ浪の花さへ落ち増さりける

亭子院、京極の御息所に渡らせ給うて、弓御覽じて、賭物出ださせ給ひけるに、髭籠に花を拔き入れて、櫻を鳥座にして、山菅を鶯に結び居ゑて、斯く書きて咋はせたりける　一條の君

木の間より散り來る花は梓弓えや「矢」は留めぬ春「張」の形見に

比叡の山に住み侍りける頃、人の薫香(たきもの)を乞ひて侍りければ、侍りけるままに、少しを梅の花の僅かに散り殘りて侍る枝に付けて遣はしける　　如覺法師

春過ぎて散り果てにける梅の花唯だ斯(か)〔香〕ばかりぞ枝に殘れる

右衞門ノ督公任籠り侍りける頃、四月一日(ついたち)に云ひ遣はしける　　左大臣〔道長〕

谷の戸を閉ぢや果てつる鶯の待つに音せで春も過ぎぬる

返し　　公任朝臣

行き還る春をも知らず花咲かぬみ山隱れの鶯の聲

四月朔日(ついたち)詠み侍りける　　元輔

春は惜し杜鵑(ほととぎす)は聞かまほし思ひ煩ふ靜心(しづごころ)かな

延長四年九月廿八日、法皇〔宇多天皇〕御六十ノ賀、京極の御息所の仕うまつりける屛風の歌、藤の花　　貫之

松風の吹かん限りは打はへて絶ゆべくも有らず咲ける藤波(ふぢなみ)

延喜ノ御時、藤壺の藤ノ花の宴せさせ給ひけるに、殿上の男(をのこ)ども歌仕うまつりけるに　　皇太后宮ノ權大夫國章

藤の花宮の内には紫の雲かとのみぞ過(あやま)たれける

左大臣［道長］の女［彰子］の中宮の料に調じ侍りける屛風に　右衛門ノ督公任

紫の雲とぞ見ゆる藤の花如何なる宿のしるしなるらん

讀人知らず

紫の色し濃ければ藤の花松の緑も變ひにけり

題知らず　人麿

ほととぎす通ふ垣根の卯の花の憂き事あれや君が來まさぬ

屛風の繪に　重之

卯の花の咲ける垣根に宿りせじ寢ぬに明けぬと驚かれけり

陸奥の國にまかり下りて後、杜鵑の聲を聞きて　實方朝臣

年を經てみ山隱れのほととぎす聞く人もなき音をのみぞ鳴く

女の許に白き糸を菖蒲の根にして、藥玉をおこせ侍りて、哀れなる事どもを或る男の云ひおこせて侍りければ　讀人知らず

聲立てて鳴くと云ふともほととぎす袂は濡れじ空音［根］なりけり

廉義公ノ家ノ障子に　元輔

斯くばかり待つと知らばやほととぎす木末高くも鳴きわたるかな

題知らず

あしびきの山ほととぎす里慣れて黄昏時に名告すらしも　　大中臣ノ輔親

坂ノ上ノ郎女に遣はしける　　大伴ノ像見

故里の奈良思の岡にほととぎす言傳て遣りき如何に告げきや

螢を詠み侍りける　　健守法師

夜もすがら燃ゆる螢を今朝見れば草の葉毎に露ぞ置きける

延長七年十月十四日、元良の親王の四十ノ賀し侍りける時の屏風に　　貫之

常夏の花をし見れば打はへて過ぐる月日の數も知られず

一條ノ攝政ノ北ノ方、外に侍りける頃、女御と申しける時　　贈皇后宮〔藤原ノ懷子〕

暫しだに蔭に隠れぬ時は猶うなだれぬべき撫子の花

題知らず　　躬恒

徒らに老いぬべらなり大荒木の森の下なる草葉ならねど

拾遺和歌集　巻第十七

雜　秋

屏風に、七月七日　源ノ順

織女は空に知るらん蜘蛛のいと「糸」斯「掛」くばかり祭る「待」る心を

閑院ノ御屏風に、七夕祭したる所に、籬の下に男立てり　平ノ兼盛

織女の飽かぬ別れもゆゆしきを今日しも何どか君が來ませる

七夕ノ後朝に、躬恒が許に遣はしける　貫之

朝戸開けて眺めやすらん織女の飽かぬ別れの空を戀ひつつ

題知らず　人麻呂

渡し守早や舟寄せよ一年に二たび來ます君ならなくに

七夕祭書ける御扇に書かせ給ひける　天暦ノ御製「村上天皇」

織女の羨ましきに天の川今宵ばかりは下りや立たまし

題知らず　讀人知らず

世を倦「績」みて我が借す糸は織女の涙の玉の緒とや成るらん

天暦四年五月廿一日、圓融院の帝、一品宮に渡らせ給ひて、亂碁取らせ給ひけるに、負けわざを、七月七日に、彼の宮より内裏の大盤所に奉られける羅に貼り付けて侍りける　　中務

天の川川邊涼しき織女に扇の風を猶や借さまし　　元輔

天の川扇の風に霧晴れて空澄み渡る鵲の橋

同じ御時、御屏風、七月七日、夜、琴弾く女あり　　源順

琴の音は何ぞや甲斐無き織女の飽かぬ別れを引「留」きし留めねば

仁和の御時、屏風に、七月七日、女の河水浴みたる所　　平定文

水の紋を下「織」り立「裁」ちて着ん脱ぎ散らし棚機つ女に衣借す夜は

七月七日詠み侍りける　　藤原義孝

秋風よ棚機つ女に言問はん如何なる世にか逢はんとすらん

寂昭「大江定基」が唐土にまかり渡るとて、七月七日、舟に乗り侍りけるに言ひ遣はしける　　右衛門督公任

天の川後の今日だに遥けきを何時とも知らぬ船出悲しも

七夕、後朝に躬恒が許より歌詠みておこせて侍りける返りごとに　貫之

逢ひ見ずて一日も君に習はねば織女よりも我ぞ増される

題知らず　讀人知らず

むつまじき妹背の山と知らねばや初秋霧の立ち隔つらん

天暦御屏風に

藻潮焼く煙に慣るる須磨の海人は秋立つ霧も分かずや有るらん

三條太政大臣「賴忠」家にて、歌人召し集めて、あまたの題詠ませ侍りけるに、「岸の邊の花」と云ふことを　源重之

行く水の岸に匂へる女郎花忍びに浪や思ひ掛くらん

坊の前栽見に女ども參うで來たりければ　僧正遍昭

此處にしも何匂ふらん女郎花人の物云ひ性惡き世に

題知らず　讀人知らず

秋の野の花の色色取り總べて我が衣手に移してしがな

船岡の野中に立てる女郎花渡さぬ人は有らじとぞ思ふ

圓融院の御屏風に、秋の野に色色の花咲き亂れたる所に、鷹居ゑたる人あり　平　兼盛

家苞にあまたの花も折るべきに妬たくも鷹を居ゑてけるかな

女郎花と云ふ言を句の上に置きて　貫之

小倉山峯立ち平し鳴く鹿の經にける秋を知る人の「何ぞ」無き

題知らず　能宣

來て見ぬにも似たるものかな花すすき戀しき人に見すべかりけり

歸りにし雁ぞ鳴くなる宜べ人は憂き世の中を反きかぬらん

中宮の内裏におはしましける時、月の明き夜、歌詠み侍りけるに　善［慶］滋爲政

九重の内だに明き月影に荒れたる宿を思ひ遣るかな「四字［且］こそ清れ」

延喜十九年九月十三日、御屏風に、月に乗りて翫二潺湲一　讀人知らず

百敷の大宮ながら八十島を見る心地する秋の夜の月

八月に、人の家の釣殿に客人あまた在りて月を翫る　順

水の面に宿れる月ののどけきは並み「浪」居て人の寢ぬ夜なればか

清愼公ノ五十ノ賀の屏風に　元輔

走り井の程を知らばや逢坂の關引き越ゆる木綿鹿毛の駒

題知らず　曾禰好忠

虫ならぬ人も音せぬ我宿に秋の野邊とて君は來にけり

人麻呂

庭草に村雨降りて蜩の鳴く聲聞けば秋は來にけり

三百六十首の中に　好忠

秋風は吹きな破りそ我宿の荒屋隠せる蜘蛛の巣がきを

右大將定國の家の屏風に　躬恒

住の江の松を秋風吹くからに聲打添ふる沖つ白濤

題知らず　人麻呂

秋風の寒く吹くなる我宿の淺茅が下に蜩も鳴く

秋風し日毎に吹けば我宿の岡の木の葉は色づきにけり

朝霧のたなびく小野の萩の花今や散るらん未だ飽かなくに

近隣なる所に方違に渡りて宿れりと聞きてある程に、事に觸れて見聞くに、歌詠むべき人なりと聞きて、是れが歌詠むさま如何で善く見んと思へども、いとも心にし有らねば、深くも思はず、進みても云はぬ

程に、彼れもまた心見んと思ひければ、萩の葉の紅ちたるに付けて歌をなんおこせたる　女［某］

秋萩の下葉に付けて目に近く外なる人の心をぞ見る

返し　貫之

世の中の人に心を染めしかば草葉に色も見えじとぞ思ふ

題知らず　人麻呂

此頃のあかつき露に我宿の萩の下葉は色づきにけり

夜を寒み衣雁［借］がね鳴く並べに萩の下葉は色づきにけり　讀人知らず

彼の見ゆる池邊に立てる承和菊の茂み小枝の色のてこらさ（モトノママ）［清らさカ］

天暦ノ御時、菊の宴侍りける洲濱に添りける　忠見

吹く風に散る物ならば菊の花雲居なりとも色は見てまし

物妬みしける男、離れ侍りて後に、菊の變ひて侍りけるを遣はすとて　讀人知らず

老が世に憂きこと聞かぬ菊だにも變ふ色は有りけりと見よ

題知らず　人麻呂

吾妹子が赤裳濡らして植ゑし田を刈りて收むる藏無しの濱

屏風に、翁の稲運ばする繪書きて侍りける所に　　忠見

秋毎に刈りつる稲は積みつれど老いにける身ぞ置き所無き

延喜ノ御時、月次ノ御屏風の歌　　躬恒

刈りて干す山田の稲を干し侘びて守る假庵に幾夜經ぬらん

祓しに、秋、唐崎にまかり侍りて、舟のまかりけるを見侍りて　　惠慶法師

奥山に立てらましかば渚漕ぐ舟木も今は紅葉してまし

題知らず　　讀人知らず

ひさかたの月を清明けみもみぢ葉の濃きも薄きも分きつべらなり

亭子院、大井河に御幸ありて、「行幸も有りぬべき所なり」と仰せ給ふに、事の由奏せんと申して

小一條ノ太政大臣〔藤原ノ忠平〕

小倉山峰のもみぢ葉心あらば今一たびの御幸待たなん

旅人の、紅葉の下行く繪書ける屏風に　　大中臣ノ能宣

故郷に歸ると見てや龍田姫紅葉の錦空に着すらん

題知らず　　讀人知らず

白浪は故郷なれやもみぢ葉の錦を着つつ立〔裁〕ち歸るらん

躬恒

もみぢ葉の流るる時は竹河の淵の緑も色變るらん

齋院の御屏風に

水の面に深く淺くも見ゆるかな紅葉の色や淵瀬なるらん

内裏の御屏風に　清原元輔

月影の田上川に清ければ網代に氷魚の寄るも見えけり

藏人所に侍ひける人の、氷魚の使にまかりにけるとて、京に侍りながら音もし侍らざりければ　修理

如何で猶網代の氷魚に言問はん何に由「寄」りてか我を問はぬと

題知らず　讀人知らず

祝人が祝ふ社のもみぢ葉も注連をば越えて散ると云ふものを

九月晦の日、男、女、野に遊びて紅葉を翫る　源順

如何なれば紅葉にもまだ飽かなくに秋果て飽果てぬとは今日を云ふらん

十月朔の日、殿上の男ども、嵯峨野にまかりて侍る、共に呼ばれて　清原元輔

秋もまだ遠くも有らぬに如何で猶立ち歸れとも告げに遣らまし

鳰鳥の氷の堰に閉ぢられて玉藻の宿を離〔涸〕れやしぬらん

高岳ノ相如が家に、冬の夜の月面白う侍りける夜まかりて　　元輔

いざ斯くて居り明してん冬の月春の花にも劣らざりけり

祭の使にまかり出でける人の許より、摺り袴借りに遣はしけるを、「遅し」と責められければ

東宮ノ女蔵人左近

時雨を　　能宣

杣山に立つ煙こそ神無月時雨を下す雲と成りけれ

十月、滋賀の山越えしける人人　　源ノ順

名を聞けば昔ながらの山なれど時雨るる頃は色変りけり

冬、親の喪に遇ひて侍りける法師の許に遣はしける　　清正

もみぢ葉や袂なるらん神無月時雨るる毎に色の増されば

天暦ノ御時、伊勢が家の集召したりければ、參らすとて　　中務

時雨れつつ舊〔降〕りにし宿の言の葉は掻〔書〕き集むれど留まらざりけり

御返し　　天暦ノ御製〔村上天皇〕

昔より名高き宿の言の葉は木の下〔子の許〕にこそ落ち積るてへ〔と云へノ約語〕

權中納言義懷、入道して後、女の齋院に養ひ給ひけるが、孫より東の院に侍りける姉の許に、十月ばかりに遣はしける　〔藤原義懷ノ女〕

山賤の垣ほ渡りを如何にぞと霜かれがれ〔枯枯、離離〕に訪ふ人も無し

三百六十首の中に　曾禰ノ好忠

み山木を朝な夕なに樵り集めて寒さをこふる〔三字、戀ふるカ〕小野の炭燒

限り無く解く〔疾く〕とはすれどあしびきの山井〔山藍〕の水は猶ぞ氷れる

小忌に當りたる人の許にまかりたりければ、女ども、杯に日蔭を添へて出だしければ　能宣

有明の心地こそすれ杯に日影〔日蔭〕も添へて出でぬと思へば

右大臣恒佐ノ家ノ屛風に、臨時祭書きたる所に　貫之

あしびきの山藍に摺れる衣をば神に仕ふるしるしとぞ思ふ

題知らず　讀人知らず

ちはやぶる神の忌垣に雪降りて空より掛かる木綿にぞ有りける

獨り寢は苦しきものと懲りよとや旅なる夜しも雪の降るらん　貫之

雪を鴛鴦の形に作りて見侍りけるに、やうやう消え侍りければ　中務ノ親王

わたつみも雪消の水は増さりけり遠の嶋嶋見えず成り行く

髻結に降り添ふ雪の雫には枕の下に浪ぞ立ちける

東宮ノ御屏風に、冬野焼く所　　藤原ノ道頼

さ蕨や下に萌ゆらん霜枯の野原の煙春めきにけり

師走の晦頃に、身の上を歎きて　　貫之

霜枯に見え来し梅は咲きにけり春には我身逢はんとは為や

西なる隣に住みて、斯く近隣に在りける事など云ひおこせ侍りて　　三統ノ元夏

梅の花匂ひの深く見えつるは春の隣の近きなりけり

返し　　貫之

梅も皆春近しとて咲くものを待つ時も無き我や何なる

師走の晦方に、年の老いぬる事を歎きて

ぬばたまの我が黒髪に年暮れて鏡の影に降れる白雪

雜　賀

延喜二年五月、中宮御屏風「に脱カ」元日　　紀貫之

昨日より遠をば言はず百歳の春の初めは今日にぞ有りける

屏風に　　伊勢

遙々と雲居をさして行く舟の行く末遠く思ほゆるかな

九條右大臣五十賀屏風に、竹ある所に花の木近く有り　　元輔

花の色も常磐ならなん弱竹の長き世「節」に置く露し掛からば

俊明の朝臣、紀の守に侍りける時、小さき子を抱き出でて、「是れ祈れ祈れと云ひたる歌詠め」と云ひ侍りければ　　讀人知らず

萬づ代を數へんものは紀の國の千尋の濱の眞砂なりけり

東宮の、石などりの石合しければ、三十一を包みて、一つに一文字を書きて參らせける

苔むさば拾ひも更へんさざれ石の数を皆取る齢幾世ぞ

賀ノ屏風、人の家に松の下より泉出でたり　　貫之

松の根に出づる泉の水なれば同じきものを絶えじとぞ思ふ

冷泉院ノ五六の親王袴着侍りける頃、云ひおこせて侍りける　　左大臣〔道長〕

岩の上の松に譬へん君君は世に稀らなる種ぞと思へば

或人の産しに侍りける七夜　　元輔

松が枝の通へる枝を鳥座にて巣だてらるべき鶴の雛かな

大武国章、孫の五十日に破籠調じて歌を絵に書かせける

松の若千歳を兼ねて生ひ繁れ鶴の卵の巣とも見るべく

題知らず　　読人知らず

我のみや子持たるてへ〔と云へノ約語〕ば高砂の尾上に立てる松も子持たり

延喜ノ御時、斎院ノ屏風四帖、宣旨に由りて　　貫之

幾世経し磯邊の松ぞ昔より立ち寄る浪や数は知るらん

人の冠し侍りけるに　　元輔

濃紫たなびく雲を知るべにて位の山の峰を尋ねん

天暦ノ御時、內裏にて保平ノ親王、袴着侍りけるに　參議好古

ももしきに千歳の事は多かれど今日の君はた珍らしきかな

五月五日、小き飾り粽を山菅の籠に入れて、爲政の朝臣の女に心ざすとて　春宮ノ大夫道綱ノ母

心ざし深き汀に刈る菰は千歳の五月何時か「五日」忘れん

天德四年、右大臣五十ノ賀ノ屛風に　淸原ノ元輔

千年經ん君し在さば天皇の天の下こそ後ろ安けれ

東三條院ノ皇太后詮子ノの賀、左大臣「道長」のし侍りけるに、上達部杯取りて歌詠み侍りけるに

右衞門ノ督公任

君が世に今幾たびか返しつつ嬉しきことに逢はんとすらん

右大臣、家造り改めて渡り初めける頃、詩作り、歌など人人に詠ませ侍りけるに、「水樹多佳趣」と云ふ題を

權中納言敦忠

住みそむる末の心の見ゆるかな汀の松の影を映せば

或人の賀し侍りけるに

千年經る霜の鶴をば置きながら久しきものは君にぞ有りける

淸和の女七ノ親王の八十ノ賀、重明ノ親王のし侍りける時の屛風に、竹に雪の降り掛かりたる繪ある所に

白雪は降り隠せども千世までに竹の緑は變らざりけり　貫之

子を、とみはたと附けて侍りけるに、袴着すとて　元輔

世の中に殊なる事は有らずとも富み果してん命長くば

中將に侍りける時、右大辨源ノ致方朝臣の許へ、八重ノ紅梅を折りて遣はすとて　右大將實資

流俗の色には有らず梅の花　致方の朝臣

珍重すべきものとこそ見れ

筑紫へまかりける時に、竈山の下に宿りて侍りけるに、路づらに侍りける木に古く書きつけて侍りける　[某]

春は燃え秋は焦るる竈山　元輔

霞も霧も煙とぞ見る

春、良岑のよしかたが女の許に遣はすとて　藤原ノ忠君朝臣

思ひ立ちめる今日にも有るかな

斯からでも有りにしものを春霞　　　　女

廣幡の御息所、内裏に參りて、遲く渡らせ給ひければ

暮すべしやは今までに君　　　　〔廣幡の御息所〕

と奏し侍りければ　　　　〔村上天皇〕

問ふやとぞ我も待ちつる春の日を

宵に久しう大殿籠らで仰せられける　　　　天暦ノ御製〔村上天皇〕

さ夜更けて今は眠たく成りにけり

御前に侍ひて奏しける　　　　滋野の内侍〔小弐ノ命婦〕

夢に逢ふべき人や待つらん

内裏に侍ふ人を契りて侍りける夜、遲く參りで來ける程に「丑三つ」と時申しけるを聞きて、女の云ひ

遣はしける　　　　〔女某〕

人心憂し見つ「丑三つ」今は頼まじよ

良岑ノ宗貞

夢に見ゆやと寝「子」ぞ過ぎにける

題知らず　平ノ定文

引き寄せば唯だには寄らで春駒の綱引するぞ名は立つ「綱斷つ」と聞く

讀人知らず

花の木は籬近くは植ゑて見じ變ふ色に人傚ひけり

夏は團冬は火桶に身を成してつれなき人に寄りも付かばや

戀するに佛に成ると云はませば我ぞ淨土の主ならまし

灌佛の童を見侍りて

唐衣袖「截」より落つる水ならで我袖濡らすものや何なる

修理ノ大夫惟正が家に方違にまかりたりけるに、出だして侍りける枕に書き付けて侍りける　藤原ノ義孝

つらからば人に語らん敷き妙の枕交して一夜寢にきと

同じ少將通ひ侍りける所に、兵部卿致平の親王まかりて、「少將の君おはしたり」と云はせ侍りけるを、後に聞きて、彼の親王の許に遣はしける

怪しくも我れ濡れ衣を着たるかな三笠の山を人に借られて

忍びたる人の許に遣はしける　平ノ公誠

隱れ簑隱れ笠をも得てしがな來〔着〕たりと人に知られざるべく

年月を經て消息し侍りける人の、つれなくのみ侍りければ、「今は更に世にも在らじ」と云ひて後、久しく音づれず侍りければ、彼の男の妹に消息も語らひて文など遣はしければ云ひ遣はしける　　讀人知らず

心ありて問ふには有らず世の中に有りや無しやの聞かまほしさぞ

語らひける人の、久しう音せず侍りければ、節を遣はすとて

節間にて幾世〔節〕經むらん色變へぬ竹の古根の生ひ換るまで

延喜十七年八月、宣旨に由りて詠み侍りける　　紀ノ貫之

來ぬ人を下に待ちつつひさかたの月を哀れと云はぬ夜ぞ無き

梓弓引きみ引かずみ來ずは來ず來ばこそ猶ぞ外にこそ見め　　柿ノ本ノ人麿

春日の使にまかりて、歸りて朝に女の許に遣はしける　　一條ノ攝政〔伊尹〕

暮れば疾く行きて語らん逢ふ事の十〔遠〕市の里の住み憂かりしも

東より或男のまかり上りて、前前物云ひ侍りける女の許にまかりたりけるに、「如何で急ぎ上りつるぞ」とだに云ひ侍りければ　　讀人知らず

遥かにも思はましかば東路の伏屋と云ひし野邊に寝なまし

女の許に遣はしける文の端を引き破りて返り事をせざりければ

跡も無き葛城山を踏み「文」見れば我が渡し來し片端「橋」か若し

人の、草子書かせ侍りける奥に書き付け侍りける

書き付くる心見えなる跡なれど見ても偲ばん人や有るとて

大納言朝光、下﨟に侍りける時、女の許に忍びてまかりて、暁に「帰らじ」と云ひければ

春宮ノ女蔵人ノ左近

岩橋の夜の契も絶えぬべし明くる侘びしき葛城の神

入道摂政、「兼家」まかり通ひける時、女の許に遣はしける文を見侍りて　　春宮ノ大夫道綱ノ母

疑はし外に渡せる文見れば我や途絶に成らんとすらん

題知らず　　讀人知らず

如何でかは尋ね來つらん蓬生の人も通はぬ我宿の路

東三條にまかり出でて雨の降りける日　　承香殿ノ女御

雨ならで守「洩」る人も無き我宿を淺茅が原と見るぞ悲しき

まかり通ふ所の、雨の降りければ　　大納言朝光

いにしへは誰が故郷ぞおぼつかな宿漏「守」る雨に問ひて知らばや

中納言平惟仲、久しう有りて消息して侍りける返り事に書かせ侍りける　高階成忠ノ女

夢とのみ思ひ成りにし世の中を何今さらに驚かすらん

題知らず　源ノ公忠朝臣

人も見ぬ所に昔君と我が爲ぬわざわざを爲しぞ戀しき

左大將濟時が相知りて侍りける女、筑紫にまかり下りけるに、實方朝臣の供にて下り侍りけるに付けて忍びかに遣はしたりければ　藤原後生が女

今日までは生の松原生きたれど我身の憂さ「宇佐」に歎きこぞ經る

成房朝臣、法師に成らんとて飯室にまかりて、京の家に衾を取りに遣はしたりければ、書き付けて侍りける　則忠朝臣ノ女

生きたるか死ぬるか如何に思ほえず身より外なる玉梓かな

拾遺和歌集　卷第十九

雜　戀

題知らず　柿ノ本ノ人麻呂

少女子が袖振山の瑞垣の久しき世より思ひ初めてき

稻荷に詣で逢ひて侍りける女の、物言ひ掛け侍りけれど、答へもし侍らざりければ　平ノ定文

稻荷山社の數を人間はばつれなき人を見つ「三つ」と答へん

題知らず　柿ノ本ノ人麻呂

み島江の玉江の蘆を占めしより己がとぞ思ふ未だ刈らねど

大中臣ノ能宣

徒なりと徒には如何が定むらん人の心を人は知るやは

讀人知らず

雙六の市場に立てる人妻の逢はで止みなんものにやは有らぬ

濡衣を如何が着ざらん世の人は天「雨」の下にし住まん限りは

流され侍りける時　贈太政大臣〔菅原道眞〕

天の下逃るる人の無ければや著てし濡衣干る由も無き

題知らず　讀人知らず

何處とも背定めぬ白雲の掛からぬ山は有らじとぞ思ふ

白雲の斯一掛一かる空言する人を山の麓に寄せてけるかな

いつしかも筑摩の祭疾くせなんつれなき人の鍋の數見ん

まだ少將に侍りける時、采女町の前をまかり渡りけるに、明日香の采女簾出だして侍りけるに遣はしける　小野宮太政大臣〔實賴〕

人知れぬ人待顏に見ゆめるは誰が頼めたる今宵なるらん

返し　明日香采女

瀧水の底に有らでは寢一練ぬ一菜一網一の來一繰一る人も無し待つ人も無し

中納言敦忠、兵衞佐に侍りける時に、忍びて云ひ契りて侍りける事の、世に聞え侍りければ

右近

人知れず賴めし事は柏木の洩り「森」やしにけん世に經りにけり

やんごとなき所に侍ひける女の許に、秋頃忍びてまからんと男の云ひければ　讀人知らず

秋萩の花も植ゑ置かぬ宿なれば然か「鹿」立ち寄らん所だに無し

　題知らず

小余綾の急「磯」ぎて来つる甲斐「貝」も無く又こそ立てれ沖つ白浪

　人の召し侍りける男の、獄に侍りて、乳母の許に遣はしける

忍びつつ夜こそ来「着」しか唐衣人や「獄」見んとは思はざりしを

　さだもりが住み侍りける女に、くにもちが忍びて通ひ侍りける程に、さだもり参うで来ければ、狼狽ひて塗籠に隠して、後ろの戸より逃し侍りける翌日、云ひ遣はしける　くにもち

宮造る飛騨の工匠の手斧音ほとほとしかる目をも見しかな

　男持ちたる女を切に掛想し侍りて、或男の遣はしける

有りとても幾世かは経る唐国の虎伏す野邊に身をも投げてん

　滋賀の山越えにて、女の、山の井に手洗ひ、掬びて飲むを見て　貫之

掬ぶ手の雫に濁る山の井の飽かでも人に別れぬるかな

　三條の尚侍、方違へに渡りて歸る翌朝に「雫に濁るばかりの歌、今はえ詠まじ」と侍りければ、車に乗らんとしける程に　「貫之」

家ながら別るる時は山の井の濁りしよりも侘びしかりけり

題知らず　　　　　　　　　　　　　　　　讀人知らず

はし鷹のとかへる山の椎柴の葉替はすとも君は替へせじ

久しう參うで來ざりける男の、たまさかに來たりければ、女の頓にも出でざりければ

過ちの有るか無きかを知らぬ身は厭ふに似たる心地こそすれ

題知らず

行く水の泡ならばこそ消え返り人の淵瀬を流れても見め

ともかくも云ひ放たれよ河水の深さ淺さを誰れか知るべき

在原ノ業平朝臣

染川を渡らん人の如何でかは色に馴るてふ事の無からん

賀茂ノ臨時祭の使に立ちての朝に、挿頭の花に挿して、左大臣の北ノ方の許に云ひ遣はしける

兵衞、原注、〔參議茂ノ女〕

ちはやぶる加茂の河邊の藤浪は掛けて忘るる時の無きかな

題知らず　　　　　　　　　　　　　　　　讀人知らず

世の中は如何がはせまし繁山の青葉の杉のしるしだに無し

埋れ木に虫食むと云ふめれば久米路の橋は心して行け

世の中はいさともいさや風の音は秋に秋添ふ心地こそすれ

石見に侍りける女の參りて來たりけるに　人麻呂

石見なる高間の山の木の間より我が振る袖を妹見けんかも

和泉の國に侍りける程に、忠房朝臣、大和より送れる、返し　貫之

津の國高師の濱の濱松の名にこそ君を待ちわたりつれ

雷鼓、鳴り侍りける朝に、宣耀殿の女御の許に遣はしける　天暦ノ御製〔村上天皇〕

音をのみ聞い遣りつつ雷よりも心の空に成一りし宵かな

越なる人の許に遣はしける　貫之

思ひ遣る越の白山知らねども一夜も夢に越えぬ日ぞ無き

題知らず　人麻呂

山科の木幡の里に馬は有れど徒歩よりぞ來る君を思へば

春日山雲居隱れて遠けれど家は思はず君をこそ思へ

物へまかりける路に濱づらに貝の侍りけるを見て　坂上ノ郎女

我が夫子を戀ふるも苦し暇あらば拾ひて行かん戀忘れ貝

人の國へまかりけるに、漁人の潮垂れ侍りけるを見て　惠慶法師

故郷を離るる袂も乾かぬに又も潮垂るる海人も有りけり

仁和の御屏風に、海人潮垂るる所に鶴鳴く　大中臣頼基

潮垂るる身は我のみと思へども外なる鶴も音をぞ鳴くなる

参りて来ること難く侍りける男の、頼みわたりければ　読人知らず

徒然と思へば泥［憂き］に生ふる蘆のにかたき世［節］をば如何が頼まん

浮島　順

定め無き人の心に比ぶれば唯浮島は名のみなりけり

「さかなか独り在らば」など女の云ひ侍りければ　元輔

独りのみ年経けるにも劣らじを数ならぬ身の有るに有るかは

題知らず　読人知らず

紫草の色の言葉のとかくすればあやかりやすき人の心か

紀伊守に贈り侍りける　中納言実持

ひさかたの雨の降る日を唯独り山辺に居れば埋れたりけり

男の来かり絶えたりける女の許に、雨降る日、見馴れて侍りける従者の「葦毛の馬求めにとてなん参うで来つる」と云ひ侍りければ　読人知らず

雨降りて庭に溜まれる潦水誰が住「澄」まばかは影「鹿毛」の見ゆべき

夜と共に雨降る宿の庭潦住「澄」まぬに影は見ゆるものかは

日蝕の時、太皇大后宮より一品の親王の許に遣はしける

逢ふ事の斯くてや終に闇「止み」の夜の思ひも出でぬ人の務めか「夙に」は

題知らず　　人麿

岩代の野中に立てる結び松心も解けず昔思へば

女の許に菊を折りて遣はしける　　讀人知らず

今日かくも明日とも知らぬ白菊の白らず幾世を經べき我身ぞ

忠君宰相、ままのぶが女にまかり通ひて、程無く調度どもを運び返しければ、沈の枕を添へて侍りける

を返しおこせたりければ

涙川水増さればやしきたへの枕の浮きて留まらざるらん

延喜の御時、按察の御息所、久しく勘事にて御乳母に付けて參らせける

世の中を常無きものと聞きしかどつらき事こそ久しかりけれ

御返し　　［醍醐天皇］

つらきをば常無きものと思ひつつ久しき事を頼みやはせぬ

題知らず　　伊勢

我こそは憎くも有らめ我宿の花見にだにも君が来まさぬ

恨むこと侍りける女の、逢ふ事をせずのみ侍りければ、一條ノ攝政〔藤原ノ伊尹〕、「石見潟」と云ひ遣はしたりければ　　讀人知らず

石見潟何かはつらきつらからば怨みがてらに来ても見よかし

一條ノ攝政、下﨟に侍りける時、承香殿ノ女御に侍りける女、忍びて物云ひ侍りけるに、「更にな問ひそ」と云ひて侍りければ、「契りし事有りしかば」など云ひ遣はしたりければ　　本院ノ侍従

其れならぬ事も有りしを忘れねと云ひしばかりを耳に留めけん

題知らず　　讀人知らず

御狩する駒の爪づく青葛君こそ我に絆なりけれ

延喜ノ御時、中宮ノ屏風に　　貫之

何れをかしるしと思はん三輪の山有りとし有るは杉にぞ有りける

稲荷に詣でて懸想し初めて侍りける女の、他人に逢ひて侍りければ　　藤原ノ長能

我と云へば稲荷の神もつらきかな人の為めとは祈らざりしを

稲荷の秀倉に女の手にて書き付けて侍りける　　讀人知らず

瀧の水かへりて澄まば稲荷山七日昇れるしるしと思はん

元良の親王久しくまからざりける女の許に、紅葉おこせて侍りければ　「女某」

思ひ出でて問ふにはあらず秋果つる色の限りを見するなりけり

女の許に雨を遣はしたりければ、云ひ遣はしける　「女某」

ゆゆしとて忌むとも今は甲斐も有らじ憂きをば風に付けて止みなん

讀人知らず　貫之

獨して世をし盡さば高砂の松の常磐も甲斐無かりけり

三條ノ右大臣の屏風に

玉藻刈るあまのゆき潟さす棹の長くや人を恨みわたらん

年の終りに人待ち侍りける人の詠み侍りける　「女某」

頼めつつ別れし人を待つ程に年さへせめて怨めしきかな

拾遺和歌集　巻第二十

哀傷

女にまかり後れて、又の年の春、櫻の花盛りに、「家の花を見て、聊かに思ひを述ぶ」と云ふ題を詠み侍りける　　小野ノ宮ノ太政大臣〔實頼〕

さくら花のどけかりけり亡き人を戀ふる涙ぞ先づは落ちける　　平ノ兼盛

面影に色のみ殘るさくら花幾世の春を戀ひんとすらん　　清原ノ元輔

花の色も宿も昔の其れながら變れる物は露にぞ有りける　　大中臣ノ能宣

櫻花匂ふものから露けきは木の芽も物を思ふなるべし

此事を聞き侍りて後に　　大納言延光

君まさば先づぞ折らまし櫻花風の便りに聞くぞ悲しき

中納言敦忠まかり隠れて後、比叡の西坂本に侍りける山里に、人人まかりて花見侍りけるに

一條ノ攝政〔藤原ノ伊尹〕

いにしへは散るをや人の惜みけん花こそ今は昔戀ふらし

天暦ノ帝崩れ給ひて、次の年五月五日に、宮内卿兼通が許に遣はしける　女藏人兵庫

皐月來て眺め〔長雨〕増されば菖蒲草思ひ絶えにし昔〔根〕こそ泣かるれ

稀足と云ひ侍りける子の、遣り水に菖蒲を植ゑ置きて亡くなり侍りにける、後の年生ひ出でて侍りけるを見て

粟田ノ右大臣〔藤原ノ道兼〕

忍べとや文目〔菖蒲〕も知らぬ心にも長からぬ世の憂き〔泥土〕に植ゑけん

右兵衛ノ佐のぶかた、まかり隠れにけるに、親の許に遣はしける　右大臣〔藤原ノ顯光〕

此處にだに徒然と鳴くほととぎすまして子戀の森は如何にぞ

朝顔の花を人の許に遣はすとて　藤原ノ道信朝臣

朝顔を何はかなしと思ひけん人をも花は然こそ見るらめ

夏、柞の紅葉の散り殘りたりけるに付けて、女五の親王の許に　天暦ノ御製〔村上天皇〕

時ならで柞の紅葉散りにけり如何に木の下寂しかるらん

妻の亡くなりて侍りける頃、秋風の夜寒に吹き侍りければ　大貳國章

思ひきや秋の夜風の寒けきに妹無き床に獨り寢んとは

中宮崩れ給ひての年の秋、御前の前栽に露の置きたるを風の吹き靡かしけるを御覽じて

天暦ノ御製〔村上天皇〕

秋風に靡く草葉の露よりも消えにし人を何に譬へん

妻にまかり後れて、又の年の秋、月を見侍りて　人麿

去年見てし秋の月夜は照せども逢ひ見し妹は彌遠ざかる

朱雀院の御四十九日の法事に、かの院の池の面に霧の立ち渡りて侍りけるを見て　權中納言敦忠

君無くて立つ朝霧は藤ごろも池さへ着るぞ悲しかりける

猿澤の池に釆女の身投げたるを見て　人麿

吾妹子が寢くたれ髮を猿澤の池の玉藻と見るぞ悲しき

題知らず　讀人知らず

心にも有らぬ憂き世に墨染の衣の袖の濡れぬ日ぞ無き

服脫ぎ侍るとて

藤衣祓へて捨つる淚川岸にも餘る水ぞ流るる

藤衣はつるる糸は君戀ふる淚の玉の緒とや成るらん

恒德公の服脱ぎ侍るとて　藤原ノ道信朝臣

限り有れば今日脱ぎ捨てつ藤ごろも果て無きものは涙なりけり

としのぶが流されける時、流さるる人は重服を着てまかると聞きて、母が許より衣に結び付けて侍りける

人成しし胸の乳房を火むらにて燒く墨染の衣着よ君

思ふ妻に後れて歎く頃詠み侍りける　大江ノ爲基

藤衣逢ひ見るべしと思ひせば松〔待〕に掛かりて慰めてまし

題知らず　讀人知らず

年經れど如何なる人か常磐りて相思ふ人に別れざるらん

謙德公の北の方、二人子ども亡くなりて後　〔藤原ノ伊尹〕

墨染の衣の袖は雲なれや涙の雨の絶えず降るらん

漁人〔尼〕と云へど如何なる漁人の身なればか世に似ぬ潮を垂れ渡るらん

昔見侍りし人人多く亡く成りたる事を歎くを見侍りて　藤原ノ爲賴

世の中に有らましかばと思ふ人無きが多くも成りにけるかな

返し　右衛門ノ督公任

常ならぬ世は憂き身こそ悲しけれ其數にだに入らじと思へば

親に後れて侍りける頃、男の問ひ侍らざりければ　伊勢

無き人も有るがつらきを思ふにも色分かれぬは涙なりけり

題知らず　讀人知らず

愛くしと思ひし妹を夢に見て起きて探るに無きぞ悲しき

順が子亡くなりて侍りける頃、問ひに遣はしける　清原ノ元輔

思ひ遣る子戀の森の雫には外なる人の袖も濡れけり

子に後れて詠み侍りける　平ノ兼盛

弱竹の我子の世をば知らずして生し立てつと思ひけるかな

大納言朝光が女の女御まかり隠れにける事を聞き侍りて、筑紫より問ひにおこせて侍りける頃、子ノ右馬助ちかしげが亡くなりて侍りければ　藤原ノ共政朝臣ノ妻

我のみや此世は憂きと思へども君も歎くと聞くぞ悲しき

返し　〔藤原ノ朝光〕

憂き世には在る身も憂しと歎きつつ涙のみこそ降る心地すれ

生み奉りたりける親王の亡くなりて、又の年、杜鵑を聞きて　伊勢

死出の山越えて來つらん〔此句イ越えてや來つる〕ほととぎす戀しき人の上語らなん

伊勢が許に、子の事を問ひに遣はすとて　平定文

思ふより云ふは疎かに成りぬれば譬へて云はん言の葉ぞ無き

中納言兼輔、妻亡くなりて侍りける年の師走に、貫之まかりて物云ひ侍りける次でに　貫之

戀ふる間に年の暮れなば亡き人の別れやいとど遠く成りなん

妻亡くなりて後に子も亡くなりにける人を、問ひに遣はしたりければ　讀人知らず

如何にせん忍の草も摘み佗びぬ形見〔筐〕と見えし子〔籠〕だに無ければ

子二人侍りける人の、一人は春まかり歿れ、今一人は秋亡くなりけるを、人の問ぶらひて侍りければ

春は花秋は紅葉と散り果てて立ち返るべき木の下〔子の許〕も無し

娘に後れ侍りて　中務

忘られて暫し睡眠む程もがな何時かは君を夢ならで見ん

壻に後れ侍りて

憂き〔浮〕ながら消えせぬものは身なりけり羨ましきは水の泡かな

題知らず　讀人知らず

世の中を斯く云ひ云ひて果て果ては如何にや如何に成らんとすらん

吉備津の釆女亡くなりて後詠み侍りける　人麻呂

さざ浪や志賀のてこらがまかりにし川瀬の道を見れば悲しも

讃岐の小峯の島にして岩屋の中にて亡くなりたる人を見て

沖つ浪寄る荒磯をしきたへの枕と枕きてなれる君かも

紀ノ友則身まかりにけるに詠める　　貫之

明日知らぬ我身と思へど暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ

相知れる人の亡せたる所にて詠める

夢とこそ云ふべかりけれ世の中は現あるものと思ひけるかな

妻の死に侍りて後、悲びて詠める　　人麻呂

家に行きて我家を見れば玉匣の外に置きたる妹が小枕

まきもくの山邊響きて行く水の水泡の如く世をば我が見る

石見に侍りて、亡くなり侍りぬべき時に臨みて

妹山の岩根に置ける我をかも知らずて妹が待ちつつ有らん

世の中心細く覺えて常ならぬ心地し侍りければ、公忠朝臣の許に詠みて遣はしける。此間病重く成りにけり　　紀ノ貫之

手に掬ぶ水に宿れる月影の有るか無きかの世にこそ有りけれ

此歌詠み侍りて、程無く亡くなりにけるとなん家の集に書きて侍る

朱雀院崩せさせ給ひける程近く成りて、太皇大后宮の幼くおはしましけるを見奉らせ給ひて

御製「朱雀天皇」

呉竹の我世は異に成りぬとも音「根」は絶えせずも泣「無」かるべきかな

題知らず　讀人知らず

鳥部山谷に煙の燃え立たばはかなく見えし我と知らなん

病して人多く亡くなりし年、亡き人を野ら、藪などに置きて侍るを見て　すけきよ

皆人の命を露に譬ふるは草むら毎に置けばなりけり

世のはかなき事を云ひて詠み侍りける　順

草枕人は誰れとか云ひ置きし露「イ終」の住處は野山とぞ見る

題知らず　沙彌滿誓

世のなかを何に譬へん朝ぼらけ漕ぎ行く舟の跡の白浪

忠蓮南山の房の繪に、死人を法師の見侍りて泣きたる繪を書きたるを見て　源ノ相方朝臣

契あれば屍なれども逢ひぬるを我をば誰か問はんとすらん

題知らず　讀人知らず

山寺の入相の鐘の聲ごとに今日も暮れぬと聞くぞ悲しき

法師に成らんとて出でける時に、家に書き付けて侍りける　慶滋ノ保胤

憂き世をば背かば今日も背きなん明日も有りとは頼むべき身か

題知らず　讀人知らず

世の中に牛の車の無かりせば思ひ「火」の家を如何で出でまし

法師に成らんとしける頃、雪の降りければ、疊う紙に書き納めて侍りける　藤原ノ高光

世の中に降「經」るぞはかなき白雪の且つは消えぬるものと知る知る

服に侍りける頃、相知りて侍りける女の、尼に成りぬと聞きて遣はしける　能宣

墨染の色は我のみと思ひしを憂き世を背く人も有りとか「二字[不]けり」

返し　讀人知らず

墨染の衣と見れば外ながらもろともに着る色にぞ有りける

成信、重家等、出家し侍りける頃、左大辨行成が許に云ひ遣はしける　右衛門ノ督公任

思ひ知る人も有りける世の中を何時を何時とて過ぐすなるらん

少納言藤原ノ統理に、年頃契ること侍りけるを、志賀にて出家し侍ると聞きて、云ひ遣はしける

さゞ浪や志賀の浦風如何ばかり心の中の涼しかるらん

女院ノ東三條院詮子ノ御八講ノ捧物に、銀して龜のかたを造りて詠み侍りける　齋院

業盡す御手洗川の龜なれば法の浮木に逢はぬなりけり

天暦ノ御時、故后の宮の御賀せさせ給はんとて侍りけるを、宮崩せ給ひにければ、やがてその設けして御誦經行はせ給ひける時　御製〔村上天皇〕

何時しかと君にと思ひし若菜をば法の道にぞ今日は摘みつる

爲雅朝臣、普門寺にて經供養し侍りて、又の日是れ彼れ諸共に歸り侍りける次でに、小野にまかりて、侍りけるに、花の面白かりければ　春宮ノ大夫道綱ノ母

薪樵る事は昨日に盡きにしをいざ斧の柄は此處に朽さん

左大將濟時、白川にて說經せさせ侍りけるに　實方ノ朝臣

今日よりは露の命も惜からず蓮の上の玉と契れば

修行し侍りける人の、苦しく覺え侍りければ、え起き侍らざりける夜の夢に、をかしげなる法師の、衝き驚かして詠み侍りける

朝毎に拂ふ塵だに有るものを今幾世〔夜〕とて弛むなるらん

性空上人の許に詠みて遣はしける　雅致ノ女式部〔和泉式部〕

冥きより冥き道にぞ入りぬべき遙かに照せ山の端の月

極樂を願ひて詠み侍りける　仙慶法師

極樂は遙けき程と聞きしかど勤めて〔翌旦〕到る所なりけり

市門に書き付けて侍りける　空也上人

一たびも南無阿彌陀佛と云ふ人の蓮の上に登らぬは無し

光明皇后、山階寺に有る佛跡に書き付け給ひける　〔光明皇后〕

三十ぢ餘り二つの姿具備へたる昔の人の蹈める跡ぞ是れ

大僧正行基、詠み給ひける　〔僧行基〕

法華經を我が得し事は薪樵り菜摘み水汲み仕へてぞ得し

百草に八十草添へて賜ひてし乳房の報い今日ぞ我がする

南天竺より東大寺供養に遇ひに、菩提が渚に來着きたりける時詠める　〔僧菩提〕

靈山の釋迦の御前に契りてし眞如朽ちせず逢ひ見つるかな

返し　波羅門僧正

伽毘羅衛に共に契りし甲斐ありて文珠の御顏逢ひ見つるかな

聖徳太子、高岡の山邊ノ道ノ人の家におはしけるに、飢ゑたる人、道のほとりに臥せり。太子の乗り給へる馬留まりて行かず。鞭を上げて打ち給へど、後へ退きて留まる。太子即ち馬より下りて、飢ゑたる人

の許に歩み進み給ひて、紫の上の御衣を脱ぎて飢人の上に掩ひ給ふ。歌を詠みて宣給はく　〔聖徳太子〕

しなてるや片岡山に飯に飢ゑて臥せる旅人あはれ親無し

になれなれけめや、「さす竹のきねはや無き飯に飢て臥せる旅人あはれあはれ」と云ふ歌なり

飢人、頭を擡げて、御返しを奉る　〔某〕

斑鳩や富の小川の絶えばこそ我が大君の御名を忘れめ

藤原公任歌集

藤原公任歌集〔原本、前大納言公任卿集〕

春、白河に、殿上の人人行きたりけるに

春來てぞ人も訪ひける山里は花こそ宿の主人なりけれ

同じ所に紅梅植ゑ給へるに、初めて花咲きたるにおはしたりけるに、女御〔公任ノ妹諟子〕の御許より

植ゑしより下待つものを山里の花見に誘ふ人の無きかな

返し

植ゑ置きし花無かりせば蓬生を何に付けてか思ひ出でまし

「雨の中に山里の梅を思ふ」と云ふ事を

山里の梅を思ふに雨降れば唯だにも散らで色や増さらん

二月まで梅の咲かざりける年、前の梅に結び付けたる〔某〕

知るらめや霞の空を眺めつつ花も匂はぬ春を歎くと

誰がともえ知り給はで、取る人や有ると、結び付け給うける

覺束な何處なるらん花咲かぬ霞の中の鶯のこゑ

いと久しう取る人も無きに、打たゆみて取られにけり。あさましう妬たきことを思しけるに、夜深き

暁に結び付けけるを見て、捉へ留めて見給ひし〔某〕

霞立つ遠山深き鶯の花の林を訪ふにぞ有りける

使に問へば、「三條の宮に□にと云ふ人の取らせしなり。本は知り給はざりし事なり。「斯かる事ゆかしがりこし給ふな」と云ふ返しに

鶯の音を知るべにて霞立つみ山の中を尋ねつるかな

程經て奉りたる〔某〕

花咲きし日より待つかな尋ぬやと三輪の山邊の鶯のこゑ

返し

花をのみ尋ぬる程に鶯はその山下を過ぎやしにけん

花山院まだ春宮と申しける時、「水に花の色浮ぶ」と云ふ事を、人人に詠ませ給ふに

花の色を浮ぶる水は淺けれど千年の秋の契り深しな

「闇はあやなし」と云ふ題を

春の夜の闇にし有れば匂ひ來る梅より外の花無かりけり

前近き桃の、初めて花咲きたるに

嬉しくも桃の初花見つるかな又來ん春も定め無き世に

白川の西の戸に人の書きたりける〔某〕

來ても見で花を着ながら散らしつる風の傍めにや人の憎みけん

都出でて花見にこそはく〔來〕れなゐの色なる梅に心染めつれ

返し、傍らに付くる

風にしも何か任せん梅の花比へて訪はん人をこそ待て

花びらの數にても知れ紅に八潮染めたる梅にやは有らぬ

中務の宮にて人人酒飲みし翌日、宮の聞え給うける〔具平親王〕

飽かざりし君が匂ひの戀しさに梅の花をぞ今朝は折りつる

返し

今ぞ知る袖に匂へる花の香は君が折りける匂ひなりけり

中宮にて、何の折にや

めづらしき玉の臺の花の蔭に聞かまく欲しき鶯の聲

返し、誰とも知らず〔某〕

下枝にて聲を惜みし鶯は花の盛りを待つにぞ有りける

粟田に人人おはして、思ふ心詠むに

憂き世をば峰の霞や隔つらん猶山里は住み好かりけり

二月十日、前なりける梅の咲きたりけるに、里なる女房に

君に由り風も避きつつ散り難てに待つめる花の折な過ぐしそ

梨の花に時過ぎたる實の付きたるに、右大辨〔行成〕

春深みみ山がくれの花梨〔無〕と云ふに付けても分けぞかねぬる

返し

常ならぬ身〔實〕をぞ恨むる生らぬより花無し〔梨〕と云ふ世にこそ有りけれ

また「斯くては」とて

有りと云ふ程だに有るを且つ見つつ花無し〔梨〕と云ふ春をこそ思へ

二月に、雪のいと高う降りたる、ゆきよりが曹司の前に雪の山をいと高う造りて煙を立てたるに、雪の甚う降れば、唐傘を覆ひて立てたりければ

東路の富士の高嶺に有らねども三笠の山も煙立ちけり

帥ノ宮、花見に白河におはして〔敦道親王〕

我れが名は花盗人と立てば立て唯だ一枝は折りて歸らん

と有りければ

山里の主に知らせで折る人は花をも名をも惜まざりけり

また宮より〔敦道親王〕

知られぬぞ甲斐無かりける飽かざりし花に換へてし名をば惜まず

返し

人知らぬ心の程を知り居れば花の邊りに春は住まはん

「花をも名をも」と聞え給へりける御返しに付けて、道貞が妻の聞えたりける〔和泉式部〕

折る人の其れなるからにあぢきなく見し山里の花の香ぞする

返し

知るらめやその山里の花の香の尋常の袖に移りやはする

また聞えたりける〔和泉式部〕

知らせじと空に霞の隔てては尋ねて花の色も見てしを

返し

今さらに霞閉ぢたる白河の關を強ひては尋ぬべしやは

白河にて

故郷の花をも思ふ山ざくら散るを見捨てて歸り難さよ

白河に忍びておはしたるに、大白河と云ふ所に殿上人多くおはしたりと聞き給ひて、其日式部卿の宮の中將〔源ノ頼定〕、大白河におはしけるに

白河の同じ河邊のさくら花如何なる宿を人尋ぬらん

返し〔源ノ頼定〕

花の色の深さ淺さにおのづから宿分く人と成りにけるかな

三月十日、松が崎の念佛聞きに、女御、上など忍びておはしけるに、路の程、月朧ろにて、風の聲など滴かなり。女御殿の御〔藤原ノ諟子〕

晝ならば河邊の花も見るべきに夜半の嵐のうしろめたさよ

と有りけるに

香を覓めて行かば消ぬべし山風の吹くまゝに散る陰見れば憂し

夜一夜錄き事聞き明して、曉方に見れば、夜散りける花の、遣り水の浪に寄せられて、蘇枋貝の狀なるに、「櫻貝とは是れをや」など云ひて

夜もすがら散りける花を朝ぼらけ明石の濱の貝かとぞ見る

と云ふに、殿守〔某〕

水に浮ぶ櫻の貝の色見れば浪の花とぞ云ふべかりける

と云ふに

朝ぼらけ春の湊の浪なれや花の「不明カ」散る時ぞ寄せ増さりける

御車の事ども有るべし。陸奥尼御前の紙に花の散るを見給ふ。昔の御家の南なる花のいと甚う散るを取り

集めて、すけあきら

花の散る宿に昔の跡ながら苔の庭には跡だにも無し

と云ふに

さくら花宿に溜れつつ尋ぬればいにしへ語る宿の庭かな

此次でに、すけあきら、遠く往ぬべき事など云ひて

すけあきら

過ぎ難き花に付けてぞ罷出でて行かましものの[　][　]あつちの国（コト、ママ）

春過ぎて散る花だにも有るものを老の身を唯だ思ひ遣らなん

白河に寄り給ひて

白河の流れて今日を忘れめや「すけあきらカ」

と有りければ、御車より

水綱絶えて淺き瀬とは成るとも

三條殿〔頼忠〕世の中すさまじうて籠りおはしける頃、御前の藤の咲き始めたるを

年毎に春をも知らぬ宿なれど花咲き初むる藤も有りけり

花山ノ院、觀音院におはして、「殘りの花を尋ぬ」、「山寺に遊ぶ」と云ふ題、詠ませ給うけるに

見るままに且つ散る花を尋ぬれば殘りの春ぞ少なかりける

常に花さく鷲の峰をし未だ見ねば今日山里のめづらしきかな

三井寺に物習ひに入り給ふとて、白河に寄り給へりければ、花の盛りなりけるが、歸るさに散り果ててければ

故郷の花は待たでぞ散りにける春より前に歸ると思へど

白河に三月晦日におはして

惜みにとさして來つれど逢坂の關にも春は留まらざりけり

〔　〕はのすけ、京極の家なる紅梅を白河に植ゑ給ふとて、掘らせ給うければ、結び付けたりける〔某〕

いにしへの春の形見に眺めつる花を何れの風誘ふらん

返し

香ばかりを誘へと思ふ山里の風を根ながら誘ふべしやは

人に、春の初め

少し春ある心地こそすれ
　と述給ひければ〔某〕
吹き初むる風も濕さぬ山里は
　杜鵑待つ心を
ほのかにも聞かぬ限はほとゝぎす待つ人さへぞ寢られざりける
　同じ心を、女御の御〔藤原ノ諟子〕
待ち得ても唯だ一聲をほとゝぎす寢覺がちにて明す頃かな
「郭公聲稀れなり」と云ふ題を、實方ノ中將
里分かぬ空音と聞けばほとゝぎす誰れにか如何で云はば答へん
　と有るに
ほとゝぎす飽かでや止まん待ち來つる今朝の寢覺の唯だ一聲を
　唐瞿麥
色毎に匂へる宿の撫子に古から〔唐〕の種にぞ有るらし
　高遠の君
種分きて色しも深きなでしこの花に心も染めてこそ見れ

夕立のしたるに、人人歌詠みけるに

夕立に草の緑に見ゆるかな秋さへ遠く成ら〔鳴〕んとやする

爲基〔大江氏〕

夏の日の降りしも遂げぬ村雨に草の緑を深く染むらん

また

紅に濡るる袂は成るものを如何なる庭か緑なるらん

山里の卯の花を、すけかたの辨

年を經て通ひ慣れにし山里の門訪ふまでに咲ける卯の花

返し

卯の花の散らぬ限りは山里の木の下闇も有らじとぞ思ふ

中納言〔定頼〕の稚兒におはしける時、藥玉を奉り給ふとて、女御〔娍子〕の御

命をぞ續ぐと云ふなるいときなき袂に掛かる今日の菖蒲は

御返し

いときなき菖蒲は生ふる所から誰に掛かりて經べき千代ぞは

また

あやめ草生ふる澤水清ければ引く人あまた有らざらめやは

圓融院に、橘の籠に入れたるに、夏虫を居ゑて、「是れ詠め」と仰せられければ

夏虫は花橘に宿りして此〔籠〕の中ながら千世も經ぬべし

五月の曇りたりけるに

月待つと天の川原を眺むれば出づる程だに見えぬ空かな

「時鳥を待つは月を待つに勝れり」と云ふ題を

月よりも待ちぞかねぬるほととぎすみ山を出でん程を知らねば

唐瞿麥を人人詠むに

しき島や日本には有らぬ撫子の花は宜べこそ世に似ざりけれ

曇れる月を待つ頃

二たびや人より待たん月影の雲の際より出でぬ限りは

瞿麥を見給ひて

急ぐべき世とは知る知る常夏の花に心の留まりぬるかな

四月に長谷にゐむよ〔圓禪カ〕僧正の參りでたりけるに、櫻の盛りなりけるを見て、いみし有りけり。〔此句解シ難シ、脫文アルナラン〕折りて參らせて、又の日〔僧正〕

昨日まで惜み留めてし山櫻夜の間の風の悒かしきかな

返し

春過ぎて君を待ちける花なればまた來るまでは散らじとぞ思ふ

五月五日

今日毎に軒の端なる菖蒲草織女に劣らざりけり

七月七日、藤壺の撫子合に人讀半都滿字斗たりける

棚機の秋の夜を經て撫子の花をぞ今日は合せつと見よ

故伊勢の命婦が家近き所に渡り給ひて、七月七日

雲居にて契りし中は棚機を羨む程に成りにけるかな

返し

哀れにも忘れざりける雲居かな棚機つ女の今日よりも顯に

秋の初めつ方、中務の宮〔具平親王〕に

大方の秋は來ぬれど如何なれば下待つ花の遲く咲くらん

人人の、嵯峨野に行く日、留まりて云ひ遣り給うける

誘ひて行くや何なる女郞花分けて紐解く野邊の邊りを

返し、中宮大夫、只今の大殿〔道長〕

君をしも避くとも無きにをみなへし露の心の置かれぬるかな

女郎花掘りて行く所の有りけるを問はせ給うければ、「あきのぶ〔高階明順カ〕が家に」と云ひければ

遣り給うける

思ふとも心も知らでをみなへし如何なる宿に移すなるらん

返し〔あきのぶ〕

をみなへし同じゆかりの花なれど君し尋ねば家にこそ得め

宮〔中宮遵子〕に、大夫の、薬入れて奉りたりける櫛の箱を、程経て秋立つ日返すとて、色色の花ども

を入れて返させ給ふとて〔宮〕

初風に長閑けき花の露ならば置〔起〕きて見つべき玉櫛笥かな

と書かせ給うけるを、斯くも云ひてんかしと見給うける

夜をこめて置〔起〕きける露の玉櫛笥明けての後ぞ秋と知りぬる

八月十五夜にあきのぶが許に

蓬生の閨も残らぬ今宵さへ錦の袖を知らずや有るらん

返し〔あきのぶ〕

月と云へど心の中は照さぬに衣の上は添へてこそ聞け

久しう住み給はざりける所に歸り渡り給うて

時しも有れ秋經る〔故〕里を來て見れば庭は野邊とも成りにけるかな

松の下紅葉したるを

露霜に終に枯れせぬ松なれど下葉は秋に忍びざりけり

來栖野にて、水と云ふ題を

年經とも契れる水は變らじを人の心や如何がとぞ思ふ

故殿〔賴忠〕亡せさせ給うて後、放ちたる鈴虫の聞えて侍りければ

如何でかは音の絶えざらん鈴虫の憂き世に經〔振〕るは苦しきものを

「南の岡の鈴虫」と云ふ事を人に詠ませ給うけるに

萬づ代の秋を籠めたる宿なれば尋ねて澄める鈴虫の聲

鈴虫の年を經て鳴くに

年經ぬる秋にも飽かず鈴虫の舊〔振〕り行くままに聲の勝れば

女御〔諟子〕にや有りけん

尋ね來る人も有らなん年を經て我が故里の鈴虫の聲

女御の方「諟子」男女と方分きて歌合せさせ給ふに、負けて愁へたりける。とものり

露深き色に勝れる花の枝を如何に定めし野分なりけん

返し

露を重み折れ伏しにける花の枝は托言を風に課せざらなん

嵯峨野を過ぎ給ふとて

秋だにもまだ行き果てぬ路なれど惜みし人ぞ先づ過ぎにける

中宮の御前に前栽植ゑさせ給ふ日、「秋の花を植う」と云ふ題を

松虫の音を尋ねてや掘りつらん長閑けく見ゆる秋の花かな

北白河に人人參うで逢はんと聞えたりける日、雨降りて留まりにければ、有國が聞えたりける

雨を無みふり「降」はへ思ふ山里につらくも雲の隔てけるかな

返し

白河の河邊に立てるをみなへし今日の雨にや身を絞るらん

大殿「道長」の御許にて、秋の日遊び暮して

秋の夜は水こそ殊に勝るらし月と露との洩るに任せて

花山院より名も知らぬ花を賜はせて「花山天皇」

秋毎に咲くとは見れど此花の名を知る人の更に無きかな

御返し

君が代に咲くとは聞けど見も知らず是れや言葉の花と云ふらん

月の雲隠れけるを

澄むとても幾夜も澄まじ世の中に曇りがちなる秋の夜の月

題覺えず

秋の野の花の露とも知らざりつ千草の色に置ける白玉

鈴虫の題に

年毎に常珍ふなる鈴虫の舊〔振〕りても舊〔振〕りぬ聲ぞ聞ゆる

八月十五夜、月を覽給ひけるに、女房の目覺ましたりけるに〔女房某〕

君ならで誰か見知らん月影の傾ぶく小夜の深さ哀れを

とて獨り言つに

深く知ることは無けれど月かげを同じ心に哀れとぞ見る

詩など作り給うける夜の

答〔闕雲〕晴れて遲くも月の過ぐるかないとど眺むる數や増さらん

八月十五夜

一年(ひととせ)の秋の半は殘れれど月は今宵ぞ限りなりける

大殿〔道長〕より

我宿の汀(みぎは)に待ちし秋風は半に好(よ)くも過ぎにけるかな

御返し

夜と共に澄める汀(みぎは)の秋風は告ぐるしるしも見えずも有るかな

大殿の、また所所におはせし時、人人具して紅葉見に歩(あり)き給ひしに、嵯峨の瀧殿(たきどの)にて

瀧の音は絶えて久しく成りぬれど名こそ流れて猶聞えけれ

殿に歸り給ひて

山邊より野邊も殘さず尋ね來て泊(とま)りも著(しる)き宿のもみぢ葉

白河に紅葉見に、大殿〔道長〕の男(をのこ)ども行(い)きたるに、見つと云ふ人の許に遣りける

主(ぬし)知らで誰か折りけん山の物とも物と思ふ紅葉を

返し〔某〕

何處(いづこ)とも定めで過ぎし路なれど秋の泊(とま)りに我は來にけり

「菊の花濃(こま)やかにて秋を知りぬ」と云ふ題を

我袖に比へて見れば菊の花深きにしより（モトノママ）露の繁きは

有國が住まぬ家にて、九月九日

住む人も無き山里に菊の花秋のみ咲きて唯だに過ぎぬる

返し、有國

住む人の匂ひ戀ふらん菊の花また變ろはぬ事をこそ思へ

また水の邊の菊

秋深き汀の菊の映〔變〕ろへば浪の花さへ色勝りけり

圓融院の、石山におはしますに、殿上人、浮橋と云ふ所に行きて歸るとて

我れだにも歸る路には物憂きに如何で過ぎぬる秋にか有るらん

爲頼

田上や山のもみぢ葉繁し有れば秋は追ふとも長閑けきを見よ

秋果つる日、山路行く

打群れて散るもみぢ葉を尋ぬれば山路よりこそ秋は行きけれ

九月盡くる日、庚申なるに

月に見えで行く秋なれや夜もすがら睡も寢で何を守るなるらん

九月卅日、初雪降るに

梅が枝に降る初雪を今朝見れば春秋と咲く花にぞ有りける

女御〔諟子〕御返し

花かとも雪ともいさや何事も物憂き秋は知られざりけり

九月晦日の日、「秋の影は雨の中に還きぬ」と云ふを

何方に秋は行くらん我宿に今宵ばかりは雨宿りせで

九月二つ有る年の十月朔日の日、兼澄が女の許に、霧のいみじう立ち塞がりけるに

常よりも程経て過ぐる秋なれど猶立ち留まれ今朝の朝霧

返し〔兼澄ノ女〕

置き換る霜に紛れて立つ霧は久しき秋の例なりけり

「山里に行きて籬の菊翫し」と云ふ事を

いろいろに籬の菊は成りにけり唯だ一枝の霜と見し間に

「月前の白菊」と云ふ事を人人詠みしに

おぼつかな花は有りやは月影に置く霜とのみ見ゆる白菊

或人

のどかなる月に任せて我は唯だ霜をぞ拂ふ宿の白菊

法輪に詣で給ふ月、嵐山にて

朝ぼらけ嵐の山の寒ければ散るもみぢ葉を〔此句、拾遺集、紅葉の錦〕着ぬ人ぞ無き

十月朔日、殿上人、大井に行きたるに

落ち積る紅葉を見れば大井河井堰に留まる秋にぞ有りける

石の中なる菊の唯だ一本殘りたるを

岩間より生ふるに著き菊なれば尋常の花は霜に枯れにき

長谷に入り給ひて後、中納言〔定頼〕の參り給ひて、歸り給ふとて、長谷より

見捨てては歸るべしやは風止まぬ峰の紅葉の長閑けからぬを

御返し〔定頼〕

嵐吹く峰の紅葉を見ぬ時も心は常に留めてぞ來る

八月十五夜のいみじう明かりしに、たやしの君の女の遠き所に行くべ〔し脱カ〕と聞き給ひて

曇り無き後の今宵の月を見ば山邊の秋を忘れ果てめや

長谷に、紅の岡と云ふは、例の草木にも有らず、人の名も知らぬ木どもの林にて有るが、いみじうめでたう紅葉するなりけり。やしほの岡と附け給へりけるが、紅葉のいとめでたき頃、中納言〔定頼〕の

御許より

思ひ消る心だに行くもみぢ葉を見せで散らすな木枯しの風

返し

名に高き嶺の嵐は寒からし紅葉の錦見にし来たらば

三井寺に、入道の中將〔藤原成信〕、紅葉見に參うで給ひて、歸るさに、松が崎のこうきう阿闍梨の許に寄り給ひたりけるに、聞え給うける〔入道中將〕

見初めては疾く歸らめや紅の八汐の嶺のもみぢ葉の色

主人の阿闍梨に〔返しを〕譲り給うければ〔阿闍梨〕

もみぢ葉に留めし心は松の葉の綠と共に變る世も有らじ

また是れより

落つる葉の常ならぬ世に如何でかは松の綠に心留〔深染〕むらん

阿闍梨

君が代を長谷の松露の世に心を掛くる梢なればぞ

是れより

松の雪消え返りつつ君が爲め千年を經ても我は仕へん

音に聞く越の白嶺は白山の雪積りての名にこそ有りけれ

「夜寒にして山の雪を知る」と云ふを

さ夜寒み山邊の雪を待つとては思ふ心を人や知るらん

雪降る日、飯室の入道の中將に

君が住處を思ひ遣るかな

返し

君をのみ〔見〕山隱れに降る雪を心長くぞ先づ尋ねける

清昭阿闍梨の、山より添れたる

外山なる正木の葛如何なれば時雨や降ると問ふ人の無き

返し

山寒み雪先づ積る宿の上を白雲添ふる住處とや見る

返し〔清昭〕

奥山を知らず顔にて年經〔降〕れば心の中は時雨のみして

また

雪降らぬ伊過尾〔尾ハ毛ノ誤寫ニテ、三字家もカ〕心の深ければ峰の嵐を忘れやはする

禪林寺の僧正に、雪の消えぬる上に霜の置きたる早旦

雪の上に置く初霜の世の中は何れ朝日の消え殘るべき

返し〔僧正〕

人の世のはかなき程に比ぶれば雪しも〔霜〕先づは消えじとぞ思ふ

雪降りたる早旦

同じくぞ雪は積らんと思へども君が故里は先づぞ問はるる

返し〔僧正〕

白雪は閒、音の甍に掛かりてぞ降り來る宿も春ごこちする

ゆきよりが曹子に、雪の山を造りたるに、物に書きて挿させ給ひける

音に聞く越の白山しら雪の降り積りての言にぞ有りける

返し、兼資が女

降り積る雪をのみ見る白山の今日は甲斐ある心地こそすれ

久しう里なる頃、雪の山造り給うたりと聞きて奉りける〔女房某〕

おぼつかな今も昔も音に唯だ名をのみぞ聞く越の白山

返し

白山を外に思はば我宿を今は越〔来じ〕とや思ひ成りぬる

雪の、年復りて降りたるに、内の大殿へ上〔へ上ハの上へノ誤ナラン、教通ノ妻ヘ贈レルコトハ拾遺集ニテ明カナリ〕

降る雪は年と共にぞ積りける何れか深く〔此句、拾遺、何れは高く〕成り増さるらん

御返し〔教通ノ妻〕

雪積る君が年をも数へつつ君が若菜を摘まんとぞ思ふ

尼上〔公任ノ妻〕の〔にノ誤カ〕聞え給うける

積るとも雪と共たる年ならばかへるがへるも君に引かれん

女御殿〔諟子〕に聞え給ふとて

消え易き名になる齢へぞ年を積む頭の雪は高く成るとも

長谷に出家し給うておはしまし始めたる年、雪深き日、同じ女御の御許より〔諟子〕

思ひ遣る心ばかりは奥山の深き雪にも障らざりけり

御返し

〔原本ニ歌ヲ闕ケリ〕

早く来栖野と云ふ所におはしたりけるに、友待つ雪を見給ひて

山里にさきさへ友を待ちければ野風を寒み尋ね来にけり

中務の宮〔具平親王〕に、八重菊植ゑ給うて、詩作り音樂し給ひける

おしなべて開くる菊は八重八重の花の下にぞ見え渡りける

宮〔具平親王〕

閨の上の霜と起〔置〕き居て朝な朝な偏に家の花をこそ思へ

春宮にて、物など聞えける人、位に即かせ給ひて後、「忘れ給ひにたるか」と聞えたりければ

九重の内は隔れど御垣守同じ思ひぞ今も焼くらし

同じ春の初めつ方〔女房某〕

鶯の聲を待つとは無けれども春のしるしに何を聞かまし

と聞えたりければ

鶯は鳴けどしるしも無きものを憂き今年より先づ増さりける〔りカ〕

或人、團扇の繪に焦尾琴と云ふ事詠ませ給うけるに

きりふ山吹く木枯にこがれたる緒よりぞ聲は知るべかりける

冬の初めつ方、上達部、殿上人、「大井に遊ぶ」と云ふ事を

流れ行く紅葉を〔以上、風雅集、落ち積るもみぢ葉〕見ればナ井河ゐせきに留まる秋にぞ有りける

女の許に

冬寒み何時も氷れる衣手を今朝は解けても變らざりけり

小野の宮の中納言殿［實資］、染殿の御思ひにて、秋果て方に聞え給うける

白河の紅葉を見てや慰まん世に故［經］里は甲斐無かりけり

と聞え給へりければ

常ならぬ思ひや何か慰まん山邊はいと木の葉散りつつ

或女に

白山に年經［降］る雪や增さるらん夜半に片敷く袂冴ゆなり

曉の明りの夜、女の許に人の來合ひたれば

小忌衣摺り捨てて着つる露けさは春の日すがら又ぞ忘れぬ

新羅の琉球の嶋人來て、此國の人の云ふ事も聞き知らずと聞かせ給ひて、返りごと聞えざりける人に

おぼつかな琉球の嶋の人なれや我が恨むるを知らず顏なる

返し、女某一

遙かなるその島人の言の葉を散るとは見けん風の便りに

樵に人人おはせしに、その邊なる女に遣はしける

尋ね來る人の心も知らぬには山邊をのみや眺め暮さん

　思ひ病みにける人の許より　女某一

嵐吹く外山の紅葉多來れば今は詞の葉絶え果てぬらん

　と有りければ

瀧瀬の峰の嵐に言問はん何れの方か色は變れる

　同じ人に有るやう有りて

木の下を我れ嬉しくぞ頼みける葉蔭の間からこそ雨も漏りけれ

　故大臣〔賴忠〕の御思ひにて、其程はおはせざりけるを、程過ぎて遣はしける

燃ゆれども知る人無きは年積る思ひの中の思ひなりけり

　物云ひける人の、また人に名立ちける頃、秋つ方云ひ遣り給ひける

變り行く人の心を見ざりせば何に付けてか秋を知らまし

　ゆきより、御迎ひに參りて、斯う斯う云ふ所の有りけるとて、其頃すけただと諸共に詠みて、劣り勝り論じける。ゆきより

秋も今は嵐の山の山高み如何で殘れる紅葉なるらん

　冬つ方、麗景殿の細殿に物など云ひける程に、藏人これすけ、唐物の使にて下る、まかり申しせんとて、

御物忌に籠る日、明けての年、位階賜はるべければ、やがて上にも候ふまじき由云ひければ

西へ行く月の常より惜しきかな雲の上をし別ると思へば

これすけ

別れ路は世の常なれやなかなかに年の復「歸」らんことをこそ思へ

題數多して歌詠みけるに、水鳥

霜置かぬ袖だに冴ゆる冬の夜に鴨の上毛を思ひこそ遣れ

縫ふ人も無き水鳥の毛ごろもは閉づ「綴」る氷に任せてぞ見る

ゆきより

冬の池の氷り行くらん水鳥の夜深く騒ぐ聲聞ゆなり

女の許に

人知れず祕む思ひ「樋」の餘る時漏ると云ふは涙なりけり

彦度守返り事聞えざりければ

雪止まぬ奥山里の路なれや昨日も今日も跡の見えねば

陸奥の國の守實方下るに、下鞍遣るとて

東路の木の下鞍「暗」に見え行くは都の月を戀ひざらめやは

返し〔實方〕

言傳てん都の方に行くべきに木の下暗〔此の下戦〕にいとど惑ふと

有國の大貳の筑紫に下るに

別れより増さりて惜しき命かな君に二たび逢はんと思へば

世の中騒がしかりける年、常に有りける人多く亡くなりて後、神無月の朔日方に白河に渡り給ふに、紅葉の一本殘れるに付けて、常に詩作り歌など詠みける源中納言など思ひ出でられて、いと哀れに覺え給ひければ

今日來ずは見でや止ままし山里の紅葉も人も常ならぬ世に

又の年、法性寺の御八講の日、侍賢

世の中に有らましかばと思ふ人無きが多くも成りにけるかな

或女に

白山に年經〔降〕る雪や増さるらん夜半に片敷く衣冴ゆなり〔重出ス。前ニハ五句袂冴ゆなりトアリ〕

人の許に、越の方なる官ある人の通ふと云はれける頃

悔しくぞ春を待ちける雪降れど通ひ易きは心たりけり

返し〔某〕

思ひ遣る漢土［唐］ばかり聞くものを行き通ふ名の空に散るらん

また遣はす

もろこしも夢見ん程や遠からん此は寄る［夜］方の路とこそ聞け

水の邊の菊

秋深み汀の菊の變ろへば浪の花さへ變ろひにけり

なりともの右馬の頭

秋深み霧立ちわたる朝な朝な雲の森たる君をこそ思へ

女院［詮子］の四十の賀に、大將殿［道長］のし給ひける杯取りて

君が代に今幾度か斯くしつつ嬉しき折に逢はんとすらん

女院［詮子］崩せ給ひて、又の年二月初子の日、女房の許に

誰にとか松をも引かん鶯の初音［初子］甲斐無き今日にも有るかな

成信の中將、出家して、翌日、左大辨行成の、世のはかなき事聞え給へりけるに

思ひ知る人も有りける世の中に何時を何時とて過ぐすなるらん

雪降るに、入道成信の中將の許に

降れば先づ君が住處を思ふかな雪は山邊のしるしなりけり

去年の六月に「女院詮子」崩せ給ひて、師走の果てつ方に、入道「成信」

露の身の思ひに堪へで消えにせば問ふ言の葉も聞かずや有らまし

返し

夢とのみ歎きし程に明け暮れて問はぬ現に見えやしぬらん

白河におはせんと有りける、雨の降りければ、思し滑りて

白河の花をぞ思ふ雨降れば唯だにも有らで色や増さらん

人の御女を聞え給ひけるに、内裏に参るべしと有りければ

一度に思ひ知り「二字、詞花集、絶え」にし世の中を如何がはすべき賤の緒環

小忌にさされ給ひて、のぶかたの中将の服なるに、赤紐借りに遣はしたりければ　「のぶかた」

雲の上の光も如何が遠ければ猶干し難し墨染の袖

返し

晴れずのみ時雨るる方を眺むれば光も曇るものにぞ有りける

「山里の初秋」と云ふ題を

何処にも秋は来ぬれど山里の松吹く風は殊にぞ有りける

周防守とよみつの朝臣の家に、暫しおはしけるを、三月十餘日、花のいみじう面白う咲きたる程に、ま

たゞ外に渡り給ふとて

あだなりと思ひな果てそまだ散らぬ花より前に變ろひぬとて

御返し〔とよみつ〕

疎かにも思はぬものを今年より人に飽かるる名を散らすかな

秋の暮つ方、母上の御許に參り給うけるに、日頃も惱ませ給ひて、いと弱げに成らせ給へれば、女御殿に聞えさせ給ひける

風止まぬ秋の林にもみぢ葉の色は如何にと見るぞ悲しき

八月二十八日、桂殿に右の大殿〔道長〕の北の方〔倫子〕などおはして、稻刈らせて見給ひけるに

千世を經て刈り積む宿の稻なれば多くの年を當る君かな

山里の紅葉は時は分かぬかな秋の半に色深く見ゆ

とや云はましと思ひて、懷紙に書きて持たせけるを、大殿〔道長〕の御一つ車にて、落し給へりければ、歸り給ひて、又の早朝、「斯くや云はましとなん覺えし」とて聞え給へりける

山里にまだき散りける言の葉を宿の主人や書き留めけん

正月十餘日、按察の大納言〔に脱カ〕聞え給ふる

白栲に雪の降れれば水鳥の青葉の山も有らじとぞ思ふ

祭の使に出づる内侍の御車に聞えたりける

葵草心に掛けて思ひ遣る己が車をさしは任せん

中宮〔藤原彰子〕の御産屋の五日の夜

秋の月影のどけくも〔五字、玉葉集、のどかにも〕見ゆるかな此や長き世の契りなるらん

圓融院崩れさせ給ひての春の、世の中服なる頃、徒然なりければ、歌詠みける

春雨

草も木も色づき渡る春雨に朽ちのみ増さる藤の衣手

鶯

常ならぬ音にぞ聞ゆる山里の山邊に來鳴く鶯のこゑ

若菜

此春は誰が爲めにかは水も汲み野邊の若菜も摘まんとぞ思ふ

霞

戀ひ侘びて君が邊りに尋ぬれば野邊の霞を哀れとぞ見る

歸る雁

思ひ知る人も無き世に羨まし憂き世を捨てて歸る雁がね

柳

墨染の櫻ならずは青柳(あをやぎ)の綠の袖を掛けて見てまし

散る花

花だにもはかなく散るは憂きものを數ならぬ身の賴み難さよ

春の田

春の田をなぞ〔二字猶カ〕打ち返し悲しきは賴み少なき我身なりけり

戀

さまざまに思ひしよりは世の中に絕えぬは君を思ふなりけり

父ノ大臣(おとど)〔賴忠〕亡せ給うての頃、薫香(たきもの)人の乞ひたる、遣はすとて

花だにも散りつる宿の垣秀(かきほ)〔イ垣根〕には春の名殘も少なかりけり

三月晦日(つごもり)、〔父ノ大臣の〕服(ぶく)におはする頃

別れにし影さへ遠く成り行けば常より惜しき年の春かな

御妹(おんいもうと)の女御〔諟子〕

春知らぬ宿には花も無きものを何かは過ぐるしるしなるらん

四月、服(ぶく)なれば、衣更(ころもがへ)もし給はで

墨染の衣ながらの今日なれど變れるものは昔なりけり

服脱ぎ給ふとて

墨染の衣に添へて流せども盡きせぬものは涙なりけり

東山の邊りに、人人紅葉見に行きて

色深き峰の紅葉を尋ぬれば山路よりこそ秋は行きけれ

一の宮の御乳母みぶに物語給ひけるを、また外の人語らふと聞き給ふ頃、物云はんと云はせ給うければ、湯に下りてと云はせたりければ

哀れとも猶清しとも思ほえず人は有馬の湯とし聞かねば

返し〔一の宮の御乳母〕

杣山に下ろす筏も有るものを湯のみや浴むと人の云ふらん

序品

くさぐさに散り交ふ花は古の風に任せて降るにぞ有りける

方便品

一言に由りてぞ世世に出でければ二つも三つも無き名なりけり

譬喩品

門出には三つの車と聞きしかど果ては思ひ［火］の外にぞ有りける

信解品

流離へし昔は親と知らざりき何時を任する今日の嬉しさ

藥草喩品

一つ雨に潤ふ諸木は異なれど終には本に歸らざらめや

授記品

改めて深き心を悟りぬるしるしを今日は得るにぞ有りける

化城喩品

古の契りも甲斐や無からまし安めし道に勸めざりせば

五百弟子品

來て臥して常醉ひなれば衣手に掛かる玉とも覺めてこそ見れ

人記品

二ながら三世の契の有りければ行末かねて結ふにぞ有りける

法師品

法說かん御室も外に無かりけり唯だ心をぞ澄ますべらなる

見寶塔品

そのかみの契絶えねば幾世とも知らぬ後を常に見るかな

提婆品

皆人を佛の道に入れつれば佛の德を傳へたりけり

障り多み浪を分け來し身を更へて蓮の上に居るとこそ見れ

勸持品

さまざまに憂き世の中を忍びつゝ命に代へて法を說くらん

安樂行品

世を背く嫌も心を修めつつ誓ひて末の法を弘めん

涌出品

たらちねは親よりこそは老いにけれ年わかがなる人も偽つべし

壽量品

出で入ると人には見れども世と共に鷲の峯なる月は長閑けし

分別功德品

聞くままに皆人道をます「搭」鏡行末までも著らしつるかな

隨喜功德品

傳へつゝあな尊とも云ふ人のその一言に如く事ぞ無き

法師功德品

法の雨に皆がら淸め盡しては障りの外に何か尋ねん

不輕品

うちのべもさても種をし植ゑつれば終に御法「實り」の容しからぬを

神力品

珍しく述ぶる舌にて御法をば眞の中の眞を「とか」ぞ知る

囑累品

頂を猶數々ぞかき撫づる得難き法のうしろめたさに

藥王品

明らかに照す程こそ(モトノママ)見ゆるかな身をば惜まで法を思へば

妙音品

法の爲め來ぬと見れども身を分けて至らぬ方は有らじとぞ思ふ

普門品

世を救ふ中には誰か入らざらん普き門を人し鎖さねば

陀羅尼品

限り無き法の力に說き添ふる守りはいとど賴もしきかな

妙莊嚴王品

闇にのみ迷ひ來つれば契りてし友ぞ導く知るべなりける

普賢品

尋ね來る契し有れば行末も流れて法の水は絕えせじ

是れは、書き給へりける奧に

法讃むる言聞えねど靜かなる光の中は照さざらめや

維摩の十の喩、此身泡の如し

ここに消え彼處に結ぶ水の泡の浮世に住める身にこそ有りけれ

此身水の月の如し

水の上に宿れる夜半の月影の澄み「住」濯ぐべくも有らぬ我身を

此身陽炎の如し

夏の日の照らしも果てぬかげろふの有るか無きかの身とは知らずや

此身芭蕉葉の如し

風吹けば先づ破れぬる草の葉に比ふるからに袖ぞ露けき

此身幻の如し

この身をば暫も留めぬ幻の世に有るものと思ふべしやは

此身夢の如し

常ならぬ此身に夢の同じくは覚からぬ事を見る由もがな

此身影の如し

世の中に我が有るものと思ひしは鏡の中の影にぞ有りける

此身響の如し

有りと聞く程に聞えず成りぬれば身は響にも勝らざりけり

此身行く雲の如し

定め無き身は浮雲に譬へつつ果ては其れにぞ成り果てぬべき

此身電の如し

いなづまの照らす程には入る氣息の出づる待つ間も異らざりけり

中宮「彰子」の、内裏に参り給ふ御屏風歌、人の家近く松、梅の花など有り、御簾の前に笛吹く人

梅の花匂ふ邊りの笛の音は吹く風よりも恨めしきかな

宰相中將入れり。齊信（宰相中將ノ注ニ齊信ト書ケリ。是レハ齊信ノ歌ナリ）

笛竹の夜の節の深き聲ぞ聞ゆなる峰の松風吹きや添ふらん

中宮の弟子の内裏に參り給ふ御屏風に、かの濱づらなる人の家の門に、人来たり、人出で逢ひたり

昔見し人をや有ると尋ねては世に經る事を古言を試はんとぞ思ふ

我門に立ち寄る人は清近み浪こそ路の知るべなりけれ

翁の、鶴飼ひたる所

雛鶴を巣立てし程に老いにけり雲居の程を思ひこそ遣れ

花山院の御入れり（花山天皇ノ御製ナリ）

ひな鶴を養ひ立てて松原の陰に住ません事をしぞ思ふ

山づらに煙立つ家あり。野に雉ども有り。路行く人、立ち留まりて見たり

煙立ち雉子しげ鳴く山里の尋ぬる妹が家居なりせば

人の家に花の木ども有り。女、硯に向ひて居たり

行く人に告げや遣らまし我宿の花は今こそ盛りなりけれ

人の家に、松に掛かれる藤を見る

紫の雲とぞ見ゆる藤の花如何なる宿のしるしなるらん

女院「詮子」の四十の御賀の屏風の歌、若しやとて承はりけれど、然も有らざり。花ある所

春立ちて咲く花見れば行末の月日多くも思ほゆるかな

松の多かる所にて、六月、祓したる所

祓する河邊の松も今日よりは千世を八千世に述べやしつらん

姫松の繁き所に尋ね來て夏祓する心あるらし

七月七日、女、男に物云ひたる氣色したる所

我戀は織女つ女に借しつれど猶尋常ならぬ心地こそすれ

花山院の書かせ給へる紙繪に、歌附けて賜はりたりけるに、人人然るべき所は附け果てて無かりければ、

人の鶴飼ひて書廣げて居たる所

鶴ならぬ友は無けれど文見れば昔の人に逢ふ心地する

人の顔を隠して怪しき事したる所に、大路にて

我顔はつゆ洩らさじと思ふとも鼻氣ぞ甚く紅葉しぬべき

昔物語に、長びたる寡婦眺めて居たる所

眺むれど蟲には「ぬカ」月の哀まし如何で憂き世を出でて住「澄」むらん

「取りあつめてぞ」と詠める歌

安からぬ下に思ひも消えぬらしまゝ取り敢へず氷り行くには

「涙は深きこそ」と云へる女の所

如何ばかり我が身に花の露ならん置きてしもいと哀れとぞ思ふ

返し

結び行く我が身も今や白露の與に置くと見えぬべし花の所は

是れも同じ事なるべし、男の心にも行かぬ事など云ひたる所に、女来て

打解けて寝もさりせば露の身の忍びに袖に絞りましやは

返しとて

理無きは心の外に置く露を袖の亂れに掛くるなりけり

是れも同じ樣の事

苦しきは人に語らじ夢路にて又も逢ふ夜の有らんと見るまで

返しとて

夢ばかり睡眠までのみ過ぐすには如何なる背にかくは逢ふべき

繪に、梅の木に鶯の鳴きて、簀子に寄掛て男ある所に、簾の中にて

鶯の聲にか君が來居つるを且つ打出でん梅が枝の聲

春、田舍家に宿りしたる隱に、客人の來て

青柳の片糸に縒り出でけれどさしてぞ着て來つる梅の花笠

女のと思しくてぞ、女御「諟子」の御

花笠をさして着て來つれどさくに人春の山邊の便りとぞ見る

花山院の、御歌合のやうなる事せさせ給ひけるに、月を、御、〔花山天皇〕

秋の夜の月に心のあくがれて雲居に物を思ふ頃かな

何時も見る月ぞと思ふに秋の夜は如何なる影を添ふるなるらん

雁、これしげ

我が夫子が旅寢の衣うち〔打〕はへて待つ雁がねは今も鳴かなん

たかた、高田かにて

吾妹子が掛けて待つらん玉章を書き續けたる雁がねの聲

梅、殿上の歌合に、雪を

梅が枝に降り敷く雪は一年に二度咲ける花とこそ思へ

大殿、道長、石山に籠り給ひて、題どもして歌合し給ひにけるに、題を詠みて有りけるに、

峰の上の杜鵑

山邊だに寢難きものをほとゝぎす都の人は待ちやかぬらん

水の邊の螢

水の上に燃ゆる螢にこと問はん浮き心の中は燃えずや

山里の卯の花

卯の花の散らぬ垣根は山里の木の下闇は有らじとぞ思ふ

草の庵の橘

蓬生の繁き宿には橘の香を尋ねてぞ訪ふべかりける

暮れ難き夏の日

暮れ難き今日にて知りぬ石山の山の巖を祈る驗は

影少なき待つ月

忘れても有るべきものをなかなかに雲間少なき月をこそ思へ

斯くて來れたれば　道長

五月雨は眺むる程のみづぐきに君が言の葉見るぞ嬉しき

返し

青の葉を見るに袂の濡るるかな軒の玉水数も知られず

　中将におはしけるを、冬の夜蕭蕭しとて、歌合のやうなる事し給うけるに

もみぢ葉は雨と降れども客晴れて袖より外は濡れずぞ有りける

　臨時の祭の使して歸りたるに、船に、すけあきら

石清水かざしの藤の打たびき君にぞ神も心寄せける

　返し

水の上こゝろは知らず石清水浪の織り来し藤にやは有らぬ

　同じ折に、ながふる

石清水昨日の藤の花を見て神の心も汲みて知りにき

　五節の帳臺の夜、中宮の御方に上達部、殿上人參りて

九重の雲の上人打群れて来れど日影は「□□□」さりける

　右大辨、中務の宮「具平親王」に參り逢はんと云ひて、見えず成りにければ

秋の日を眺め暮せる夕暮は月待つ宵に劣らざりけり

　同じ宮に參り給ひたる、人に契り給ひたりける事ありければ、心もとなくて、まだ出で給はぬに出で給ひにければ、翌旦「具平親王」

恨めしく曇りけるかた月夜には來ぬ人をだに待つとこそ聞け

御返し

夜を寒み月夜好しとも告げざりし宿も過ぎ憂く思ひしものを

亦月ばかり、同じ宮に參り給ひて、「此の程過ぐしてこそ參らんに」と申し給ひて、秋に成りければ、宮〔具平親王〕より

五月雨を過ぐすに程〔に程ハ程にか〕と頼めし秋の風こそ先づは來にけれ

御返し

變ろはで行末遠き松の枝は初秋風を何とかは聞く

内藏頭、薫香乞ひしを、梅に附けて遣はし給ふとて

降る雪に紛ふばかりぞ梅の花折れば匂ひぞ留まらざりけり

返し〔内藏頭〕

なつかしき袂に掛かる梅が香を風に知られぬ事をしぞ思ふ

庭掃ふ、簾子の引き切られたるを見て、ながふる

好色者を花の邊りに寄せざらば此の床夏に塵一つ絶えましやは

宮〔遵子〕の女房、すけの君といふ人、

主無き花の名立てに思ふらん誰好色者の縁、根、知り顔なる
と云ひて後、ながふる久しう見えざりければ遣りける
如何にぞや名告りし人も離［枯］れぬれば過ぎにし花の折ぞ戀しき
返し［ながふる］
當麻に思ひし出でば今よりは花の時なる身とや成りなん
清閑阿闍梨、夏の初めに聞えたりける［清昭
白雪の深く積ると見し程に夏の緑に成りにけるかな
返し
雪消えて花さへ散りぬ斯くしつつ常無き世をや唯だに過ぐさん
また阿闍梨、返し
を止みせず流れて落つるみな［行つ］の里［行川］月日の過ぐる何処なるらん
返し
行く方も知らずと思ひし年月に我身に積る罪にぞ有りける
また
若かりし昔年月のどけくて罪の深さは疾くぞ消えぬる

女院［詮子］にて、槿［朝顔］を見給ひて

明日知らぬ露の世に經［降］る人にだに猶はかなしと見ゆる朝顔

道信の中將

朝顔を何はかなしと思ひけん人をも花は然こそ見るらめ

同じ中將［道信］の笄の、枕箱に有なる、返し遣り給ふとて

髪搔［笄］を返す返すも見る時ぞ色好みとは著く見えける

また返し［道信］

おしなべて紅づる時は神垣の榊葉さへや著く見ゆらん

また返し

もみぢ葉は時に變るを榊葉の常なる色に如何で成りけん

返し［道信］

時たらで世に經る人はもみぢ葉の變り易な［かカ］る色は倣はず

法輪に爲基しぼう［新發知ナラン］詣で合ひて、音せで出でにける、翌旦

浪の世に逢ふこと難き龜山の浮木を唯だに返すべしやは

返し［爲基］

天の河跡を尋ぬる世なりせば逢ふこと易き浮木ならまし

　野分したる翌旦、ながふるが家の北に故入道殿〔兼家〕、南には故三條殿〔賴忠〕住ませ給ひけるに、大風の吹きければ奉れる〔ながふる〕

我宿は野分は吹かん隣より荒れ增さりたる心地こそすれ

　返し

隣より荒れ〔吾れ〕增されりと云ふなるは如何なる風か身をば吹くらん

　さねよしと云ふ人、久しう籠り居たりける頃、雪の降りける翌旦〔さねよし〕

いとどしく常ならぬ世を歎く身に逢ひ見ぬ程と過ぐすべしやは

　返し

心にも有らぬ路にや惑ふらん雪降〔積〕るまでは思はざりしを

　實方の少將、祭の使せしに、貝を花に入れたりし扇を遣り給ふとて

扇をば猶ゆかしとぞ思ひ來し今日は甲斐〔貝〕あるしるしなりけり

　返し〔實方〕

如何でかは甲斐〔貝〕の有りとは見えつらん袖の浦〔裏〕にも寄せじと思ふに

　宰相にえ成り給はざりける九月九日、爲元〔誰ナラン〕法師

世の中を聞く「菊」に袂の濡るるかな涙は外の物にぞ有りける

返し

後れ居て猶然り難き菊の花籬の下を訪ふや誰れぞや

また〔爲元法師〕

世の中を聞く「菊」には殊に思ふべし袖の露けさに經し世なりせば

返し

常ならぬ此世の花を見ざりせば露の心はつらくや有らまし

藏人これすけが拔擢に位階得べき頃、推をおこすとて〔これすけ〕

身を君に任せつるなり椎柴の變らん世まで頼もしきかな

返し

椎柴に染むる衣は變るとも此身「木の實」を外に思はざらなん

事の次でに、昔の事を云ひ出でて、ないけ(モトノマヽ)の命婦

思ひ出づる在りし昔の有明の月ながら世の變らざりせば

返し

忘られぬ其夜の月は舊りにしを新らしくのみ思ほゆるかな

また「ないけの命婦」

花や咲く有りしながらに鶯の然も新らしく思ほゆるかな

とて、鶯を櫻の枝に居ておこせたれば、其枝を宮のすけの許に遣り給ひたりければ「宮のすけ」

雲居なる櫻の枝を鶯の踏み堪へ「交絶」んとも思ふべしやは

返し

さくら花下枝を馴らす鶯の踏み違へたる春にや有るらん

曉月夜に、石山より出で給ふとて、關の彼方にて、「月の入らぬさきに歌一つ」と述給ひければ「某」

逢坂の關まで月は照さなん杉のむら立木暗かるらん

と云ひたれば

共に行く月無かりせば朝ぼらけ春の山路を誰に問はまし

景理が露菫の移し聞えたりける、遣り給ふとて

朝夕に常ならぬ世を歎く間に現「移」し心も無くなりにけり

返し「景理」

葉末より濃く染めてし色なれば世に褪けれども變色りやはする

月の明かりける夜、一品の宮に殿上人あまた參り給ふるに、口すさびに「松が浦島」と述給ひたりけるを

聞きて、内の人〔女房某〕

浪だにも寄せること難き松島を如何でか漁人の有り無しを知る

返し

浦浪の昔の跡の著ければ尋ねて来つる心有るらし

内〔女房某〕

如何でかは昔の跡を尋ぬらん賢しき人に無しとこそ聞け

また

賢しかる人も無ければ行末の跡に来つる松が浦島

御供の人の、「雨降りぬべし」と聞えければ

秋の夜の雨にも何か急ぐべき此頃経〔降〕ると思ひ成しつつ

返し〔某〕

雨ならではかたき答に経〔降〕る人は露にも濡るるものとこそ聞け

濡れて帰り給ふとて、それ〔二字誤脱カナラン〕より翌旦

逢はで来し袖の〔以上、新後拾遺、飽かで来し客の〕雫は秋の夜の月さへ曇る物にぞ有りける

返し　一品の宮の女房某〕

人は行き霧は籬に立ち留まり曇りながらぞ我は眺めし

其夜、諸共に物しける人に、「斯くなん有りし」と云ひ遣り給ひける次でに

憂き世には心少しも行きやらで身さへ留まらぬ跡な洩しそ

返し、齊信の少將

慰むる方だに有らば月影の澄〔住〕むべき世とは今のみや知る

道信の中將

世の中に有るか無きかぞ今は唯だ思ふ心を思ふども絶ん

露草の移しを、宮のすけの求めければ、「色惡ろきなん有る」と遣給へりけるを、取りに寄るとて〔宮のすけ〕

薄からん花を侘びてぞ思ひつる猶此處までも散らせ惜むな

返し

惜むべき程だにも無き花よりも先づ變色りぬる色にぞ有りける

まだ領り給ふ山寺におはして

今はとて入りなん後ぞ思ほゆる山路を深み訪ふ人も無し

返し〔某〕

留りても深き名残の花の色を袖に移して今日は見るかな

如何なる折にか

草の庵を誰れか尋ねん「清少納言ノ句ヲ口ズサミタルナリ」

と述給ひければ、蔵人たかただ

九重の花の都を置きながら

女御「謹子」の御方より、「徒然になん歎一つ」と聞え給へれば

何事も常ならぬ世の性なれば明け暮るるまで忘られにけり

御返し〔女御謹子〕

植ゑ置きし人無かりせば浅茅生を何に付けてか思ひ出でまし

殿上人、こむくう（モトノママ）の次でに、雲林院に行きて、院こそ「女ノ名ナラン」が在りけるを、哀れがりて、昔

を思ひ消る心を

住む人も昔に今は異なれど花見る寺に尋ねつるかな

道信の少將

年經れば變りや傷にし女郎花昔の秋も問ふべきものを

など云ひて歸るに、廣澤の池に月の映りたるを

さして行く柴刈り小船棹を甚み

　と云へば、しもつく「下野のカ」左衛門

先づ焦「潛」がるるは心なりけり

　春の暮れぬる事を云ふに、同じ人「左衛門」

春と共に行く船路にも思ふかな都の花は散り果てぬらん

　など云ふ程に、「三嶋江とは下をなん申す」と云ふを聞きて

思ひ知る憂き三「身」嶋江の水なれば行けども「行カ」行かれぬ心地こそすれ

　なかみつ

行き過ぎて此の三嶋江にいとどしく遠く離れん事をしぞ思ふ

　長柄の橋にて

橋柱無からば「長柄」ましかば流れての名をこそ聞かぬ跡を見ましや

　暗うなる程に、住吉に詣で着きぬ。松風、波の音、聞えしに違はずをかし。人人御幣の次いでに歌詠みて奉れと乞ひたれば、え聞かず。其夜は其邊りに留まりて、曉月夜に濱づらを行けば、云はん方無く面白し

斯くばかり歸るもの憂き住吉の岸には如何で浪の寄すらん

　他人の、え聞かねば詠かす。鵜の渚にて漁人の網引くに、魚ども乞ひて放たす。濱邊は何事もをかしき

に、漁人の鹽燒く、殊に見ゆ

藻鹽燒く煙りに慣るゝ漁人衣を數「立」ちて著「來」たるなるべし

少將「さねよし」

漁人の燒くなる藻鹽の立ち添へば雲の波こそ深く見えけれ

如何なる事を見けるにか、船君「公任」

隔て無き海邊を渡り行く時も人の心の隈は分かれず

日前の濱、松原の程にて、暫し休らひて、かささきより越えて、槻松を見れば、げに故無くはあらず、此處にてこそは暮さめと云ふ。其夜は拂ひに泊りて、曉に出でて、いと面白げなる所所見んとて、吉津邊に詣でんとて有るに、路おぼつかなしなど云ふ程に、神人達、たゞの時に仕うまつらんとて出で來たり。なりあひの松原より行けば、眞菰生ひ茂り、澤に駒あるにをかしう、緑の松、木隱中より白浪の立つまで見遣らる。やうやう御社に到る程、入江の邊りに漁人の家僅かにて、網ども干しなどしたるを、濱には異りてをかしう、御社に詣で着きて、御階塗り、所所繕ひて見れば、云ひ遁れん方無く面白くをかしきを、思ふ心あらん人に見せめなど思はれ、斯く思ふべし。其處の有樣、云はばなかなか劣りぬべし。斯かる所にて、なかなかに物も云はれぬものになん有りける。暫さに後ろの窟を見れば、當のいと頭にておはするを

漁人の乗りし「法」渡しけんしるしにや篠に跡を留め置きけん

少将「されよし」

漁人の住む濱の篠の傍にぞ浪の花をや折りて寄すらん

と云へば

彼の岸の遠きを知りて岩屋に御影を宿す水の月かな

和歌の浦ともはるかに、面白き様や、老いたる漁人を見て、少将「されよし」

年を経て和歌の浦なる漁人なれば「どか」老の浪にはなぞ濡れける

吹上の濱に到りぬ。風の砂を吹き上ぐれば、雪の積りくやうなり。げに名には違はぬ所たりけり。さだか山の方の前、人人など見え「わ験カ」たりて、いと面白し。駒を引き停めて休らへば、漁人の潮垂るるもいと哀れなり

物思ふに見れば忘るる濱風に住む漁人如何に潮を垂るらん

鳰海に詣で着きて、風の森と云ふ所に

(モトノママ)いとこへも花の盛りは徒なれど如何に散るらん吹く風の森

圓融院の下り居させ給ひての日、少貳の命婦と云ふ人、「哀れ」と云ふを聞きて

哀れ誰が唯だ我のみやは思ふべき萬づに歎く人も有る世に

冬の初めつ方、躬恒〔遊女ノ名カ〕、局本より、久しう御讀經に召されぬと聞えたりければ

霜早み變ろふ色には菊の花少女の袖も斯くこそは見め

返し〔躬恒〕

少女子が袖振る〔時〕霜のうちはへて擁ずる菊の心とを知れ

道信の中將、詠みたる歌ども書き集めたる、形に見んと云ひ遣るとて

斯くばかり綴ること無き世の中に形に住める跡にぞ有りける

返し〔道信〕

綴ること遠くなるとも形見たる跡は今來ん世にも忘れじ

尚侍の藝具、中宮のすけ

弓張の閑〔的〕居や如何で有りし其の人〔射〕方向は淺さかりけん

返し

片山に紛れて止みにしをかつかつ〔時鳥〕聞くと誰か定めし

小馬の内侍の琥珀聞えたりけるを、程經て秋立てる日遣り給へりければ、「何どてか今まで」と聞えたりければ

もみぢ葉の露の色なる玉なれば秋を待たでは如何か見すべき

返し「小馬ノ内侍」

秋深き海の底なる玉なれば露待つ程も起「置」きてこそ見め

官方の中將、參うでんと聞えて見えずなりにければ、また翌旦遣り給ひける旋頭歌

思ふどち寢てはかなくも明くる夜を

長しと云ふは人待つ時の名にこそ有りけれ

人の許に或事を遣給ひて

世の中は水に宿れる月なれや住「澄」み遂ぐべくも有らずも有るかな

頭「藏人頭」に成り給うて、内裏に參り給うて、花山院の御時、世に付かざる家を渡り給うければ、云ひ出だしたりける「某」

雲居こそ昔の空に有らねども思ひし事よ變らざりけり

返し

賴み來し月日は唯だに過ぎにしを如何なる空の露にか有るらん

人の、尼に成りたるに

哀れとも云はで思はん行末の蓮の上は思ひ出づやと

返し「尼」

問ふにだに置き所無き蓮葉の上まで掛かる露ぞ悲しき

　薫物合せて、上に置きて出で給ひにければ、少し留め給ひて、女御〔諟子〕の御

殘り無く成りぞしにける薫物の我れ獨り〔火執〕にし任せてしがな

　と有りければ

燻ゆるべき人に代りて夜もすがら此の殘りこそ下焦がれつつ〔れカ〕

　其殿の緒、返し聞ゆとて、みちなりの中將

秋霧のたな引く小野の山路には言の葉さへぞ無く成りける

　返し

言の葉の散る山の丘〔緒〕は秋風の過ぐるままにぞ驚かされける

　花山院下り居給ひての年の佛名に、散る花に寄して、宣耀殿の宣旨の許へ聞えたりける

程も無く覺めぬる夢の中なれど其世〔夜〕に似たる花の樣〔新古今、色〕かな

　返し〔宣旨〕

見し夢は〔新古今、を〕何れの世ぞと思ふ間に折を忘れぬ花の戀しさ

　又の年、同じ折、實方の中將

いにしへに變らぬ花の色なれば花の昔の昔戀しき

返し
昔見し花の年年似たれども同じからぬを思ひ知らたん
鎌倉「山城ノ地名」と云ふ所におはしたるに、無かりければ、忘れ草を採り給ふとて、寺に「斯く云へ」とて述給ひける
忘れ草刈り積む程に成りにけり跡も留めぬ鎌倉の山
返し
在り佗びて枯れにし宿の八重葎何處を指して君に告げけん
山里を初めて占む。賢
春霞程經て誰れか山里に憂き世の外を覓むるなるべし
入道の頭に遣ひ給ひて、翌朝に
雪深み山路も知らず惑ふ身は路行く人や有ると待つかな
返し〔入道の頭〕
昔人を外に聞くとも雪深み一つ山路に入らん端とて
春日に詣で給ひけるに、煙立つ山里を「是れなん高麗の里」と人の聞えければ
朝まだき棚ゐる雲と見えつるは高麗野の里の煙なりけり

卒都婆ある所を過ぎ給ひけるに、是れを題にて詠まんとて
おぼつかな其とは「卒都婆」見ながら石の上古き都は何れなるらん
山に淸き事をせさすとておはしけるに、徒らなりければ
今はとて入りなん時「千載集、後」ぞ思ほゆる山路を深み訪ふ人も無し
宮「遵子」の女房扁附かせ給ひしに、祭して附かせ給ひけるを、少將と云ふ人、「負けず」と抗爭ひければ
さし添へし春日の山の三笠山祭し人も如何が定めん
返し「少將」
三笠山分きてや君が祭りけんかねて祈らぬ人の爲めには
山におはしける頃、齊信の中將
世を憂しと遁ると聞けば我れはいとど是れより深く入りぬべきかな
返し
山よりも深き所を求むれば我心にも君は入らなん
九月十五日、宮「遵子」の御念佛初められける夜、音樂などせられて、月の朧ろなるに古き事など思ふ
心を、人人詠みけるに
いにしへを戀ふる淚に暗されて朧ろに見ゆる秋の夜の月

權辨〔行成カ〕

雲間より月の光や通ふらんさやかに澄める秋の夜の月

返し

蓮葉の露にも通ふ月なれば同じ心に澄める池水

是れを聞き給ひて、左ノ大殿〔道長〕より

また

君のみや昔を戀ふる外〔續拾遺、二字、共れ〕ながら我が見る月も同じ雲居を

今よりは〔二字、續拾遺、は唯だ〕君が御蔭を頼むかな雲隱れにし月を戀ひつつ

と聞え給ひたりければ〔道長〕

今よりは阿彌陀が峰の月影を千世の後まで頼むばかりぞ

女院〔詮子〕の住吉に詣でさせ給ふるに、式部卿の宮〔爲平親王〕の中將〔頼定〕の、内裏の御宣旨にて參り給ふるに付けて、左の大殿〔道長〕、大宮の大夫〔公任〕の御許に、小野の宮〔實資〕

都人在りやと問はば津の國の國府の邊りに侘ぶと答へよ

と聞えければ

誘はれぬ身こそ侘びつれ津の國の難波の浦を思ひ遣りつつ

御迎へに參り給ふ路にて、見給うて

尋ね來る心を知りて津の國の戀ふ〔國府〕とも人の告ぐるなりけり

なりともの馬頭、出家して、宇治院に住む頃、逢ひに行きて

秋深み霧立ちわたる朝な朝な雲の森なる君をこそ思へ

中務の宮聞き給うて〔具平親王〕

背きにし跡を如何でか尋ねまし霧も立ち添ふ雲の森には

と有れば

白雲に跡くらくら〔暗暗カ〕と行く影も訪ひもやすると思ひけるかな

御返し〔具平親王〕

諸共に契りし雲の住處には訪へとも誰れを賴むなるらん

また宮より〔具平親王〕

秋深き同じかざしの言の葉は山下露や洩らんとすらん

御返し

常ならず時雨るる空の言の葉は洩るとも露を何とかは思ふ

また

云ふにだに時雨れん空に徒然と眺め〔長雨〕の後は思ひこそ遣れ

同じ心を大殿〔道長〕に

世の中を花の匂ひに誘はれてはかなき世をば何頼むらん

返し〔道長〕

世の中の花を花とや思ふらん其のはかなさは知る人ぞ知る

御返し、花山院のとも〔花山天皇ノ御製ナリトモ云フト云フ意〕

後れぬと何思ふらんその花は時の到りて有るにやは有らぬ

御返し

その時を何れの時と知らぬ間は待つや常無き時や今來ん

左の大殿〔道長〕の、〔少將脱カ〕春日の使に出で立ち給ひて、又の日雪降りけるに、北殿より〔道長〕

若菜摘む春日の原に雪降れば心使を今日さへぞ遣る

御返し

身を摘みておぼつかなきは雪止まぬ春日の原の若菜なりけり

宇治殿の八講に

水底に沈める底の魚類を網に有らでも拯〔救〕ひつるかな

と有りけるに

宇治河の網に有らねど誰れはかは君に引かれて浮ばざるべき

景理が四位に成りて、袍申したりし、遣はすとて

同じごと衣は深く成りにけり心ぞ我に習ひやは為ぬ

道貞が陸奥國に下るに、妻の式部が遣りける歌を聞き給ひて

今更に霞隔つる白河の關を初めて尋ぬべしやは

笛吹の社を

笛吹の社の神は音に聞く遊び岡にや行き通ふらん

月の前の笛の音

月影に胡竹〔叶方來〕の聲や聞ゆなる寢りにし妹は待ちやかぬらん

寢待の月を

寢て待つと今宵の月を云ふなれば物思ふ人は見でや止みなん

三河ノ入道〔寂昭〕の唐に渡るとて、白河に下りけるに遣り給ひける

我宿に宿る門田の行末は旅寢毎にも忘れざらなん

返し〔寂昭〕

音に聞く黄河の水は復るとも白河の名を何時か忘れん

七月七日、〔三河入道が一船に乗るに遣り給うける

天の河後の今日だに遙けきを何時とも知らぬ我ぞ〔我ぞ、拾遺集、船出〕悲しき

たや寺の君の女どもの許に、白き紙に蟬を包みて蓮の花に插して遣り給うたりければ、蓮の花を造りて、此歌書きて蟬の中にさし入れて奉りたりける〔女某〕

何れをか長閑けき方に頼まし蓮の露と空蟬の世と

返し

蓮葉に浮ぶ露こそ頼まるれ何空蟬の世を歎くらん

また彼れより〔女某〕

蓮葉に浮ぶばかりの程なれや尋常頼まぬ玉の在處を

返し

契り有らば玉の在處も告げなたん此世の夢は疎く見ゆとも

殿上にて、琴彈き笛吹き遊び給うて、同じ如遊び給ひける人、殿上下りて參らぬに

笛の音は哀れ昔に似たれども逢ふこと無きは甲斐無かりけり

宇治より歸り給ふ日

心だに行き果てぬれば菰枕淀の〔夜殿〕渡りは近づきぬらん

人に後れて、世の中すさまじう思されける頃、白河におはして

白河の宿に憂き世を遁るれど沈める影は猶ぞ見えける

女御殿〔諟子〕より聞え給うける御返しに

言の葉をかき流しつつ白河の水の面を今日見つるかな

上〔公任ノ妻〕の、尼に成り給ひたりける頃

空蟬の世の常無きを知りながら厭ひ難きは我が涙かな

石清水ノ臨時ノ祭の使、殿の少將〔教通〕舞人にて渡り給ひけるに、大殿〔道長〕の物見給ひけるに聞え給うける

小忌人の夕〔木綿〕かた掛けて行く路を同じ心に誰れ眺むらん

返し〔道長〕

小忌衣袂に着つつ石清水心を並べて汲まずも有らなん

世すさまじうて籠り居給へる頃、大殿より、春の事なり〔道長〕

谷の戸を閉ぢや果てつる鶯の待つに聲せで春も過ぎぬる

御返し

行き變る春をも知らず花咲かぬみ山隱れの鶯の聲

同じ殿〔道長〕重く病ひ給うて、大殿〔道長〕に

數ふれば同じ齢の草なれや露に後れて先づぞ枯れぬる

同じ御年なりける

圓融院の御時にや、「宇都保」の涼、仲忠と何れ勝れると論じけるに、しのはしは(モトノママ)涼が方にや有りけん、女一の宮は仲忠が方におはしけるにや、何れを入るるなど有るに、「物な云ひそ」と仰せられければ、ともかくも云はでおはしけるを、云ひにおこせ給うければ

沖つ浪吹上の濱に家居して獨り涼しと思ふべしやは

權中納言、「筆に扇を換へて幾つばかりにか當るべき」と云ひたるを

數知らず扇ぐ風にも水莖の跡は流れて絶えんものかは

せぎみの少將、〔教通〕春日の使し給ひて、歸り給ふ日、いみじう霧の立ちたりければ、是れより大殿〔道長〕に

三笠山春日の原の朝霧に歸り立つらん今朝をこそ思へ

御返し〔道長〕

三笠山麓の霧をかき分けて秋を知るべに今や來ぬらん

左の大殿〔道長〕に詩作られけるに、見るべき事ありて、詩も還さて急ぎ歸り給へるに、彼の殿より、卽ち

恨めしや今宵ばかりの旅寢をば我宿に唯だ草枕せで

御返し〔道長〕

生ひし子ぞ世世に契れる吳竹の其徒臥〔節〕を恨むべしやは

少納言むねまさが法師に成りて志賀に在るに

さざ浪や志賀の濱〔打浦一風如何ばかり心の中は涼しかるらん

同じ人の許に久しう音もし給はざりければ〔むねまさ法師〕

奥山の木の下蔭に住む人は月さへ訪はぬものにぞ有りける

返し

奥山の木の下水の淸からば洩りても月の通はざらめや

淸少納言が月輪に歸り住む頃

在りつつも雲間に澄める月の輪を幾夜眺めて行き歸るらん

〔淸少納言が一返り事も聞えで、程經て愁ふ事ありて、御文を聞えて、「其事如何に」と聞えければ

何事も答へぬ如く習ひにし人と知る知る問ふや誰れぞも

返し〔淸少納言〕

たふ〔二字、答カ〕無きは苦しきものと習はして人の上をば思ひ知らなん

「とてなん」と有れば、黄なる菊に挿して

梔花の色に習ひて人言を聞く〔菊〕とも何か問はんとぞ思ふ

返し〔清少納言〕

押なべて菊としもこそ見えざらめ此は厭はしき方に咲けかし

さねよりが甲斐に有りけるに

東路に入りにし人を思ふ世に都ながらも消えぬべきかな

さねより

遙かなる雲居の程の一言は見るに時雨ぞ降り増さりける

左大将朝光、五節の舞姫奉りけるを見て遣はしける

天つ空豐の明りに見し人の猶おもかげの强ひて戀しき

齋院にて物申しける人、内裏邊りに參れる由聞きて、葵に書き附けて遣はしける

年經れど變らぬものはそのかみに祈り掛けてし葵〔逢ふ日〕なりけり

五月五日に遣はしける

ほととぎす何時か〔五日〕と待ちしあやめ草今日は如何なる音〔根〕にか鳴くべき

返し、馬ノ内侍

五月雨は空おぼれするほととぎす時に鳴く音は人も咎めず

寛仁二年正月、入道前太政大臣〔道長〕大饗し侍りけるに、屏風の繪に、山里に紅葉見る人來たる所

山里の紅葉見にとや思ふらん散り果ててこそ問ふべかりけれ

世を背きて長谷に侍りける頃、入道中將の許より、「まだ住み慣れじかし」など申されければ

谷風に慣れずと如何が思ふらん心は早く澄〔住〕みにしものを

秋の暮つ方、白河にまかりて

都出でて何時か來ぬらん山里のもみぢ葉見れば秋暮れにけり

長谷に侍りける頃、僧の裝束、法服など、關白殿より贈らるとて〔道長〕

いにしへは思ひ掛けきや取り交し斯く着ん物と法の衣を

返し

同じ年契りし有れば君が着る法の衣を立〔裁〕ち後れめや

同じ年の人になん

後朱雀院生れさせ給ひて、七夜に

いとけなき衣の袖は狹くとも劫の石をば撫で盡してん

題知らず

我宿の梅の盛りに來る人は驚くばかり袖ぞ匂へる

歎く事侍りけるに、紅葉の散るを見て

紅葉にも雨にも添ひて降るものは昔を戀ふる淚なりけり

世の中はかなき事多かりける頃、云ひ絕えたる女に

逢ひ見ねど忘れぬ人は常よりも常無き折ぞ戀しかりける

花の盛りに、藤原ノ爲頼(ためより)など伴ひて、岩倉にまかれりけるを、中將宣方(のぶかた)朝臣など「斯く侍らざりけん後の度(たび)だに必ず」と聞えけるを、其年、中將も爲頼も身まかりにける。又の年、彼の花の頃、中務卿具平

親王の許より

春來れば散りにし花も咲きにけり哀れ別れの斯からましかば

返し

行き歸り春や哀れと思ふらん契りし人の又も逢はねば

右公任卿集、以テ古寫一本ヲ校合シ了ル。〔底本トシタル「群書類從本」ノ奥書ナリ〕

昭和二年三月十五日印刷
昭和二年三月二十日發行

［非賣品］

日本古典全集第二回

拾遺和歌集
藤原公任歌集

編纂者　與謝野寛
同　正宗敦夫
同　與謝野晶子
裝幀圖案者　廣川松五郎
發行者　東京府北豐島郡長崎町一六二　長島豐太郎
印刷所　東京府北豐島郡長崎町一六二　新樹製版印刷所
印刷者　高瀬清吉

發行所　東京府北豐島郡長崎町一六二
日本古典全集刊行會
振替口座東京七三〇三二
電話番號小石川七〇九九

日本古典全集本「徒然草」解題の中に生じた誤植を、茲に餘白を借りて次の如く訂正する。

一、解題一頁十一行、及び二頁六行の「徒然草分段抄」は「徒然草文段抄」。

一、三頁二行「後村上天皇の興國元年」は「後宇多天皇の弘安六年」

一、一五頁十行「豊臣氏に味方して云云」は「徳川家康に味方し、豊臣氏に抗して」。

一、猶帝室の御物である烏丸光廣の自筆「徒然草」は、その奥書にある如く、慶長十八年（癸丑、一六一三）の秋に、光廣が自ら板下を書いて印行せしめたのである。「徒然草」の印行は此「慶長版」を最も古しとする。勿論希覯本であるが、同じ板本を德富猪一郎先生も珍藏せられてゐる

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02980 4747

PL
758
.24
A1
1927
cop.2